

仮面ライダーワード～
言霊の統率者～

津上幻夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「言霊」、それは言葉に宿るとされる力。それは人を笑顔にする。ただ、それと同時に傷つけるものにもなる…

常盤高校に通う塾屋ゴン、彼はあの日が来るまで普通の高校生だった。だが、ある事件に巻き込まれ、言霊を操る『言操神ワード』の力を手にする。言霊によって怪物となつた人を解放する為に、彼は『矛』と『盾』を手にし、救い出す。

目次

前章	アーカイブ	1	
第1話	言霊の統率者	5	
第2話	矛盾の存在感	14	
第3話	遭難の白昼夢	22	
第4話	天空の鳥人間	30	
第5話	氷城の学園祭	40	
第6話	怪力の豪剣士	54	
第7話	氷華の新戦士	64	
第8話	決意の復活劇	74	
第9話	双神の出会い	85	
後章	第10話	烈火の超進化	104
	第11話	嘘偽の善行者	115
	第12話	雪解の彼女心	123
	第13話	性悪の逆襲劇	132
	第14話	超越の紅蓮炎	142
	第15話	神屠る破滅竜	152
	第16話	滅亡の秒読見	162
	第17話	言葉の使者達	169
	第18話	全力の救出劇	177
	第19話	二人の決着点	188
	最終回	言霊の終着点	202
	リムール	ワード編	

235	第 2 2 話	216	第 2 1 話
	2 0 2 7 : 言 霊 と 救 済 者		2 0 2 7 : 消 失 の 救 済 者

アーカイブ

1. 登場人物

・主な登場人物…

塾屋ゴン（じゅくやゴン）／仮面ライダーワード

常盤高校2年生。とにかく誰にでも親切にする。野外活動の授業中、山中でワードの力を手にし、仮面ライダーワードとして戦う。国語が小学生の頃から大の得意。好きな本は「言葉の魔法」。話すときにことわざや熟語を入れたがる。

平方言葉（ひらかたことは）

ゴンの同級生で幼馴染。好き嫌が多いけど、ゴンの言う事をなんだかんだ聞く。背が小さかったり、声が可愛らしかったりする為、男子にモテるが、彼女の好みはゴンの為告白は全て断っているとの事。

言操神ワード（げんそうしんわーど）

言霊を操ることのできる神。過去にも人間に言語をもたらしたり、歴史的な革命に関

与したりしてきた。どうやら、ワシントンや徳川家康、クロムウェルなどと会ったことがあるとかないとか…。性別不明である…

・学校の仲間たち…

片名勝治（かたなかつじ）

ゴンと同級生であり、ゴンとは勉強においてライバルである。陸上部短距離走のエースである。エースというだけあって、地方大会で準優勝を経験した事がある程。今は全国大会を目指している。

万葉神楽（ばんようかぐら）

ゴンと同級生であり、ゴンのクラスの学級委員長である。マイペースになりやすい人のお目付役を嫌々任されている。剣道で全国大会に出場する程の実力を持っている。

担任の先生

ゴンから信頼されているクラスの担任の先生。職員室の机には大切な人とのツーショット写真が立てかけられている。また、この学校の卒業生でもある。担当科目は国

語科。

北條志（ほうじょうしるす）

常盤高校の生徒指導課の教員、剣道部の顧問で常に竹刀を持ち歩いており、暇な時間に素振りをしている強面の人。

・謎の組織、「性悪党」…

嫉（ねたみ）

怒（いかり）

哀（かなし）

人間なのに言霊を操れる者達、彼らはそれぞれ中世の貴族衣装、サムライ風の衣装、黒のスーツを着ている。

2. 仮面ライダー

「言霊の統率者」

仮面ライダーワード

言操神ワードの力を具現化した鎧を纏う戦士。ワードドライバを経由して様々な言霊核を使える。その力は無限大。

・ 矛盾の形

ワードの基本形態。矛盾の言霊の力を秘めており、全てのものを貫く矛と絶対に貫かれない盾を使った戦術を得意とする。必殺技はパラドシカルキック。

3. 怪人態

後日追加予定。

4. アイテム紹介

・ ワードドライバ

ワードの力を引き出す神器。中央の装填口に言霊核を装填する。

・ 矛盾核

矛盾の力を宿した言霊核。

・ 無性核

言霊の力が入っていない言霊核。

前章

第1話 言霊の統率者

「おばあちゃん、横断歩道を渡る時は余裕を持って渡ってね。」

一人の青年が、老婆と一緒に横断歩道を渡っていた。その老婆は少し前に横断歩道の信号が点滅している時に侵入した。そんな危険な事態に彼は声を掛け、共に歩いた。

「ありがとう、せめてお名前を……」

「俺の？俺の名前は塾屋ゴン、別に覚えなくてもいいですよ。」

塾屋ゴン、それが彼の名だ。常に人に親切にする、父親からよく聞かされていた言葉、それが今の彼を形作っていると信じていても過言ではない。

彼の家族は父と母。父親は単身赴任中で母親と2人で暮らしている。

彼はふと腕時計を見た。その時計の針は9時50分を指していた。

「これはまた遅刻かな……」

「遅いな…ゴン。」

駅前の公園の時計台は10時を回っていた。その時計の前では、ツインテールが特徴的な可愛らしい女の子が塾屋ゴンを待っていた。

「ごめん！寝坊しちゃった!!」

「遅い!!せつかくこの私平方言葉が独り身で寂しそうにしている君の為にデートに誘ってあげたのに遅刻するなんて…」

平方言葉。塾屋ゴンの同級生であり、幼馴染である。その可愛らしい見た目は、同じクラスになった男子を魅了してきた。彼らは揃いも揃って告白するが、彼女はそれらを全て断ってきた。何故なら、今日の前にいる彼の事が好きだからだ。

「別に寂しくはないんだけどな…まあいいや。」

「はあ…まあ、5分程度だから許してやるか…」

「ゴンによく彼女と出かける事があるが、その8割が遅刻をしている。それも人助けに。だが、彼はそれを理由にはしない。毎回寝坊だとかお腹が痛かったからだとか嘘の

言い訳をしてきた。

彼女も彼女で、本当は人助けをして遅れている事を知っていた。そんな馬鹿みたいに人助けするからこそ彼女は彼に惚れたのだ。

「お前達、明日は登山研修だ。持ち物を忘れないようしっかりと準備するんだぞ。」

翌日の学校、担任の先生が出張しているため代わりにやってきた北條志先生の話を皆肅々と聞いていた。眉毛が濃く強面なその顔に恐怖を抱かないものなんていないだろう。

北條先生は、解散と言い教室を後にした。嵐の過ぎ去った教室は再びいつもの賑わいを戻した。

「明日の登山楽しみだね。」

ゴンの隣に座る言葉が鞆に教科書を仕舞いながら話しかけてきた。

「そうだね。山登りなんて初めてだし。」

「だったら、尚更いい勝負になりそうだな。」

彼らの会話を遮るように後ろから男子生徒が1人現れた。

「勝治、言っておくが勝負は受けないぞ。」

「そう言うなって……」

彼はゴンの自称ライバルで陸上部エース片名勝治。何かとつけてはゴンと競いたがる。それもそうだ。彼は体育以外で一度も彼に勝った事がない。それも後一步のところでだ。それが続いているからか、勝治は勝手にゴンのことをライバル視している。正直ゴンは相手をする事にかなり疲れている。

「勝治、またそうやって勝負をしない。山はそういう所じゃないのよ。」

「うげっ、神楽……」

茶色気味の髪を肩の辺りまで伸ばしている彼女は万葉神楽。彼女はクラスの学級委員長であり、暴走しやすい勝治と言葉、それから何故かゴンのお目付役でもある。そんな彼女、実は剣道の凄腕の持ち主。侮れない……

「とにかく、そんな馬鹿なことしようとしたら……」

彼女は、ゴンの机の上にあったシャーペンを持ち、勝治の頭スレスレに振り下ろした。

「今度は本物の竹刀が飛んでくるわよ。」

「……しようがない、勝負はお預けだな。」

翌日：

ゴン達常盤高校の二年生は登山研修と題して学校近くの山に来ていた。

「はあつ！空気が綺麗だ。」

ゴンは精一杯深呼吸した。

「本当だな。天気も澄んでいるし、まさに勝負……じゃなくて登山日和だな。」

勝治は勝負欲を睨みつけてくる神楽を見て抑え込んだ。

「ホント、登山するのにいい天気ね。いくら登山用に舗装されているとはいえ、山は危険なんだから勝負事をしようとする馬鹿なんて居ないわよね……。」

「ホントだよな、あはは。」

「みんな、早く行こう！」

言葉の声に、3人は足を山へと踏み入れた。今日この日、彼らは大いなる歴史の中へ足を踏み入れることになるとは誰も知らなかった……

山の中腹まで彼らはやってきた。既に他の班は彼らより先にいた。それに対して彼らは、言葉が休憩を沢山するせいで時間がかなり押していた。

「これじゃあ、山頂の到着時刻には遅れるな……」

神楽は腕時計を見ながらそう呟いた。

「ごめん…」

「別にいいよ。疲れたまま歩いて怪我したらもつと大変だから。」

自分のせいで遅れていることを詫びた言葉にゴンは声をかけた。

「ありがとう。」

「さあ、少しは気分変えて楽しく行こうぜ！」

勝治はみんなの前に出て励ました。しかし、それが仇となってしまった。

勝治が前に出た時、左足を乗せていた土が崩れ、彼は傾斜を転げ落ちそうになった。

「勝治！」

ゴンは彼にすぐ様手を伸ばすが、勝治は勢いを止められずそのまま滑り落ちる。

「2人とも!!」

そのゴンの足を言葉と神楽が掴むが、時既に遅し。3人は巻き添いを食らう形で滑りやすい斜面を落ちていった。

「うっ……(´Д`)はどっだ?」

彼らの身体はいつの間にか止まっていた。地面は平行になっていた。どうやら平坦なところに出たらしい。

他の3人も気を失った状態で倒れたままだ。

目の前をふと見ると、人が入れるくらいの洞穴があった。

普通、不気味な洞穴を見つけたら、絶対に入りたがらないだろう。だが、彼は違った。何か『神秘的なもの』を感じ、その穴に徐々に近づいていった。

中には人が2、3人入れる空間と、その中心に古代の石器の様なものがあつた。

「先に見つけられてしまった様だな……」

その様子を外から見ていた人影があった。

それも二つ。1人は、サムライ風の男。もう1人は、中世の貴族風の女だ。

「怒。ここは私に任せなさい。土産を渡してやりましょう。」

「嫉、何をするつもりだ。」

「こうするんです。」

すると女は、勝治の身体を左手で軽々と持ち上げた。

「さあ、貴方の「嫉妬」の心よ。目覚めなさい。」

右手を勝治の胸に当て、何か力を解放させた。彼の身体は、徐々に赤い紅蓮の炎に包まれ始めた。しかし、身体が焼き焦げたわけではない。

その身体は人間とは全く違う異質の怪物へと変わっていた。

「なんだろう、これ……」

世界のどの古代遺跡のものとも一致しないその石器、彼は不思議に思い手に取った……手にとってしまった。

すると、その石器は紫色の光を放ち始めた。徐々に眩しくなっていくその光は、ゴンをも飲み込み、洞穴を砕くほどにまで達する。

外で悶絶する怪物、そこまで光が到達する。眩しさに、怪物は目を塞いだ。

その光が収まると、目の前に人型の何かがあった。紫の集光を放つその肉体、腰には先程の石器と同じ形をしているが、黒と銀に輝いていた。そして、その真ん中には、「矛盾」という文字が嵌め込まれている。

緑色の眼だけがあるその顔から、言葉が発せられた。

「ワシの眠りを妨げたのは……どいつじゃ。」

第2話 矛盾の存在感

「ワシの眠りを妨げたのは…どいつじゃ。」

そう言い放った紫色の異形の戦士は、目の前でもがき苦しむ勝治が変身した怪物を見た。

「彼奴らの仕業か…」

戦士は右手を翳した。そして、『何か』を読み取った。

全てを読み切った戦士は、右手に身長程の大きな矛を手にとった。

「余程この男に嫉妬していたのか…今すぐその呪縛から解き放ち、正き道へと導いてやろう。」

怪物は、遂に暴走を始めた。

戦士に向かって走り出し、拳を振りかざす。

戦士が左腕の盾を構えその衝撃を完全に防ぐその姿は、巨壁のようだった。びくともしない戦士は、矛を怪物の左肩に突き刺す。

「終わりじゃー！」

『ちよつと待った！』

その時、戦士の中からゴンの声が聞こえた。

「なんじゃ！せつかくいい所じゃったのに。」

『当たり前だ！その一撃で勝治が死ぬかもしれないだろ!!』

「大丈夫じゃ、あの小童は感情を暴走させているだけ。ワシがトドメを刺せば、救える。」

ゴンは、しばらく考えると、答えを出した。『頼む、勝治を助けてくれ。』

「物分かりが良くて助かる。」

その戦士は、腰の『矛盾』の文字を一度上に取り外し、再び嵌め込んだ。そうする事で、戦士の身体全体に力が溢れ出す。

「必殺書き込み！」「パラドシカルキック！」

再び歯向かってくる怪物を戦士は右脚で蹴り上げた。暴走する感情と勝治を分離させ、分離した感情だけを爆散させる。

手慣れた手つきで地面に倒れそうな彼を左手で軽々と支え、分離した感情を『無』と書かれた核に吸収させた。

無が有に転じるように、『無』の核が『烈火』の核へと変貌した。

「終わったか。お主、身体を変えそう。」

すると、紫色の戦士の姿は素のゴンの姿へと戻っていった。

「なんだったんだ…一体。」

困惑するゴンを置いていくかの様に、謎の声と戦士は消えていった。

その後、ゴン達4人は捜索に来ていた教員によって救出、勝治を始めとした全員擦り傷程度で済んだ。

どこの怪我をしていない勝治の姿にゴンは驚きしかなかったが、とりあえず健康だからいいかとそのままにした。

その日の夜、自室であの場所で拾った道具を見ながらスマホを使い様々な古代の遺産を調べた。何か一致するものがあるのではと考えたが、満足する解答は得られなかった。

「これは一体なんなんだ…」

『お主、先程から触りすぎだぞ。』

「またあの声…」

先程謎の戦士の時にも聞こえた中性的な声。脳に響くその声の元を探した。

『ワシは、お主と共にあったのだ。何処を探しても居らぬぞ。』

「一つになつた…?」

『そうじゃ。言霊の統率者、言操神ワードとしてな。』

「ワード…あのジョーカーの仮面ライダーみたいなの事?」

『ジョーカー? 仮面ライダー? 聞いたことない言葉ばかりじゃ。』

今、彼の脳内ではあの戦士、ワードが目の前に居た。その目の前に居る者と会話している感覚に陥っている。

「とにかく…あの昼間の奴はなんなんだ? 勝治のあの姿は…」

『そう逸るな、選ばれたからには一つづつ教えよう。』

「じゃあ、名前は…」

『そういえば名乗っていなかったな。我が名は、言操神ワード。言葉を操る神と書く。』

ワードと名乗った戦士は、ゴンの顔をマジマジと見た。

『お主…確か名は塾屋ゴンと言つたな。其方は何故ワシを見つけたのだ?』

「それは、たまたま山で迷つた時に見つけた祠で…」

『先代が立てたあれか…』

「先代？」

『ワードは時を超えて受け継がれてある。有名な者といえば、イングランド王国のクロムウェルや日本の徳川家康、アメリカのワシントンじゃな。他にも沢山おるが…』

「その話はまた今度聞くよ、歴史詳しくないし。」

ゴン は 目的 から 外れ そう になっ た た め、 強 制 的 に 終 わ ら せ た。

「あの勝治の怪物の姿ってなんなんだ？」

『あれは人陰。人の奥底に眠る感情をあのような怪物の姿に変え感情のままに生きる。まさに人の陰を映した怪物じゃ。先程其方の友人が引き出された感情は嫉妬。他にも怒り、哀しみ、喜び、楽しみの計5種類がある。』

「怪物化した人間はどうなるんだ？」

『怪物になった人間は、ワシの力を使って封印しなければあのまま死んでいく。つまり、ワシのワードの力で有れば人陰を元の人の姿に還すことができる。』

「つまり、俺じゃなきゃ助けられないってこと？」

『そういうことじゃな…』

その時、ワードは言葉を詰まらせた。

「どうしたんだ？」

『人陰じゃ、それもかなり近い。』

ワードの言った通り、彼の家の近くの路地で所々身体が燃えている男がいた。彼はゴンと同じ常盤高校の制服を着ていた…

「いた！彼は確か同じクラスの玄地…なんで？」

「塾屋…殺す!!」

『お主、ワシと代われ!』

玄地は緑の炎の怪物へと姿を変えた。緑の炎がゴンの左肩スレスレに迫る。普通の人間なら避けられないその一撃を、神の力を宿したゴンはまさに神の所業で交わした。

『ワシの身体に傷つけようだなんて烏滸がましい…』

ベルトを出現させ、右手には矛盾核を持っているゴン…ワードは怪物を見た。

『変身』

「核、読み取り」「矛盾する運命…ワード、矛盾!」

核が嵌め込まれたベルトは紫の光を放つ。力を読み取り、それを放出し鎧に変える。左腕の盾と右腕の矛、紫の身体に翠の二つの複眼が夜の闇に現れた。

『奴は怒りの感情に飲まれたか…それもお主へのな。』

「俺に…」

『どうやら、いつも仲良くしているお主の幼馴染の女をお主が独占している事に苛立っている様じゃ。』

言葉をゴンは思い浮かべた。確かに彼女は見た目だけはいい女の子だ。

「勝治に続いて玄地も俺への感情で：ワード、言いたい事は分かるよな。」

『そうじゃな。其方の級友、止めて見せようとはしないか。』

再び怪物は緑の炎の拳をぶつけた。ワードはその攻撃を盾で受け止め、核の力を最大限に引き出した。必殺技の発動だ。

「必殺書き込み！」『パラドシカルランサー！』

盾で攻撃を耐え、紫の光を放つ矛を怪物の脇腹に突き刺した。

「これで一件落着だな。」

変身を解いたゴンは、玄地から得た核、跳速と書かれた核を見た。

『やはり、お主を選んで正解じゃった。素質は十分にある。』

「そう、ありがとう。」

ワードの意識が徐々に薄れていく様な感覚がした。

『ワシは常にお主と共にある。だから何をやってもワシには筒抜けじゃぞ。』

「えっ、それってお風呂やトイレも一緒なの！」

『大丈夫じゃ、神に性別なんぞない。』

「いや、そう言う事じゃないから!!!」

こうしてワードは青年の二元、再び現世へと蘇った。最後の聖戦の為に…

第3話 遭難の白昼夢

「うあああつ!!!」

あの山で、俺は叫んでいた…なんでかは分からない。ただ、何か心の奥底のものを駆り立てるような気がした。その獣の咆哮のようなものは、目の前の人影が見ていた。

紫の戦士…一体誰なんだ…

「はあ…またあの夢か…」

あの遭難しそうになった日、俺は変な夢を見ていた。獣のように暴れ回る俺を、誰かが止める夢を…あの紫の戦士が止める夢を…

毎日見るわけではないが、1週間に3、4回くらい見る。正直、あれがなんなのかは分からない…

「あー畜生！また負けた…」

俺は漢字の小テストを返却された。50点満点で42点。ゴンは48点だった。

「また俺が勝っちゃったね。」

満遍の笑みでその台詞…殴りたくなってくる。その衝動を抑え、俺はテストをしまった。

またこれだ。俺は今まで自分の得意分野、走る事と社会科目以外では一度も勝つたことがない…どれだけ努力しても勝てない、悔しい以外の何者でもない。

でも、何故か前みたいな気分が完全に下がり切る感覚にはならなかった。何故か次こそは勝つという決意がじわじわと滲み出ていた。

きつとあの夢のせいか…

「勝治。」

その時、俺の後ろから冷たいものが首筋に当たり、背筋が本当に凍りそうになり悲鳴を上げた。

「神楽か…驚かせるなよ。」

「あら、テストでまたゴンに負けた君にラーメンを奢ってあげようと思ってね。」

「ああ、ありがとう。集合はいつものでいいか？」

いつもの、部活終わりに校門でという意味だ。

俺達はよくラーメンを食べに行く。だいたい、俺に何かあった時か彼女に何かあった時に、互いに奢りあつて。恐らく今回も小テストの慰め、だろうな。

「ゴン、一緒に帰ろ。」

同刻、言葉はゴンと共に帰ろうと誘っていた。 gon は快く頷き、教室を後にした。

「そういうえば、最近ゴン何か変わった？」

帰り道、言葉はさりげなくその事を話したが、ゴンにとっては鳥肌ものだった。自分がワードと融合したのがばれたのか…そう思った。

「い、いやー特に変わってないかなー」

「ふーん、なんか恋人でもできたの？」

「えっ…」

俺はその問いかけに半分正解じゃないかという事を思った…が、彼女はそれをすぐに訂正した。

「そんなわけないか…ゴンには昔から大好きな『フウカさん』って人がいるんだからね。」
「フウカさんは…」

フウカさん、ゴンが小学校低学年の頃、何度か遊んだことのある年上の女の子だ。あの日を境にパタリと会わなくなつた…というより会えなくなつた。毎日顔を合わせていたのに、突然会えなくなつて…

「ほーら、また寂しそうな顔してる。」

言葉が俺を現世に呼び戻した。やっぱり、あの人の事は忘れるべきなのか…

「お待ちせ、勝治。」

校門前で待っていた勝治の前に部活を終えた神楽がやってきた。ほのかに汗の匂いがする。彼はその匂いが好きだった。変な意味とかではなく、いろんなことに毎日手を抜かず本気でやっていると伝わってきてこっちまで頑張れる気になれるからだ。勝治は全力で物事に取り組むことが大好きだ。だからそういうものに敏感なのだ。

「行くうか。」

2人は、夕日が殆ど見えない空の下、駅の近くにあるラーメン店まで歩いた。

そのラーメン屋は、2人は常連でこうして仲良くなったのもここでたまたま出会ったからという理由だ。2人はこの名物エレメンタルラーメンが大好きだ。

エレメンタルラーメンとは、ラーメンに入っているありとあらゆる具材が五大元素のようだからそんな名前が付いている。

その2人が行こうとしているラーメン屋には、サムライ風の男、怒の姿があつた。

彼は丁寧な仕草でラーメンを食し、スープまで飲み干した。

「あんた、いい食いつぶりだね。」

「そうか。」

店主の会話を簡単に返した怒は、金をラーメンの値段丁度を出した。

「520円ね。」

「ああ、それともう一つ。」

「なんだい？」

「お前、目の前の工事業者に怒りがあるだろ？」

店主はその言葉にはあ？というふうには顔に出した。

「もうすぐそいつらがくる。その『怒り』ぶつけてもらおうか。」

店主は、怒りに渡された小銭を触ると、突然苦しみ出した。そして身体の各部から青い炎が現れた。

怒りが店を出ると同時にその工事業者達が4、5人で入店してきた。

「もうすぐだな。」

勝治と神楽はラーメン屋のすぐ目の前まで来ていた。

「出て行け!!」

その時、引き戸の扉をぶち破り、作業着をきた男が4、5人一斉に投げ飛ばされていた。

「なんだよ、突然!」

「お前達の工事のせいで音はうるさいわ、杜撰な物の管理で道に落下してきて通行人が危険な目に遭うわ…そのせいでここの客足が先月より減ってるんだよ!許せない…絶対に!!!」

その時、青い炎を被ったラーメン店主が現れた。その身体は、炎が完全に体を覆い隠

すのと同時に、怪物の姿へと変わった。

「なんだよあれ！」

勝治は叫んだ。しかし、神楽には驚く様子は無かったが、額には大量の汗が噴き出ていた。

「どうすりゃあいいんだよ……」

勝治はそう迷っていた……その時だった。

2人を飛び越えるように何か横切った。

そして、目の前に立ち、怪人を見た。

その姿に勝治は見覚えがあった。あの夢の中で自分と戦った戦士だと。

「早く逃げるのじゃ。」

その容姿からは想像し難い声で2人に逃げるよう催促した。

彼はそれにとりあえず従い、その場を後にした。

「さて、一瞬で終わらせよう。」

核の力を放出させたワードは、その力を矛先に溜めた。

「必殺書き込み！」「パラドシカルランサー！」

矛先は、怪物を一瞬で貫き、ラーメン店主の姿へと戻した。

無だったその核には『剛力』の文字が刻み込まれた。

「また、あの戦士だ。」
「ゴン…一体あれはなんなの…」

第4話 天空の鳥人間

私が目を覚ましたあの時、世界は光に包まれていた。

眩しすぎて、開いたばかりの目をすぐに閉じた。

再び目を開けると、そこには見たことのない紫の戦士と化け物がいた。

なんでだろ…なんで紫の方は『戦士』だと思ったのだろうか…

2体は、互いの技で戦っている…というよりは戦士の方が有利だった。

紫の戦士は、渾身の蹴りで化け物を倒した。

その化け物から勝治が倒れてくるのははっきりと見えた…

戦闘を終えた紫の戦士はゴンの姿になった。

一体、あの姿はなんなんだ…2人の身体に何が起きたのか…

今もそれしか考えていられなかった。

「面!!」

私の目の前で、その試合は幕を閉じた。
神楽

私の学校の負けだ。先鋒は圧勝だったが、続く次鋒、中堅…そして副将で勝負は決した。

「そっか、残念だったね。」

「後一步のところだったな。」

私は、その話を勝治とゴンに話した。

2人は共に常盤高校ここが勝てなかったことを悔やんでいた。ただ、私はここで悔しがって終わりにしない。次こそは必ず勝つ。でなければ勝てるものも勝てなくなる。

放課後の道場。部活は休みだが、私は忘れ物を取りに来た。

汗の匂いが染み付いた木の床を歩いて道場に向かうと、道着を来て上座の方を向いて座っている姿があった。

私は、それが誰か分からなかった。ただ、誰かが来たことを察したのかその鎧はこちらを向いた。鎧の前掛けには、「弧敷」という文字が白で書かれていた。

「夏希か、ここで何している?」

弧敷夏希、彼女は私と同じ二年生で昨日の試合にも副将として出ていた。あの私の目の前で負けてしまったのが彼女だ。

「いえ、心を落ち着かせようと。」

面の下から、翠に綺麗に輝く瞳が見えた。そういえば前に鎧を着て正座すると落ち着くって話していたことを思い出した。きつと昨日の試合のことを…

「そうか…」

私は彼女の隣に腰を下ろした。

沈黙がほんの少し流れた。夏希にとつととても不安な間だった。

「その、昨日はごめんなさい。私のせいで勝てなくて。」

「…気にすることはないよ。また次頑張ろ。」

私は、そう彼女の目を見た。彼女は、面をゆっくりと取り床に置いた。短い髪から汗が滴るのが薄らと見えた。私に来る前に素振りでもしていたのか…

「私、いつもこんな調子で…いつも肝心な時に負けて。本当みんなに申し訳なくて…」

彼女はいつも悩みを自分の心の箱にしまっってしまう癖がある。本当水臭いやつ、そん

な事誰も気にしてないよ。

「みんな、そんな事一人も言っていないだろ？」

「でも…」

「…とにかく、自信を持って。」

私は、人を慰めるのは苦手だ。正直、何をすれば立ち直ってくれるのか分からない：
アイツ以外…。そういえば、なんで私はアイツの慰め方を知ってるんだ…？

神楽が去った後の道場で、夏希は再び竹刀を握りしめ素振りを始めた。彼女にとって剣道は自分の人生そのものだった。幼い頃から剣道をすることに憧れていた。竹刀を振り、勇ましく戦うその姿をカッコいいと思った。小学生になってから地元の名道場入門、そこで初めて竹刀を振った。最初は彼女自身が竹刀に振り回される感覚だったが、いつの間にか手の延長のように操れるようになった。

中学生になってからは剣道部に入学した。ここでは期待の新星として注目された。そんな中で最初の大会、決勝の舞台で出会ったのが万葉神楽だった。神楽の竹刀は、自身の腕以上のものだった。剣と一心同体になっている、そんな感覚がした。一方的に打ち負かされた彼女は、今度こそは勝つと誓った。

しかし、未だ彼女に勝てずにいた。彼女に勝てなければ……強くなれない……でも、「その強さは私にない……」

「勝てなくて、悲しいのか。」

その時、彼女に語りかける男の声がした。彼女が振り返ると、そこには黒いスーツを来た青年が立っていた。まるでさつきまで葬式に行っていたのかと聞かれてもおおしくないような見た目の彼は、徐々に夏希に近づいた。

「あなたに……何が分かるの?」

彼女は突き放すように言った。だが、心の中では、分かってくれるかもしれない……そう感じた。

「分かるさ……その『哀しみ』を僕にも分からせてくれ。」

黒スーツの男、『哀』は彼女の手を握った。

すると、彼女の身体が水に浸っているような感覚に陥った。彼女は、徐々にうめき始めた。その顔には、頬を流れる一筋の涙があった。

その頃には、哀の姿はなく、代わりに忘れ物を取りに来るといふ本来の目的を思い出し帰ってきた神楽が現れた。

「な……なんなのよ……」

神楽が驚きの声を上げるよりも早く夏希の身体はみるみる姿を変えた。白い鳥のようなその姿はまるで湖に脚をつけた白鳥のようだった。

神楽は、自分が襲われるのではと急いで逃げた。先日のラーメン屋で見た作業服の男達みたいにい…

「うわっ!!」

その時、廊下の角で彼女の身体は地面に倒れた。死角から別の人物が現れたのだ。

「ごめんなさいー」

すぐに相手が謝ってきた。彼女はその声で誰なのかが分かった。塾屋ゴンだと…

「私は大丈夫。」

そう言って顔を上げると、ちょうどゴンと目が合った。ふと、彼なら救えるのでは、彼女を…あの紫の戦士となって…

「ゴン…」

彼女がそう言ったその時だった。白い鳥の怪物は顔の嘴を突き出しながら神楽が走ってきた廊下を全速力で飛んできた。

「神楽、危ない!!」

ゴンは全力で神楽の身体を押し倒して回避した。

「早く逃げて!!」

ゴンは、体勢を立て直し攻撃を試みようとする怪物を抑え込み、神楽に逃げるよう促した。だが、彼女の反応は違った。

「お願い…夏希を助けて!あなたがあの山で勝治を救った時の様に!」

ゴンはその回答に驚いた。その驚きを顔には出さなかった。助けての声で、彼の中に潜むワードの力が目覚めたのだ。

『よろしい、ならやってやろではないか。』

ゴンは、矛盾核を取り出しベルトに装填した。変身の掛け声で、ゴンの体は、一瞬にしてあの時神楽が見た紫の戦士、ワードへと変わった。

ワードは、怪物に攻撃を仕掛けようとする。が、怪物は自身の白い翼を広げて、窓ガラスを突き破るとそのまま上空へと飛び出した。

「あれじゃあ追えないな…」

中で意思だけ存在するゴンが言った。しかし、ワードは動揺を全くしていなかった。

『あちらが空を飛ぶなら、こちららも空へ飛べるようになれば良い。』

そう言うと、ワードは『跳速』と書かれた核を取り出した。玄地から得た力だ。

「跳速、跳ぶ様に速く走るって意味だけど本当に飛べるの?」

ゴンはやや恐怖気味に言った、彼は高い所が苦手なのだ。

『矛盾以外の核を使っても死にはしない。』

そう言うと、ベルトにハマっている矛盾核を取り出し、跳速核に付け替えた。

「核、読み取り」「跳躍する速さ：ワード、跳速！」

紫だった身体は、核と同じ草原の様な緑色に変化、両腕の武器は腕から外れると合成し形状が変化、弓のような形になる。鷹のような顔面には金色のバイザーが装備され、背中には美しい翼が付いている。「天空の鳥人間」、ワード跳速の形の完成だ。

その頃、夏希が変身した怪物は街を見たわせる高さまで飛んでいた、そのまま宇宙にまで飛んでいくのか、そんな雰囲気が出た。が、怪物は街のある地点を見るとそこへ急降下しようとした。そこには、ゴンや言葉の住む家がある住宅街だ。

『待つんじゃない!!』

その時、音速をも越えんとする勢いでワードが怪物を追い越した。そして、後ろを向くとすぐ様弓を構えた。緑色に光る矢が放たれると、怪物の右翼を貫いた。

「今だー！」

ゴンが叫ぶと、ワードは再び弓を構えた。

「必殺書き込み」「スピードスナイパー！」

その攻撃は、怪物の身体を貫き、爆散させた。

爆炎の中から、お姫様抱っこされている弧敷夏希とワードが現れた。

ワードはそのまま神楽の待つ学校の屋上に降り立ち、夏希をゆっくり下ろした。

そのタイミングでゴンは変身を解き、神楽に顔を見せた。

「夏希は大丈夫？」

神楽はゴンの顔を見た。

「うん、時期に目が覚めるよ。」

そう言った直後、夏希は自分の身体を起こした。

「今回も見つけられなかった様ね。」

別のビルの屋上で、性悪党の3人は戦闘の様子を見ていた。

「だが、今回で分かったこともある。」

嫉の残念がる台詞に哀は答えた。

「何がだ？」

怒は哀に聞く。

「やはり、彼女はこの街のどこかにいると言うことが…」

第5話 氷城の学園祭

「次はどうするんだ？」

夜の闇に包まれる廃屋に怒の姿はあった。彼は哀と嫉と共に月を見ていた。

「哀……お前なら何か……」

怒が哀の方を向き策を得ようとした。しかし、彼は首にかけてペンダントを悲しそうな目で見つめ上の空だった。

「……まだそれを持っていたのか？」

「……どうにも、捨てられなくてな。」哀は寂しく呟いた。

「人間だった記憶を忘れなさい。貴方は選ばれた者の1人……愚かな人間を作り変える存在なのだから……」

嫉のその言葉を哀は生返事で返した。

「どうやら新たに現れたワードに苦戦している様だね。」その時、3人の背後から新たな人物が顔を出した。魔導師の様なローブは彼らと同じように黒色だった。

「……お前は……？」怒は初目にかかる彼の名を聞こうとした。

「ワード…また僕を楽しませて欲しいよ。」

月は徐々に黒い雲に隠れていった。

「今週、学園祭なのに雨が降るなんてやだねー。」

教室の窓際に寄りかかりながら平方言葉は、今にも雷が降ってきそうな大雨に見舞われる外を見ていた。

「でも、当日の土曜日は晴れるみたいだよ。」

彼女の目の前に座っていた女子がそう答えた。

「それなら、いいか。美月ちゃんは学園祭楽しみ？」

「うん、とつても。早く飾りつけしたいな…」

山寺美月、手芸部に所属する彼女は着飾ることが大好きだ。教室の装飾を任された彼女は、クラスの誰よりも学園祭を楽しみにしていた。

彼女は、そう言うスマートフォンを取り出し、『氷華』と検索をかけた。

「なんか俺って雨の日になるとどうも調子悪くなるんだよな。」

放課後、飾りつけに使う材料の入った箱を片名勝治と塾屋ゴンはそれぞれ一つずつ持って教室まで運んでいた。

「まあ、分からなくもないね。何というか、気分がブルーになるといっつか…」

ゴンもそう返した。

『お主、早く仕事を終わらせるのじゃ！早く帰ってワシを休ませろ。』

雑談しながら歩いているゴンの脳内へワードは強く声をかけた。

「そう言われても…」

『ええい、そんな物ワードになって一瞬にして片付けてやるわい!』
「ダメだつて、そんなことしちや!」

ついやってしまった…そうゴンは思った。あまりにもわがままを言うワードに対してつい声を荒げてしまった。

「どうした? ゴン?」

生憎、廊下には勝治しか居なくてよかつた。だが、彼の声を聞いていた勝治は今の怒号が気になってしまった。

「あーいやー、その…」

「ははーん…そう言うことか。」ニヤニヤとした顔を勝治は近づける。

「ど、どう言うことだよ…」

「あれだろ? 妄想だろ…自分の中に魔物を飼っているけど、そいつが今にも暴れ出そうとしているから宥めようよ…」

「そんなわけないだろ! 早く運ぼう!」ゴンはあながち間違いではないことに恐怖を覚えたが、彼の気を逸らして自分の仕事に戻った。ワードも、自分のことがバレるのが嫌なのか、そこで黙ってしまった。

「…本当に、そんな訳ないよな。」

「美月さん、ここに置いておくね。」

2人は教室に着くと、机の上で黙々と作業をする美月の側に置いた。

「ありがとう塾屋君、片名君。」

「いいってことよ。」勝治は、頭を掻きながら言う。

ゴンは机の上に広げられた青くキラキラした粉を見て「これは？」と聞いた。

「これは、氷華って言う現象を再現して学園祭で使おうかなって思ってたよ。」

「ゴン達のクラスの出し物は、『氷の美術展』。クラスメイト達が作った美術作品を飾ったり、美月主催で手芸体験ができる。その氷を再現する事に彼女は特に力をかけたよ。」

「楽しみにしてるよ。」

「ありがとう。」

2人は、再び荷物を運ぶ為に廊下へと出た。

「よし、とりあえずできたけど…」

A4サイズの青い紙に先程の粉をつけたものを、試作で完成させた。しかし、彼女はその出来具合に満足していなかった。

「もつと…みんなが楽しめるような…そんなものを…」

彼女の目の色が変わった。

黒い瞳に青が薄く被さる…そして、それが徐々に身体を覆っていく。彼女は、最初何が起こっているのか分からず固まっていた。

「君の飾りつけ…もつと見たいな。もつと綺麗で…『楽しい』ものを…」

その言葉を聞いた美月は、変化を受け入れ、徐々に怪物へと姿を変えた。青く透き通った身体は、氷のように冷たく、綺麗なものだった。

「これで…」

怪物は手を教室の壁に翳した。すると、そこから冷気が発生し教室の壁が自分の思い描いていた氷華が壁を覆い尽くした。

「美月ちゃん、進んでる…?」

その時、教室の扉を言葉が開けた。

『お主、人陰が現れた。それもかなり近くに。』

その時、さつきまで沈黙していたワードが声を出した。人陰の出現を知らせる合図だ。

「分かった…」

「どうした？」勝治がゴンの方を向いた。

「悪い、勝治。トイレ行ってくるから先進めてて。」

「あつ…待てよ…」その言葉はゴンには届かないものだった。

ゴンは、ワードと共に怪物が近くにいることを感じていく。その反応が一番強くなったのは自身の教室に近づいた時。扉が開けっ放しになっていることに気づいたゴンは、

中を見た。

そこは、一面氷の祠に入ったような雰囲気だった。氷が壁一面に張り巡らされ、光によつて綺麗に反射していた。そして、そこに2つの影があつたことに気づいた。立つてゐる方の影は青の人陰、恐らくそいつの仕業だろう。一方、倒れてゐる方は女子生徒である事以外分からなかつた。氷漬けにされ、意識が薄れていた。

「大丈夫ですか？」

ゴンは倒れてゐる生徒に近づく。その顔を恐る恐る見ると、平方言葉である事がようやく分かつた。

「言葉……」かろうじて意識はあつたが、寒さで口が痺んで話せなかつた。

「お前……よくも言葉を！」

立ち上がったゴンの腰にはワードライバーが巻かれている。

「ふふ、人を凍らせるの……楽しい。お前も、氷漬けにされてしまえ！」

先程言葉を凍らせた時のように冷気を放つた怪物。

しかし、それは神の力を手にしたワードには効かなかつた。

盾を前に突き出し、必死に氷攻撃を防ぐワード。

怪物は、攻撃が無駄だと気付いた。そして、すぐさま教室の窓ガラスを突き破り、豪

雨の中へと飛び出していった。

「待てー！」

ワードもその後を追いかけて外へと飛び出す。

そのワードが飛び出したのと同じタイミングで、勝治が教室にやってきた。そこで倒れている言葉の姿を見て驚愕した。

ワードは、雨の中の戦闘を強いられた。

敵は氷を操る、そして、この雨はその氷のもとになる。つまり、怪物が常に放つ寒さで周りの雨が凍り、身体に纏わりついていく。

「まずいな……ここは一旦離れよう。」

ワードは、ドライバーの核を跳速にすぐ様切り替える。

「核、読み取り」「跳躍する速さ：ワード、跳速！」

紫の体色は緑に変化、金色のバイザーと翼を持つ跳速の形へとワードは姿を変える。

翼を使い、空へと飛び出そうとワードは画策する。しかし、再び冷気を放った怪物の前に翼と両足を凍らされてしまった。

「しまったー！」

怪物は、そのまま冷気をワードに浴びせる。全身が白い氷の粒に覆われたワード。後

もう一步で完全に凍結される…しかし、そこで氷の攻撃は止まってしまふ。

『攻撃が止んだ…』ゴンが呟く。

「何で…氷が出ない。」

『もしかして、今がチャンスなんじゃ…』

「どうやらその様じゃ！」ワードは、弓を召喚すると核をセットした。

「必殺書き込み」「スピードスナイパー！」

一直線に雨を貫いていく翠の矢、怪物の胸部を一瞬にして貫いてみせた。

その貫かれた部分から手、脚、そして顔へとヒビが走る。

ワードは、核を怪物に当てると、力を取り除いた。

精製されたのは『氷河』の核だった。そして、怪物からは意識を失った山寺美月が現れた。雨は上がり、太陽が顔を出し始めた。

教室で勝治に介抱されていた言葉や教室の壁も元通りの姿へと戻る。

「大丈夫か？言葉。」

「うん、それよりゴンは？」

その時、校庭から何かが高速で空へと飛んでいった。2人はその動きに全く気が付かなかった。

『氷河か…使ったら綺麗なんだろうな…』

ゴンは心の中でワードに言う。

「なら、この後試してみるか？」

「標的はもうすぐ…か。」

雨上がりの空を悠々と飛ぶワードに、黒い光の弾丸が迫った。

それは、ワードが氷華コアを持つ左手を撃ち抜いた。

「何！まだ敵が残っていたのか！」

ワードが目を凝らし弾丸が現れた下を見る。そこには、ワードが落とした氷河核を手に取る黒い人形の何かがいた。

『誰？』

「分からぬ、じゃが、逃すわけには行かない!!」

ワードは人影を追う。しかし、ワードが地上に着いた頃には姿を消していた。

「はい、どうぞ。」

「お姉ちゃん、ありがとう。」

それから数日、常盤高校の学園祭は無事開催され、山寺美月もいつも通りの生活をしてきた。怪物だった時の記憶はないが。彼女は、手芸体験に来た子どもたちに笑顔を見せていた。

「とりあえず、なんとかできてよかった。」ゴンは呟いた。

壁の飾りは、結局彼女の思い通りにはならず、ただ青いだけの空間だった。ただ、彼女は笑顔で帰っていく子どもたちを見ているだけで満足だった。

休憩時間、ゴンは他のクラスの出し物を見ていた。

その時、すれ違った女性が、財布を落とした。そのことに気づいた彼は、拾い上げると、すぐに彼女を呼び止めた。

茶髪でストレートに伸ばした彼女は振り返ると、ゴンに近づいた。

ゴンは、その姿に見惚れていた：

「ありがとう。」二十歳ぐらいの彼女は、財布を受け取ると、再び歩き出した。

「あの人…あの人だ…」

そう、ゴンはただ見惚れていた訳ではなかった：彼女が…あの…

「あのワード、手応えがありそうだ。今度は俺が行く。」

第6話 怪力の豪剣士

「よおゴン！」朝、片名勝治はいつも通り塾屋ゴンに声をかけた。

「あ、おはよう。」いつもならおはようと返すゴン。しかし、今日は答える前に数秒の間があった。

ゴンはそのまま教室の自分の席に座った。

勝治は首を傾げながら自分の席に座った。

「勝治が考え事だなんて珍しいわね。」

隣の席の万葉神楽が珍しい姿を見せる彼に聞いた。

「いや、あいつ最近なんか雰囲気変わった気がするんだよな。」

「雰囲気が変わった？」

神楽は一瞬、ワードのことかと思いき身構えた。ワードの事は何があんでも隠せと彼に言われているからだ。

「ああ、なんか学園祭の後から上の空って感じで。もしかして一目惚れとかか？」

「さあ……？」

「つて事があつただけだ。」

昼休み、神楽はゴンを連れて屋上で弁当を食べていた。

「へえ…」ゴンは生返事で返す。

「へえつて貴方ね…自分のそう言う事言われて嫌つて思わないの？」

「だつて、事実だし。」ゴンはそう呟いた。確かに学園祭の日、自分の初恋の人物と再会した…

「事実なら確かに嫌つて言わないわね…え？」神楽は固まった。驚きの表情でゴンを見る。

「つて言つても小学生の頃の話。『フウカ』つて言う人なただけど、年上の人で仲良くしてくれたんだ。でも、ある日を境に連絡が取れなくなつて…」

「そんな事が…」

その様子を、扉の陰から勝治と言葉が見ていた。

「まさか…そんな訳。」言葉が怒りを込めて呟いた。

「そんな訳って？」勝治が聞き返す。

「あの2人が付き合ってるってことよ！そんな事実許さない!!」

「あの2人が…確かに、お似合いかもな…」

正直、悔しかった。口ではそうなんでも言えるが。そう勝治は思った。何故だが分からないが。

「それにしても、ここ最近人陰の事件が増えたわね。」部活のない神楽はゴンと帰っていた。

「そうだね。ワードの復活と関係があるのか？」 gon はワードに聞く。

『恐らく、ワシが復活したことで彼奴等は警戒しておるのだろう。』脳内でワードが答える。

「ワードを警戒して…」

「それなら、確かに納得だわ。敵が再び現れたのなら誰だつて警戒するしね。」

「警戒つて何に？」

その時、2人の後ろに誰かが近寄つた。

恐る恐る振り返ると、そこには目を斜めに吊り上げている言葉の姿があつた。

「げ！言葉！」

「何よ！2人してイチヤイチャしちやつて！許さないわよ！」

「え、違うよ！」

ゴンは詰め寄つてくる言葉に驚き上手く言葉を返せない。

「しようがない…ゴン。本当のこと話すよ。」神楽が口を開いた。

「実は…」

「ダメだ！言つちやダメだ!!」ゴンが叫ぶが神楽はやめない。

「私達、今度貴女の誕生日にサプライズしようと思つて…それで警戒されない様について話をしてたのよ。」

「なーんだ！そう言うことか！よかったよかった!!」言葉は先程の怒りを忘れてすっかり笑顔になっていた。

「バレルかと思つた…」ゴンとワードはこの一瞬で疲れ果て倒れそうになった。

言葉は、ありもしない誕生日サプライズを知ってしまった謝罪に2人に流行りのパフェを奢つた。ゴンはチョコ系、言葉は生クリーム系、神楽はいちご系のパフェを頼んだ。

街中を歩きながら、彼らはパフェを頬張つた。

「そうだな…どの人間にしようか…」

ゴン達がすぐそこにいる街の一角で怒は標的を探していた。目立つ黒のサムライ姿は、周りの人間達が目を惹くほどだった。

「…この時代は歩きづらいな。」そう呟いた時、人が騒ぐ声が出た。

その方向を見ると、少年がゲームソフト数本を手に持ち走っていた。その後ろには、ゲームショップの店員であろう人物が追いかけていた。

「待ちなさい！その子ども捕まえろ！万引きだ！」

その少年は真つ直ぐ怒の方へと走ってきた。

「丁度いい。」

怒は、タイミングよく迫る少年の腕を軽々と掴み上げた。

「おじさん！離せよ！」少年が騒ぐ。

「そうだよな。俺が捕まえなければ万引き犯にならないからな……もつと怒れ！」怒は自身の手を少年に流し込む。

「その『怒り』、俺の為に使い！」力を流し込まれた少年は、徐々に身体を変化させ、口ポット玩具の様な見た目へと変化した。

その姿を見た通行人は叫び、逃げ始めた。

その叫びはゴン達の元にすぐ様届いた。

「何？」言葉が振り返る。

「俺行つてくる、言葉と神楽は安全な所へ。」 gon はそう言いながら走り出す。

「分かった。」神楽は走り去るその背中を見ながら頷く。

ゴンは変身しながら現場へと急ぐ。

『場所は近い!』ワードがそう言った途端、目の前に銀色のブリキのおもちやの様な口ポットが暴れていた。

「あれは…おもちや?」ゴンは想像とは違う見た目に驚いた。

『いや、人陰じゃ。しかし意志が弱い。すぐ様倒す。』ワードは的確に分析し、核をドライバーに再装填した。

「必殺書き込み!」『パラドシカルランサー!』槍にエネルギーを纏わせたその一撃は、一瞬にして人陰の身体を貫く。

ワードは核を吸収し、少年は元の姿に戻った。彼から作り出された核は機械だった。

『あつけないな。』そうワードが呟いた時、後ろに誰かがいる事が分かった。

「久しいな、ワード。」

『その力強さは相変わらずじゃな、怒。』ワードの背後には、怒の姿があつた。彼は腰に帯刀している刀を左手で触っていた。

「また、地獄へ送ってやろうか?」

『怒、ワシに抗う者こそ、地獄がふさわしい。』ワードは再び槍を構え直した。

「言つてくれるじゃないか。なら本気で戦おう。怒り…拔刀!」

怒はそう声を出すと右手で刀を引き抜いた。妖刀怒鬼と呼ばれる紅い炎を纏つたその刀から力が湧き出す。

怒はその身の筋肉を隆起させ、強張っている顔はより厳つく変化させ、赤くなる肌を見せた。

「なんだ…あれは？」ゴンはそう言う。

『あれは怒の真の姿。怒はその名の通り怒りを操る者。』

「いざ…参る!」怒は、妖刀を前に突き出し迫る。ワードはそれを盾で抑える。

「すごいパワーだ。『やはり矛盾では力不足か…』ワード達は口を揃えてそう言う間にも怒は迫る。

「余所見をするな!本気で斬る!」

怒はワードに妖刀を再び振り下ろす。ワードはそれをギリギリのところまで回避し、後方へと下がる。

『何か打開策は…』ワードは考える。矛盾では太刀打ちできない。跳速でも敵うわけない…

「力が有ればいいんだろ。なら、『剛力』がいいんじゃないのか?」

剛力核、ラーメン屋の店主の怒りから作り出したあの力。ワードはそれなら見込みが

あると矛盾核を引き抜き、剛力核を構えた。

ワードライバーにそれをセツトした。

「核、読み取り」「剛力の魂：ワード、剛力！」

ワードの身体は、紫から青へと変化する。装備の大きさが一気に巨大化、頭部には四角い兜が装着され、そこから翠の眼が現れる。

両脚には、脛当てが装備され、完全なパワータイプの戦士が現れる。盾は消失し、右手に持っていた矛は形を変えて剣になる。まさに「怪力の豪剣士」、ワード剛力の形だ。

「姿を変えたところで変わらん！」

怒はワードに妖刀を振り下ろした。しかし、それは鎧に弾かれ、甲高い金属音を出した。

「なんだと？」

『ワシの力を甘く見るでない。』ワードは右手の剣で動揺する怒の左腕を斬りつける。重い一撃を振り下ろされた怒は後退する。

「今日は…この辺りにしておいた方がいいか…」

そう言うと、怒は姿を消した。

『逃げたか…』

ワードは剛力核を引き抜き、ゴンの姿に戻った。

その様子を、先日会った茶髪の女は見ていた。その傍らには、2 m近い身長の大男が立っている。

「あれがワード、塾屋ゴン。」

「…どれだけ強くなるか楽しみだぜ。」

第7話 氷華の新戦士

夜の廃工場、そこには一体の金色の人陰が呻き声を上げながら暴れていた。目的もなく暴走している獣はいつ人を襲ってもおかしくない、そんな様子だ。

「そこまでよ……」

その時、暗闇の中から青いバイザーを光らせた戦士が声を出した。徐々に現れたその姿、ワードとは違い頭部は三本の氷柱の様な飾りが生え、全身をアーマーで覆っている。彼女は、金色に光る剣先を下に向けいつでも切り掛かれる様にしていた。胸アーマーには、目立つ様に『氷河』と櫛の様に斜めに描かれている。腰には、ワードライバーとは違う新たなドライバー『マウントドライバー』は、『氷河』という字を横向きに装填し、氷山の様な見た目をしている。

「はあっ!!」

その戦士は、人陰を一刀両断、倒れたところに銀色の核の様なものを押し当てた。それはワードが力を抜き取るのと同じ要領で力を吸収、『地層』という時を形作った。

「俺は、このままでいいのか……」そう汚れひとつない天井を見上げながら呟いた。それには大きな理由があつた。

徐々に力を取り戻し、強くなっていくワード。昨日も幹部を新たな力で撃退し、勝利に近いところまで押し通した。しかし、それはワードが強いからであつて、自分の強さではない……そう思うと、俺は何故この力を持っているのだろうとどんだん沼にハマつていった。

『お主が強いから、ワシは新たな言霊を使えるのじゃ。』そうワードは気にかけて言うてく

れるが結局、自分が強くなければ変わらない…そう遠回しに言われている様な気がした。

翌朝、日曜日だから起きるのが憂鬱だった。だが、それを許さない者もいた。

「ゴン!!いるんでしょ!!遊ぼう!!」

インターホン越しに脳に嫌というほど響く声を上げていたのは言葉だった。彼は、ベッドから重い身体を起こし、彼女がやってきたから2分から3分後によく玄関を開けた。

「なんだよ日曜日の朝から…母さんがいないからまだいいけど。」

この日彼の母は隣の町へ友人と一緒に買い物に行っていた為居なかった。そう言う彼女は「知っててやった。どうせ起きてないだろうし、起きていても暇なんだから遊んであげようと思った。」などと言われた。これを見知らぬ人にやられたら怒り心頭だ。だが、その怒りを諦めに変え、中へと招き入れた。

2人は、生まれてから…というより互いにお腹の中にいた頃からの付き合いだった。

親が仲良くなり、必然的に子も仲良くなった。それだけだ……だがそれだけだからこそ、互いに気を許し合い、こうして休みの日に突撃されても中に入れていいる。

「朝ご飯作つてあげる。」そう言つて彼女は冷蔵庫の中から色々取り出し、即席で作つてせしめた。三色バランス良く、非常に健康的なその朝食を見ると、「料理だけは才能があるな。」と思つた。

食べ終えた彼は、いつもの服に着替え、昨日剃り忘れた乱れた髭を剃つた。

「今日は何する？」彼女は眩しい笑みを浮かべながら聞く。

「そうだな……久々に外にでも出かけるか。」どうせ家の中にもやる事が限られる……それならいつそのこと外に出たほうがいい、それが彼の判断だ。

「知らないうちにワードと戦い、敗北して帰つてくるとは……まさに馬鹿ね。」

嫉は左腕の切り傷を抑えながら疲れを癒している怒を見て失笑していた。

「笑いたければ笑うがいい。負けは事実だからな。」怒はやけ気味に答える。

「ところで、楽はどこへ。」哀がそう2人に聞く。

「彼も前にワードに負けた事で逃げたのでしよう……」

その時、近くで大きな爆発が起きた。その場所は大通り、事故でもない限り爆発は起きないところだ。

「どうやら、違うみたいですね。」3人はその爆発は彼が作り出した物だと感じ取った。

「車を集める事で楽しみを得る、面白いね。」

そう言いながら、彼は現場を見下ろしていた。

彼が新たに作り出した人陰は、全身が道路の様になっており、身体中には模型ほどの大きさの様々な標識が立っている。

「あれも……それもこれも、全部俺の車だ!!!」人陰に変身した人物は、捻じ曲げられた楽しみを疑いもせず楽しんでた。好みの会社、車種、色の車は丁寧に積み上げ、それ以外は捨てるかの如く周りの建物や道路に叩きつける。まさに残虐そのものだ。

その様子をゴンと言葉は見ていた。

「何あれ…」絶句する言葉、そこへ人陰の投げた車が一台飛んでくるのが見えた。

「嫌!!」恐怖で足がすくむ彼女は、ただ恐怖の悲鳴をあげるしかなかった。

「バレても文句言わないでくれよ…変身!」小声でゴンはワードを呼び起こした。矛盾の形に変身したワードは盾で車を押さえた。言葉は、目を見開き、目の前の超人に口をぽかんと開けながら見ていた。

「大丈夫か、お主。」ワードは車を下ろすと、中に放心状態で座っている運転手の男を外に出し、言葉に彼と逃げる様指示、そのまま戦場に向かった。

「…あのヒーロー…すごい。」そう呟きながら怪我人と共にその場を後にした。

『どうやらバレなかったみたいだな。』

「その様じゃな。」そう呟きながら人陰に立ち向かう。

「お前が噂のワードか、俺のコレクションを邪魔する悪党め!」そういうと人陰は左肩に生えている『止まれ』の表紙を引き抜いた。その標識は、引き抜かれたことにより本物と同じくらいの大きさとなり、大きなハンマーの様になった。

「変わった武器の形だな。」

人陰は、標識をワードのもとに振り下ろした。その標識は、ワードの盾に激突、そのままワードに強い衝撃を与えた。

「盾が…」それを受け止めた盾は、半壊し使い物にならない板と化した。

『そんな…』心の中でゴンはそう呟いた。

その言葉に比例するかの如く、ワードの力は徐々になくなっていく。

「何故だ…ゴン、何かあったのか。」

気づけば立ち上がることにすら困難になる程までになっていたワードに強力な人陰の攻撃が降りかかった。

地面に倒れたワードは、再び立ち上がろうと試みるも動かない。

『こうなったら…剛力を…』ゴンはそうワードに言うが、

「今剛力を使えば、力不足で絶対に制御できない、危険すぎる。」

『じゃあどうしろって言うんだよ…』ゴンは、心の中で叫んだ。

「言操神としてかつては信仰されたワードもここまでとは…」

その時、後ろから女性の声が聞こえた。それと同時に2人分の足音も。

「そう敵しいこと言うなよ。誰だつてへこたれる時ぐらいあるだろ。」

その足音はワードを横切り、前にたつた。

「そういう時こそ助け合いつてもんよ。」

ワードが顔を上げたその先には、氷の様な戦士戦士と、金色に輝く巨体の戦士がいた。

「ワードさんよ、そこで休んでな。」金色の方はいう。その戦士の腰には、氷の戦士と同じベルトに『地層』の文字が入っている。

「無駄話はそこまでにしろ：『地装』。」氷の戦士はそう敵しい視線を向ける。

「分かったよ：『氷華』の嬢ちゃん。」金色の戦士：地装はそう答えた。

氷華は、逆手に持った剣を構えながら人陰に迫る。人陰はそれに応撃しようと再び武器を振り上げた。しかし、彼女はそれを狙ったのか、敵の懐に侵入、脇腹を切りつけた。

左足で蹴り上げ、人陰は初めて地に膝をつけた。

「俺も忘れんなよ！」

「何！」

地装は、両手で持ったハンマーを使って人陰の腹部に会心の一撃を見舞った。それにより、人陰の身体にヒビが入り、一気に限界が来た。

「私が決める。」そう言うと、ベルトのにハマっている横向きの核を縦向きにした。

「マウントブリザード！」ワード自身が叫ぶ必殺技とは対照的に氷華の必殺技音声は

心のない機械によって叫ばれた。

強烈な冷気と共に人陰の身体は路面凍結したかの様になった。

そして、氷華は前に走りながらジャンプ、そのまま右足を突き出し渾身の蹴りを打ちつけた。

力を失った人陰、氷華は力を吸収し元の人間に戻した。道路の力を使わされていた元の人間は比較的若く好印象を持つ様な人だった。

ワードは再び立ち上がり、氷華を見つめていた。

「貴方の時代は終わりよ。」そう氷華は言い残すと、その場を後にした。その様子をゴンとワードはじっと見つめていた。

変身を解いたゴンの後ろには、地装の姿もあった。

「氷華の嬢ちゃんはあるあ言ってるけど気にすんなよ、ワードさんよ。」

「わっ！びっくりした…」いきなり声をかけられたことに彼は驚いた。

「悪い悪い……」そう言うのと地装はコアを引き抜き、変身を解いた。
「俺は風土鉞也だ。よろしく、ワードの坊主。」

第8話 決意の復活劇

「俺は風土鉦也だ。よろしく、ワードの坊主。」

2 mを超える身長 of 巨漢はそう自慢げな顔で言った。

「…何故、僕がワードである事を？」ゴンの身長は176 cmあたり、25 cmも高い彼を見上げながら聞いた。

「それは…まだ言えない約束なんだ。それより、あんたは嬢ちゃんのところへ行つてあげな。」嬢ちゃん、言葉の事を言っているのだろう。彼女は、爆発の収まった現場を物陰から見ていた。

「…また会えるさ。その時には、腹を割って話せるといいな。」彼は、そう言い残しその場を歩きながら去った。

「ゴン!!」

言葉がゴンの元へ走ってきた。そして、「きつきの人は？」と聞いた。

「助けてくれた…超人かな。」彼は、名前しか知らない人物に対して超人と言い表すしか無かった。

「へえ……」言葉は、さらに沢山の事を聞こうとしていた。だが、その口を閉ざし、何かを心配する様な顔になった。

「今日は一旦帰ろうか。ゴン、酷い顔だし。」

ゴンは、彼女が言っている事が最初は分からなかった。どうやら、それほどまでに彼は疲弊していた様だ。

「それにしても、今回は随分と派手にやったわね。」

楽の元へやってきたのは、怒りを滲ませている嫉だった。

「そう？むしろ君達の方が抑え目なんじゃない？」

「派手な行動は慎みなさい。そのうち痛い目に遭うわよ。」

「ふーん。なら、派手じゃない行動を教えて欲しいな、お・姉・さ・ん。」

「そうさせてもらおう。」そう言うのと嫉はその場を後にした。その後ろ姿を見ながら、クスクスと樂は笑った。

「新しい戦士の事、あえて教えないで正解だったね。あの人はどう対処するのか楽しみだね。」

「丁度お昼近いし、昼ごはんも作ってあげるね。」言葉そう言うのと俺を自分の家に招待した。どうやら言葉の家も誰もいない様だ。

『お主、何を考えておる。それとも、そんなにお主は腑抜けじゃったのか?』
脳内でワードは静かに怒りながら俺に問いかけた。

「何をつて…特に何も。」最初は言おうと思つた…自分は弱いままだ、だから負けた…と。「ワードなら俺が思っている事ぐらい分かるだろ?」八つ当たりの様にワードに言う。「確かに、分かる。じゃが、お主の口から聞きたい。ワシは、確かに時が経てば経つほど力を取り戻している。それはワシだけの力ではない、お主の力あってこそじゃ。』

「俺は、ワードが思っている程の力もない！俺は弱いんだ！神でもなんでもない、ただの人間なんだ…ただの…」

ワードは、そう弱音を叫ぶ俺を見ると、ため息をついた。

『確かに、ワシからしてみれば人間は弱い。じゃが、それと同時に弱い者は強くなるうと更に前を向く。そう言う人間をワシは何度も見てきた。お主は、そうは慣れない…と言うことじゃな？』

やっぱり…呆れられた。そう思った。

『お主には、何者にも変え難い強さがある…それに気づくまでしばし眠るとしよう。』
ワードの意思は、ここで途切れた。

仕方ないから…見捨てられても。

「ゴン、出来たわよ。」

そう言っ出て出されたのはラーメンだった。インスタントの醤油ラーメンだったがほうれん草やコーン、チャーシューなど色とりどりの食材で実際に店にやって来て食べる様な気がした。

「いただきます。」

ゴンは、そう言う箸を手に持ち、麵を啜った。

言葉は、そんな俺を見て笑った。何故なのか…それは分からない。でも、自然とこつちにまで笑顔が優しく降りかかる様な気がした。

「ようやく笑ったね。」

驚いた。いつのまにか笑っていたみたいだ。

「ゴンは、あの人みたいに超人的な力はない…だけど、ゴンにはそれ以上の強さがあるじゃない。『優しさ』と言う強さが。」

優しさ…それが俺の強さ？

「なんか変な事言ってるごめん。ただ、ゴンには笑っていて欲しかったから…」

俺は礼を言おうと口を開こうとした。しかし、その頃には彼女は自分が作ったラーメンを食べ楽しんでいた。また今度言おうとゴンは再び自分のラーメンを食べ始めた。

「さあ、始めましょう。」嫉は一体の黒色の人陰を見ながら言った。

嫉は、自身の姿を徐々に変化させた。黒光りする煙の様なもの、飲み込まれたら二度と帰れない様な、そんな闇を纏い嫉は怪人態へと姿を変える。西洋貴族風の衣装はそのままに、顔の肌が白くなり、顔を歪めた表情をしている。右手には黒い日傘を持つている：正しくは日傘型の武器だが。

黒色の人陰は、嫉が姿を変えるのを見届けると目の前の三階建てのとある会社の事業所を巨大な剣で切り裂いた。そこでは丁度重役達が優雅に紅茶を嗜んでいた。もうすぐ死ぬとは知らず。

その会社の重役達を妬んでいた人陰は、建物を破壊すると、「ようやく解放された：」と呟いた。

「このまま他の肩書きだけの上に立つものを殺すのよ。」

「そうは問屋が卸しても、俺は許さないぜ。」嫉達の前に現れたのは鋤也だった。

「貴方が新しいワードかしら。ここで叩き潰して差し上げます。」

「俺はワードじゃないぜ。仮面ライダー地装、覚えときな、嬢ちゃん。」

そう言うと彼は腰にマウントドライバーを取り付けた。

「変身。」「地層核！登上！」「地を装う者、地装！」

マウントドライバーに地の文字が左側にくる様に横向きにし、装填した。土色の山の様になったドライバーから大地のエネルギーが彼の身体をほとぼしる。

金色の戦士、地装はその地に降りた。

「さあ、かかって来な！」地装の専用武器、マウントハンマーを構えた彼に人陰は大剣を持つて迫る。地装はその攻撃を恐れもせず受け止める。

強固な装甲に、大剣は弾かれるだけだった。

「俺にそれは無意味だぜ！」ハンマーを両手で持つと、人陰にそれを打ちつける。その衝撃で人陰は一気に瓦礫の山に激突する。

その様子を遅れてやってきたゴンは見ていた。それに気づいた地装は、ゴンの近くによる。

「遅かったな、ワードの坊主。」

「貴方は、何故そんなに強いんですか？」ゴンの驚きの質問に地装は一瞬戸惑った。だが、すぐにはつきりと答えてみせた。

「俺は、自分に誇れるものがあるからさ。この大きな身体は、一見窮屈かもしれない。でも、その体で誰かの未来を守るんだ。誇らないでどうする？ そう言うものは、お前にもあるだろ？」

俺にも…：そうゴンは考えた。「『優しさ』と言う強さが。」そして、さつき言葉が教えてくれた優しさが思い付いた。それが…俺の強さなのか？

「ワード、ようやく分かったよ。俺の強さが何か。もう一度、俺に力を貸してくれ！」

その時、彼の腰にはワードライバーがあった。更に、手には矛盾核があった。ワードが彼の想いに応えた何よりの証拠だった。

「俺は俺の強さで救う…：救ってみせる！ 変身！」

「核、読み取り」「矛盾する運命…：ワード、矛盾！」

ゴンは、その身を紫の戦士、ワードへと変えた。

「何かは知らんが吹っ切れたみたいだな、ワードの坊主。」

「俺は、塾屋ゴンです。覚えておいて下さい。」ワードは地装に対してゴンの声でそう言った。

「…分かった。ゴン、よろしくな。」

ワード…：というよりゴンは、矛を右手で人陰に突き出した。

「ワード、ようやく姿を現したわね。」嫉は鋭く伸ばした日傘を構えながら迫る。

「誰も傷つけさせない！」

剣の様に伸ばした傘をワードは盾で弾いた。

そして、紫のエネルギーを溜めた矛で敵を貫かんとした。嫉はその攻撃を見切り、傘を開き盾のようににした。

「俺も決めるとするか。」「マウントグランド！」地装はハンマーをうなだれている人陰に激突、完全撃破した。彼からは邪剣の核が表れた。

「これで、終わりにしよう。」「必殺書き込み！」『パラドシカルキック！』

ワードは、空へ飛ぶ為地面を力強く蹴った。そして、右足を前に突き出し、嫉に向けた。彼女は、再び盾を構える。しかし、感情が昂り力が増すワードになす術なく叩き割られた。

ワードが、地面に降り立つ時、嫉はその場から姿を消していた。

「逃げたか…ん？」

「ここで彼は初めて違和感に気づいた。」

「なんで俺がワードに？」『それはお主が自身の強さに気づいたからじゃ。』

ワードはそう言った。

『これからもよろしく頼むぞ。ゴン。』

「ああ、こつちこそよろしくな。」ゴンはそう笑顔で心の中でワードに言った。

家に帰ってからスマホをつけると、言葉から通知が来ていた。「今度こそ遊びに行こうね。」と言う誘いの連絡だった。

「ありがとう、言葉。絶対行くよ。」

そうゴンは打ち込み、送信した。

「楽しい事を思いついた、聞いてくれないか？喜。」

「悪いが暇じゃないんでね。勝手にやってろ。」

第9話 双神の出会い

「これで終わりだ!!」

地装は、暗闇の中緑色の人陰に対してハンマーを振り下ろした。その攻撃で人陰はダウーン、それを見た彼は核に力を吸収させた。

「よし、これで完了。」

「これが噂の戦士の力ね…」

地装の背後から何者かが近寄ってきた。その人物は、黒いコートを羽織っている男だった。

「なんだ、俺に御用か？」地装はハンマーを地面に下ろして近づいた。

「うん、それが欲しくてね。」

「そう言う訳か。悪いがそれは無理、！」その男は、地装に有無を言わせる前に腹部を殴った。地装の装甲を無意味にするその拳は、緑と黒の腕へと変化していた。それだけではない。身体全体が同じように変化している。人間態の時に来ていたコートはその

ままに怪物としての身体が見えていた。頭部には楽しさを感じる面の上にゴーグルが付けられており、化け物となった科学者のようにも見える。

「お前…その姿は…」ベルトを強制的に外された地装…風土鉞也は怪物となった彼に聞く。

「僕は人陰の幹部である楽、この姿は僕の楽としての本来の姿さ。」楽はそう言うが一緒に落とした『青葉』の核を拾った。

「これは貰っていくね。」楽はそう言い残し闇の中へと消えていった。

「今日はどうしようかな…」

いつもより早く目が覚めてしまった塾屋ゴン。朝食を済ませた彼はデジタル時計を何も考えず見つめて居た。示していた時刻は7:30。いつもならまだ寝てる時間だ。

『お主、暇な時こそ外で身体を動かすのじゃ。例えばランニングやサイクリング。ウォーキングでも良いぞ!』

ワードは、暇で倒れているゴンに対して様々なことを勧めた。

「そう言つてもな……身体動かすのもダルいし。」ゴンはそう言つて意地でも外へ出ようとしなかつた。そんな時、スマホに一件の通知が来ていることに気がついた。

送り主は風土鉦也だ。近くのカフェで話をしないかと書かれていた。

彼は、重い腰をようやくよく上げ出かける準備を始めた。

「おはよう、ゴン。」カフェに入ってきたゴンに対して鉦也は大声で話しかけた。

「おはようございます。風土さん。」ゴンは、テーブル席に座る彼に向かい合うように座つた。

「で、話とはなんですか?」ゴンは鉦也に聞く。その後すぐに店員がやつて来たタイミングでコーヒーを頼んだ。

「実はな、アンタに用があると言うよりもワードさんに御用があるんだ。」

『ワシに?』ワードはそう聞き返すが彼には聞こえていない。

「何故、ワードに?」ゴンがそう聞くと、鉦也はこう返した。

『『楽』、つて奴について知っているか?』

「楽?」ゴンはそう聞き返すのに対して、ワードはその名を聞くや否や顔を曇らせた。

「……ワードはどうだ?」鉦也がゴンの脳内を覗くかのように聞く。

『…お主、今からワシが話す事をそのまま伝えるのじゃ。』ワードは真剣な口調で話し始めた。それをゴンは、一言一句逃さず話した。

「楽は、性悪党の中でも特に残忍な性格の持ち主であり人の不幸に楽しみを見出す。」

「二ついいか？そもそも性悪党ってなんだ？」 鉢也が口を挟んだ。

「性悪党とは、神に反旗を翻した者たちの怨霊みたいなものだ。怒り、悲しみ、嫉み、喜び、楽しみを司る彼らはワードに対して何百年も戦いを続けた。ワードは最終的に自身諸共性悪党を封印する事で戦いは幕を閉じたが、自身の封印が解かれた事で性悪党も魂となつて復活、それぞれの感情に共鳴した人物の死体に乗っ取り今でも生きながらえている。」ゴンは話しながらこの事実を驚いた。

「人間…それならせいづらは人間の心も持っているんじゃないのか？」

「人間が死んだ時乗っ取っている。だから心も死んでいる。仮に残っていたとしてもその感情に共鳴した人物なのだから似たような性格だろう。」

ワードの解説はここで終わった。

「つまり、アンタもその性悪党みたいなものだな。ワードに半分乗っ取られているみたいだし。」 鉢也がそう口にしたのをワードは聞き逃さなかった。

『ワシをあんな様な者共と一緒にするでない。』

「どうやら違うみたいです。それで、その楽がどうしたんですか？」

「ああ、昨日接触して来たんだ。そして、俺のベルトと直前に回収した核が盗まれたんだ。」彼の言葉にワードは声を荒げた。

『何故それを早く言わなかった！それもよりにもよって楽に……この大馬鹿者!!』

「それで……僕達にベルトを取り返して欲しいと。」ゴンはそう考察した。

「いや、ベルトは後で代わりを貰えるからいいんだ。とにかく警戒してくれよって事だ。」

鉢也はこれでお開きだとゴンの分の料金も支払いカフェを後にした。

「どうする、ワード？」ゴンが聞く。

『当然、奪い返す。あの者を放っておく訳にはいかぬ。』ワードは力強く答えた。

ゴンは、カフェを出た後家に帰っていた。

土曜日とはいえ、人が林の様に沢山いた。

そんな中、彼は一人の人物に目が合った。その人物は、黒いコートを羽織った人物だった。その人物はゴンの帰る道の先にいた為近づこうとした。しかし、その足をワードが止めた。

『待つんじゃない？』

「どうしたんだ？」

『あの男こそ楽じゃ。』ワードははつきりと言った。

確かに彼の腰にはマウントドライバーが装備されていた。

「まさかこんな所で会うなんてね。ワード。ここじゃなんだし、場所を変えよう。」楽はそう彼らに話しかけた。

2人が移動した先は既に使われていない廃工場だった。

「話すのは面倒だし、早速始めようか。」楽は足を止めると左手に青葉と書かれた核を手にした。

「こうやって使うんだろ？変身。」

核をマウントドライバーに装填した。

「青葉核！登！上！」「蒼き刃の力、蒼刃！」

全身を木の葉の様な装飾が施されており、体色は青と言うよりも緑へと姿を変える。

緑色のローブが現れ、胸部には『青葉』と言う文字が映し出された。仮面ライダー蒼刃はここに参上した。

「行こう、ワード！変身！」

「核、読み取り」「矛盾する運命…ワード、矛盾！」

ゴンもワードに変身し矛を構えた。

『ここでお前を倒す!』ワードは、走り出し蒼刃に矛を振り下ろした。

「ぬるい!」蒼刃はそれを回避すると斧を召喚した。地装や氷華の武器とは違い禍々しい見た目から恐らく楽本来の力であろう。その斧には先端に液体の様なものが付いていた。

「なんだ、アレは?」ゴンがワードに聞く。

『これは僕が生前に開発した猛毒、触れれば死ぬよ!』蒼刃がゴンの心を読んだかの様に答えた。

その時だった。当然空間に裂け目ができた。

最初は小さかったが、徐々に大きくなり人一人入れる程までに広がった。

『なんじゃ、アレは。』

「面白そうだな。」

その裂け目は2人を吸収し始めた。2人は抵抗も出来ずその穴の中へと入ってしまった。

2人が穴から抜け出した時、周りの風景は様変わりしていた。ぱつと見大学の敷地内の様だ。

「なんだここ？見覚えないな。」

『お主、来るぞ！』周りに気が逸れていたゴンにワードは声をかけた。

目の前には斧を振り下ろさんとする蒼刃の姿があった。

ワードはその攻撃をギリギリで回避する。蒼刃の振り下ろした斧は地面のアスファルトに食い込んでいた。

そこから紫色の蒸気が出ていた。

『お主は死にたいのか！』ワードのお叱りにゴンは素直に謝った。

再び蒼刃が攻撃を仕掛けようとした時、横槍が入った。

「お前らか、ここを荒らしてる奴らって言うのは。」

それは金色の鎧を身につけていた。右腕には桃色の鎧、左腕には金色と青色のロボットアームが装備されている。頭部は青色の中に赤い2つの眼がある。

『お主、何奴じゃ?』ワードが聞く。

「俺は仮面ライダーホロスだ。まあ倒される奴に言っても仕方ないがな。」

まるでワードと同じような雰囲気を漂わせていた彼は、まずワードに対して攻撃を仕掛けた。

左腕のロボットアームでワードに攻撃を仕掛ける。ワードは咄嗟に盾を出す、その衝撃で植木のある場所まで突き飛ばされた。

次に蒼刃の方を向き構えた。

「倒し甲斐のありそうな奴だなー」

蒼刃は斧を振りかぶり再び振り下ろそうとした。ホロスはそれを右腕でガード、ワードと同様左腕で殴り倒した。その衝撃で倒れた身体を蒼刃は起こした。

「楽しいけど、自分が死んじゃ元も子もないな。時間稼ぎよろしく!」蒼刃はそう言う。近くを通りかかっていた学生の一人に力を埋め込みその場を後にした。

「まずい……!」ゴンは痛む身体を起こしながら言う。

学生は徐々に姿を変え金色の怪物へと姿を変えた。その怪物はホロスの光に当たって輝く身体を見ると光の渦のようなもので拘束した。

「何しやがる!」

渦に飲まれたホロスは身動きが取れずにいた。

『ワシに任せるのじゃ!』『必殺書き込み!』『パラドシカルキック!』

ワードは空高く飛び上がると右足でキックを繰り出した。金色の怪物はそのキックを喰らうと一瞬にして爆散した。

ワードは核に力を吸収させた。『光芒』と呼ばれる核を得たゴンはため息を吐くと倒れているホロスに手を伸ばした。

「大丈夫ですか?」ワードの意思に反しゴンはホロスに手を伸ばした。

「ああ、なんとか。それより、人が増えてきた。一旦離脱しよう。」ホロス達の周りには沢山の携帯を構える学生の姿があった。

その様子を見た2人はジャンプすることによって校舎の上に飛び乗り、更に奥へと逃げていった。その様子を追おうとした者は居なかった。

2人が逃げた先は、近くの路地だった。そこで変身を解き、初めて素顔を見せ合った。「初めまして……だね。僕は塾屋ゴン。ワードだ。」

「俺は飛滅械都、さつきも言ったようにホロスだ。」

2人は、とりあえず歩きながら話そうと路地を出た。

大通りを歩きながら2人は話し始めた。

「僕は、このワードの力を遭難した時に手に入れたんだ。」

「遭難……つてことは山の中か。」

「そうだね……もしかして械都さんも？」

「そうだ。俺の場合は探しに行った……みたいな感じだけど。」

「なんで探しに行ったの？」

「まあ……仲間の趣味……みたいなの。」

「あつー！いた!!」その時、2人の会話を遮るように女が割って入った。

「械都、ようやく見つけた！さっき学校で一騒ぎあつたつて聞いて……あれ、この人は？」
彼女は械都に対して色々と話そうとした、が、隣にいるゴンの姿に気がつき会話を止めた。

「これがその仲間だ。」

「これつてね……」彼女の不満げな一言を半分無視しながら械都は彼女を紹介した。

「改めて、陰道サナだ。彼は塾屋ゴン、俺と同じように変身能力を持っている。」

「初めまして、仮面ライダーに変身できるつて本当ですか!？」彼女は早速ゴンの方をキラキラした眼で見た。

「ええ……まあ……」突然の押しにゴンは困った表情をした。だが、それ以上にワードは『小

娘如きがワシに触れ合って…』と言っていた。

「ところで陰道、山内は？」

「山内は他の友達とカラオケに行ってる。械都も誘ったけど電話出なかったから置いていったって。」

「そうなのか…」 械都は少しショックを受けた。

「この世界について少し勉強させてもらった。ホロスね…実に楽しい存在だよ。」

蒼刃は、そう言いながら太陽を見ていた。その時、下の地上で何かが暴れている様子があつた。

「アレがブレイキンドか…しばらく傍観させて貰おつと。」

蒼刃は下を見ながらその様子を見ていた。

カラスの様なブレイキンド、クロウブレイキンドはその場にいた人々に対して次々と黒い羽を飛ばしては突き刺し、闇の力で拘束していた。

「ブレイキンドはここか！」

械都達は、現場にすぐに到着した。

「僕も戦います！」ゴンが言う。そして、ベルトを出現させ矛盾核を構える。

「ありがとう。」械都はそう返すとベルトを装着した。そしてボトルを装填する。「カミングホルス！」

「変身!!」

「核、読み取り」『矛盾する運命：ワード、矛盾!』

「アルケミストマッチ！神話再生！ホルスバードTheホルス！」

ワードとホルス、2人の神に連なる者達は、互いに並び立った。

クロウブレイキンドは、2人の姿を見るや否や羽攻撃を繰り返した。それを2人は左右に回避した。

ホルスは、クロウブレイキンドに対して左腕で攻撃を試みる。しかし、羽攻撃でうまく立ち回れず攻撃の機会を窺っている。

一方ワードも防戦一方で、ガードに使った盾に羽が刺さってしまった。突然ガクンと

重くなった左腕を動かすのが精一杯で攻撃に回らない。

その時、2人は戦乱の中うずくまっている子どもの姿が見えた。そして、それはクロウブレイクンドも同じだった。羽を数発発射し、子どもを襲おうと迫る。

「まずい!!」2人は一斉に動き出した。

先に迫り着いたのはワードだ。彼は子どもを守る様に盾を構えた。羽の攻撃を全身に喰らったワードの身体は頭部と右腕、ベルト部を除いて全て闇の力で拘束されてしまった。その直後、彼の後ろにホロスがしゃがみ、そのまま子どもを連れ出した。

『お主、何をやっておる、無闇に飛び出すなんぞ…』

「でも、どちらにしろあのまま抜け出すことはできない、この方がいいんだよ!」ワードの叱りをゴンは珍しく跳ね除けた。

「ゴン、大丈夫か!」子どもを逃したホロスが戻ってきた。

「大丈夫:だけど動けない。」

「そう言うのを大丈夫じゃないって言うんだよ。ここは俺に任せろ!」ホロスはそう言うくとクロウブレイクンドの方へと進んだ。

しかし、クロウブレイクンドは何故か上に向かって羽を飛ばしていた。

その先には、蒼刃の姿があつた。蒼刃は突然の羽攻撃を回避し、そのまま地面に降り

立った。

「ただでは観戦させないってことか？」

「あんた……」ホロスは蒼刃に拳を振おうとした。

「ホロス、今は協力した方がいいんじゃない？君一人ではあのブレイキンドに勝てない。僕もブレイキンドの実力とやらを見てみたい。」蒼刃は、軽薄そうに言う。

「……分かった。そのかわり戦いが終わったら一発殴らせて貰うからな。」ホロスはそう言うとうとブレイキンドに向かって走り出した。

「さあ、この力樂しませて貰おうと。」

蒼刃は猛毒の斧をブレイキンドに向かって振り下ろした。

攻撃を喰らったブレイキンドは悲鳴を上げた。切られた所から紫色の煙が上がっている。

「なんだ、その斧？」ホロスが聞く。

「僕が生前に作った毒を塗ってある。君には話してなかったっけ？」

「知らねーよ!!ホロスは蒼刃の攻撃に狼狽えているブレイキンドに左拳を叩き込んだ。

「僕も……行かないと！」

『じゃが、どうするのじゃ!』その頃、ゴンとワードは闇の拘束と戦っていた。

「一つ…考えがある。」そう言つて彼が取り出したのは光芒核だった。

『なるほど…光の力で闇を掻き消すのか。』ワードはそう考え出した。

「ああ、後はこれをつけられば…!」ワードは、僅かに動く右腕を使つてベルトに核を充填した。

「核、読み取り」「光芒の如く輝くワード、光芒!」

ワードの全身は光によつて包み込まれた。金色の輝きは徐々に増し、闇を掻き消した。金色の翼を背中に伸ばし、極限まで輝いていた。頭部には翠色の複眼の上に銀色のバイザーが装着され、2本の光の角が生えていた。その姿こそ、ワード光芒の形である。

ワードはそのまま光の速さでブレイキンドに一気に迫つた。そして、そのまま壁に打ちつけた。

「どうやら脱出したみたいだな。」ホロスが言う。

「はい。それより、早く決めましょう!」ワードは地面に降り立ち言った。

「僕を忘れないで欲しいね!」「マウントリーフ!」機械音声と共に蒼刃は木の葉の竜巻を起こした。ブレイキンドの攻撃を全て吸収してそのままブレイキンド自体を飲み込む。

「2人とも、今のうちに!」

「アルケミストフィニッシュ!!!」『スパークキングダイナマイツ!』

2人の閃光のキックは身動きの取れないブレイキンドに激突、そして爆散させた。

竜巻の収まった地面には、変身者の代わりに黒いボトルが現れた。

「なんだこれ？」ホロスはそれを試しに振ってみた。すると、空間に裂け目が現れた。

その裂け目は振れば振るほど広くなっていく。

「アレは僕達を通ってきたものと一緒だね。」蒼刃が言う。

「なんでこのブレイキンドが持っていたのかは知らないけど、これで帰れるなら良かったな。」ホロスが言う。

「はい、ありがとうございます。」ワードが言った。

「礼を言うのはこつちだ。ブレイキンドを倒すのまで付き合ってもらって。」ホロスが話している間にも、蒼刃は先に帰っていると裂け目の中へと入っていった。

「アイツとは、仲が悪いのか？」ホロスはそう聞いた。

「仲が悪い…と言うよりも、敵同士かな。アイツは俺達の世界で悪事を働いている。」ワードは少し暗く言った。

「そっか…それじゃ、仲良くなればいいよな。」ホロスはそう呟いた。ワードはその言葉を聞き逃さなかったが、敢えて聞いてなかったフリをした。

「悪い、今のは忘れてくれ。とにかく元気でな、ゴン。」

「械都さんもお元気で！」

ワードが裂け目の中へと入ると、その裂け目は消滅しボトルも消え去った。

「さて、ようやく戻ってきたみたいだね。」

裂け目の先には、蒼刃の姿があった。

『もう世界を超えることはない、今度こそ決着を付けさせてもらおう。』

「こんな所に居たんだな、ワード。」

2人の後ろから、1人の人物が現れた。茶髪で長い髪が特徴の女性、学園祭の時に財

布を拾った彼女だった。

「フウカ……さん？」 ゴンはそう呟いた。

「風香？ 違うな。私は国山刹那。仮面ライダー氷華よ。」

彼女は、そう言うのとマウントドライバーを装着し、氷河核を用意した。

「変身。」

「氷河、登上！」 「氷の中に咲く華、氷華！」

彼女は、氷の戦士氷華へと変身した。そして剣を逆手に構え蒼刃に振りかざした。

ワードもすかさず攻撃を仕掛け、油断していた蒼刃は後ろへ後退した。

「なんか面倒になりそうだし帰ろ、今日は楽しかったよ。」

蒼刃は、そう言うとその場を後にした。

第10話 烈火の超進化

夜の闇の中、蒼刃はビルの屋上に座って月を見上げていた。

「もうすぐ、かな。」

「何者だ。」背後から嫉が声をかけた。蒼刃の正体を知らない彼女は警戒していた。

「僕だよ、楽だ。」そう言つて蒼刃は楽の姿に変わった。彼女の方を振り返ると、その後ろに怒もいる事に気づいた。

「お前か…奪つてきたのか？」嫉が自身を落ち着かせ聞く。

「うん、面白そうだったし。」

「そんな面白そうで、なんて下らない。俺達は探さなくちやいけないんだ。そんな遊んでいる暇は！」怒が静かな夜に怒号を響かせたが、それを更に別の人物が遮った。

「興奮するな、怒。まあいいじゃないか、それに敵のものを奪つて来るなんて喜ばしい事じゃないか。」その人物は男だった。全身をまた彼らと同じように黒一色で纏めていたが、背中に掛かっているマントだけは純白だった。

「喜…アンタ今までどこに行つていたんだよ。雰囲気まで変えちまつて。」怒が彼を見ながら言った。

「これ、イメチェンというやつだよ。前に人前に現れた時、注目の的となつてしまつてね。流石に毎回写真を撮られるのも面倒だったし。」

喜は3人に近づいた。

「そういえば、哀はどこへ？」

「また1人で何処かに行つたのでしよう。」嫉が答える。

「まあ哀な事は置いといて、久々に4人も揃つたんだから楽しい宴でもやろうよ。」楽が言う。

「喜ぶのはまだ早いさ。『始まりの巫女』を見つけ出さない限りね。」

喜のその言葉に他の3人もそうだなと心の中で思った。

「…僕は、どうすれば良いのだろうか。」

哀は夜の墓地に居た。彼の目の前には斉藤と書かれた墓があつた。彼は前にも見て

いたペンダントの中を開いて見ていた。そこには人間だった頃の自分ともう1人女性
が写っていた。

「笑…君を悲しませるような事をしてすまない。」

そう決断した彼はペンダントを墓前に置き、夜の中へと消えていった。

「勝治、今日は部活ないのか?」

学校帰り、塾屋ゴンは丁度校門から出た片名勝治を見かけ声をかけた。

「ああ…ちよつとな。」彼はどこかよそよそしい雰囲気を出していた。

「なら一緒に帰ろう。」ゴンは彼にそう言った。

「…悪い、今日は急いでいるんだ。またな。」そう言うとき勝治は足早に帰っていった。

『どうした、仲違いか?』ワードが聞いた。

「最近、俺に対しての態度がなんか違うんだよな。」

ゴンの考えている通り、勝治は最近彼に対しての接し方に悩んでいた。

夢でみた紫色の戦士、そして怪物が出た時に限って居なくなるゴン。それらは繋がっているのではと考えるようになった。そしてその紫色の戦士こそゴンなんじゃないかって。

そういえば、時々独り言……と言うよりも見えない誰かと話している姿も見た事がある。

もしかしなくても、ゴンは……。そう思うと手が震えた。俺に襲いかかってきたそれがゴンだと思うと、怖かった。

「そんな、やめてください!」

その時、目の前に数人の不良とそれに絡まれている気弱そうなサラリーマンがいるのが見えた。

不良達はカバンから物を放り投げ道路や下水道に次々と捨て、金になりそうな物を自身の懐にしまっていた。

「てめえは黙って金を出せばいいんだよ。」一人の不良がサラリーマンに掴みかかった。このままではまずい、そう思い走り出した。

が、その僅か1秒でサラリーマンを掴んでいた不良は何も後ろに飛ばされていた。「なんだこの野郎！」不良が睨みつけていたのは、黒一色のスーツを着た男だ。彼が割って入ったのだ。

「お前達の様な無価値な存在は必要ない。」その男はそう言い放った。そして、倒れているサラリーマンの前に立った。その時見えた顔は悲しそうだった。

「自分の全てを台無しにされ、悲しみのどん底に墮とされた。ならばやる事は一つ、その悲しみを宿し復讐すると。」男は青色のエネルギーをサラリーマンに送り込んだ。

すると、サラリーマンは先程の腰が抜けた状態から突然立ち上がり、雄叫びを上げた。そして、その体をエメラルドグリーンの怪物に変えた。背中には翼が生えそこから起す風で次々と不良を吹き飛ばした。

黒スーツの男はそれを傍観していた。

「このまま悪を滅ぼせ。」黒スーツの男が指示を出したその時、勝治の目の前に奴が現れた。

『その様な事はさせぬ！』夢の中で見た紫色の戦士、ワードだ。

「ワード、会うのは初めてだな。一度戦って見たかった。」

『お主…初めてと言う事は、『哀』という事じゃな？』ワードは聞いた。

「そうだ。僕達の邪魔はさせない。」そう言うと、哀は拳銃を取り出した。そして、それと同時に自身の身体を青く変化させた。スーツのカラーが青色に変わり、その上から水を思わせる装飾がなされた。顔は如何にも悲しみを表す面と涙の後があった。

怪人態へと変身した哀は銃の引き金を引いた。その攻撃をワードは盾で防いだ。

『なんじゃ、今のは。』「拳銃だ。」そう話すうちにも哀は次々と弾丸を放つ。それをワードは盾で防ごうとするが、足や肩など盾で防げないところを狙われ完全に不利だった。その間にも人陰は不良達の息の根を次々と止めていた。

「どうにかしないと……あの人たちが！」

「別にいいだろ！」その時、声を出したのは勝治だった。突然の乱入者に哀も銃を下ろした。

「あの不良達は今怪物になつてる奴の全てを奪おうとしたんだ。やり返そうとしているんだ、それを止めるなんておかしいだろ！大体、お前はなんなんだ。俺の夢にまで現れて、何がしたいんだ！」心の中の物を全て叫んだ勝治を、ゴンはワードの鎧の下から聴いていた。

「そうだ。今この場にお前は必要ない。」哀はそう言い放つと、左腕を大きく振りかぶり水を作り出した。そしてそれをワードに浴びせた。

その勢いでワードは吹き飛ばされ、勝治の目の前に倒れた。その時、彼の脚に何か

当たった。だが、それ以上にさつきまでワードだったものが、塾屋ゴンへと姿が変わった事に驚きと、やはりそうだったのかという確信が入り混じっていた。

「ゴン…お前…」

「勝治、今まで黙っていてごめん。これが今の俺だ。」ゴンは残っている力で立ち上がり、勝治を見つめた。

「確かに、襲われている人たちが何したかは分からない、悪人かもしれない。このまま襲われて、居なくなつた方が平和かもしれない。だけど、今人陰にされているあの人は苦しんでいるんだ。あの人だけじゃない、今まで人陰にされた人も…勝治も。」

「俺…も？」勝治が、戸惑いながら聞く。

「そうだ、これが証拠だ。」そう言うとゴンは勝治の元に落ちていている烈火の核を手にした。「これはあの日、俺が初めて倒した勝治の力だ。」

ゴンは再び前を向き、哀とそしてその奥で暴れている人陰を見た。

「俺は、これ以上誰かを苦しませたくない…だから戦っているんだ！必要なくなんかない！」その言葉を聞き遂げた勝治は、思い知らされた。ゴンはずっと苦しんできたんだって、自分や見えず知らずの人の為に戦って来たのだと。

「…ゴン、すまなかつた。俺はお前の事をずっと誤解していた。だからこそ言いたい、これから戦ってくれ。お前の信念のために！」そう勝治が言い切ると同時に、烈火核が

赤く光り輝いた。

「変身！」

ゴンは、その烈火核をベルトに装填した。

「核、読み取り」「烈火を纏いしワード、烈火！」

ゴンの身体は炎に巻かれ、新たな鎧を生み出す。真紅の炎の鎧は全身を覆い複眼すらも炎に包まれた。右腕には「火」という文字が刃先にある槍、左腕には真ん中に「烈」と書かれた盾が装備された。

まさに烈火を纏いしワード烈火の形はここに誕生した。

「今まで以上に、力が溢れる！」ワードに変身したゴンは自身から湧き上がる力に驚いていた。

『お主と小僧の想いが一つになったのじやろう…思う存分に戦うが良い！』

ワードは、槍を構え飛び上がった。それは哀を飛び越え、人陰に向かつて突き刺した。最後に一人残った不良は、惨めな悲鳴を上げながらどこかへ逃げていった。

『これに懲りて二度と悪事なんぞに手を染めぬとよいがな。』

ワードがそう呟く間にも人陰は迫る。

人陰は小刀でワードを倒そうと試みた。しかしその刀は強化された盾によって一瞬にして防がれた。

ワードは、槍を大きく振りかぶり人陰を弾き飛ばした。

「俺は俺の強さで救う…救つてみせる！」

「必殺書き込み！」『バーニングアタック！』

再び迫る人陰をワードは盾で空へと吹き飛ばした。軽々持ち上げられた人陰が下を向くと、ワードが炎を纏った槍を構えていた。そうしている間にも自身の身体が墜落し始めた。翼を広げ逃げようと試みるが、眼下ワードは自身の寸前まで槍を構えながら飛んでいた。そのまま落ちる速さとワードが向かってくる速さを纏った槍が人陰を貫いた。

大爆発の後、「双翼」という核を回収したワードがサラリーマンと共に降りてきた。ワードは気絶しているサラリーマンを近くに寝かせた。

そして、哀の方を向いた。

「誰も苦しませない。例えばその相手が人間だったとしても。」ワードは槍を構えて哀に向かって走り出す。

哀は銃の引き金を再び引き弾丸を放つ。しかしワードの炎が消える事はない。ワードは槍を哀の腹部に突き刺そうと槍を前に出した。哀はそれを華麗に避け、逆にワードの腹部に弾丸を放った。ワードは一瞬ふらつくがすぐに盾で殴り返した。

哀は後ろに下がるが、まだ戦う気があった。

「ここにいたんだね、哀。」その時、蒼刃に変身した楽が現れた。

「その声、楽か？」

「今は撤退しよ。楽しみは最後に取りっておくんだ。」

「…勝手にしてくれ。」その言葉を聞いた楽は、木の葉を操り自身と哀の姿を消した。

「ゴン、幹部っぽい奴は逃したけどすごいじゃねーか！俺もなりたいな…」勝治は、変身を解いたゴンに駆け寄った。

「さあ…それは勝治の努力次第…なのかな？そうだ、俺がワードだった事は黙って置いてくれよ。神楽は知ってるけど。」

「そうか…だから時々2人で話しているのか…でも、俺にもバレたってことはいずれは…」

「そうだな、言葉にも…」ゴンは空を見上げた。

「遂に5人揃ったという事だな。一体何年ぶりだろう、実に喜ばしい事だ。」喜がそう言う。

「いよいよ、巫女探しも本格的に始めれるな。」怒が言った。

「そうね、今度こそワードを倒す。」嫉が最後に言った。

後章

第11話 嘘偽の善行者

季節も変わり、冬の足音がすぐそこまできている11月のある日。

塾屋ゴンはその期間の間ずっとワードと共に時を過ごしていた。そんなワードに対して彼は最近違和感を感じていた。

出会った頃は事あれば自分に話しかける声は徐々に回数を減らし、本当に自分の中にいるのかと感じさせるほど不気味に大人しい。ワードはゴンの心を読むことはできるが、その逆はできない。だからなぜ黙ったままなのかは到底分かることはない。

「つて感じで、どうすればいいんだろうか。」

ゴンは遂に思い切つて勝治と神楽に相談した。

「その前に一ついいか？」勝治が答えを切り出す前に聞いた。

「俺達の会話つて全部アイツに聞かれてるんじゃないのか？」

「私も思った、そんな状況で聞いていいの？」続けて神楽も聞く。

「俺もそうは思った。だけど、それ以上にワードが心配なんだ。もしかしたら怒らせて

いるかもしれないし。」ゴンはそう答えた。

「…相手は簡単に言えば引きこもりみたいなものだからな。出てくるまで待つていてあげるしかないんじゃないのか？」

「私も勝治と同意見だわ。無理矢理話することができる訳でもないし。いずれ話してくれると思うよ。」

「分かった、待つてみるよ。時間をかけてでもワードと話してみる。2人ともありがとう。」

2人の意見を聞き入れた彼は、澄み切っている空を見上げた。

別地点、同じように空を見上げていたのは哀だった。その瞳には消えかかっている生前の記憶を映していた。

幸せだったあの頃、だがもう戻ることとはできないと瞼を瞑り消した。

「哀、次に行動を起こす時力を貸してくれないか？」

そう言つて後ろから声をかけたのは喜だった。

「今度は何をするんだ。」

「始まりの巫女を探す。それだけだ。」それ以外に何があるという顔を喜は向けた。

「…前から気になっていたのだが、始まりの巫女というのはなんだ？」

「…それは遠い昔の話。ワードと唯一密接に繋がっていた人間が居た。その人間はとある村の少女だった。彼女は、ワードから恵みを受け、それを俺達の先祖であるその村人達に分け与えた。始まりの巫女の血を受け継いでいる者はワードをこの世界に繋ぎ止める唯一の存在、それを探し出し我々の手中に収まることが出来ればワードをこの世界から葬ることができる。」

哀はあまりにも壮大な話に唾然としていた。

「目星は付いているのだろうか？この街のどこかにいると。人陰は救いを求めて始まりの巫女へと近寄る。それを今回は最大限に利用する。」

喜は他の仲間を呼んだ。哀は大きな歯車が少しずつ動き始めていると感じた。

「ゴン、一緒に帰ろう？」

放課後、いつものように言葉はゴンに声をかけた。

「ああ、少し待ってて。」

ゴンは急いで机の中の教科書をカバンの中にしまい、背負った。

2人は特にどこか寄る訳でもなく真っ直ぐ家に向かっていった。

家までおよそ5分のところまで差し掛かった。2人は世間話に花を咲かせていた。そんな時、目の前で還暦近い女性がポケットから財布を落とした。しかし、女性はそれに気づくことはない。

それに気づいた2人は財布をすぐさま拾うと、女性に声をかけた。

そこで初めて財布を落としたことに気づいた彼女は2人にお礼を言つて財布を受け取るとその場を後にした。

「またそれか…飽きもせず、そんなに感謝されることが嬉しいのか？」

そんな2人、というよりもゴンに向かって声をかけた人物がいた。ゴンは聞き覚えのある女性の声に振り返った。そこにいたのは刹那だった。

「刹那さん？こんな所で会うなんて奇遇ですね。」

言葉は影で知り合い？と聞く。ゴンはそうだよと簡単に答えた。こうして面と面に向かい合つて話すのは初めてだが。

「気安く名前と呼ぶな。せめて…苗字と呼べ。」せめて氷華と呼べ、そう言いかけたが、正体を気安く話してはならないという上官の言葉を思い出し止めた。

「分かりました…でも、こうして感謝されることが嬉しいという訳では…」

「そんな訳があるか。どうせそれは偽善だろ、人は本心から優しくなることなんてできない。」

「ちよつと、いくらなんでもそんな言い方は無いんじゃないですか？」

言葉はそうやって口を挟む。

「なら君は彼の心が読めるとでも言うのか？」そう言い返されると、言葉は口を閉ざした。

「言葉、先帰つてて。」ゴンの言葉に食い下がろうとしたが、このままここにいても何もできないと感じ、表面的には先に進んだ。しかし、すぐ近くの物陰で2人の様子を見ていた。

「僕の行動を偽りだ、嘘だつてあなたは何故そんな事を？」

「…私は、人に優しきなんて物はないと知っている。それは表の感情であつて、裏を返せばそれは汚い感情となる。私の周りでは皆そうだった。」

彼女の脳裏には、父親の遺影のある部屋の隣から襖越しで話す親戚の声が何度も流れている。そう言い聞かせるように。

「…そんな事はない。僕はずつと誰かの助けになりたいと信じてやってきた。それも刹那さんにとつては偽善なんですか…？」

「…黙れ。そんな都合のいい話があるのか？」

「あるさ、何故ならこいつは馬鹿がつくほどのお人好しだからな。」

その時、自分とは別の男の声が聞こえた。その方向を振り返ると勝治と神楽の姿があった。

「勝治、神楽、何でここに？」

「暇だから遊びに来たらこうなつてたつて訳。」神楽が答えた。

「そんな事…ある訳…」

「その辺にしておけ。」さらに反論しようとした刹那をたまたま通りかかった鉢也が抑えた。

「鉢也…」刹那は止めに入った彼の顔を見て苛立ちを抑えた。

この場合は第三者の力によって終わりになる、そう思っていた。

「ワードに氷華に地装、全員集合してるなんて珍しいこともあるんだね。」

そう言つて陽気な声で近寄つたのは楽だった。その後ろには哀と見覚えのない新たな人物、そして2体の人陰の姿があった。

『喜…か。』ワードはそう呟いた。

「ワード、俺達と戦え。」そう言うと言は自身姿を変えた。シャンデリアのように煌びやかな装甲、金色に輝くマントを掲げ、顔には喜んで見えるように見える仮面がつけられ

ていた。

その声に合わせ哀は怪人態へ、楽は蒼刃へと変身した。

怪人達を目の前にした勝治と神楽は物陰へと走る。そこに言葉があると気づいた二人は彼女を連れて更に遠くへ走り出した。

「変身!!」

「核、読み取り」「烈火を纏いしワード、烈火!」

「地層核! 登上!」「地を装う者、地装!」

「氷河核、登上!」「氷の中に咲く華、氷華!」

ワード烈火の形、地装、氷華はそれぞれ変身すると武器を構えた。

喜はワードへ、蒼刃は地装へ、哀は氷華へと攻撃を仕掛ける。

「ベルトを奪われた借り、返させてもらおうぜ!」

「楽しみだよ、その借りを返せるか!」

地装の打撃攻撃を蒼刃は軽く交わした。

「氷と水、相性が悪いな。」

「ならここで倒させてもらおう。」

哀は次々と拳銃の引き金を引き氷華へと攻撃を仕掛ける。

「今回のワードはどのぐらいの能力の奴か測らせてもらおう。」

金色の槍を喜は振り下ろす。ワードはそれを盾で凌いだ。

それだけでは喜の攻撃は収まらず次から次へと仕掛けられる。

「ワード、攻撃を！」

自由の効かないゴンは行動権のあるワードに攻撃を指示する。しかしワードは一切攻撃をしない。

「何でしないんだ！」

『…もう、お主の身体を傷つけるのは嫌だ。だから戦闘は…』

ゴンはここで初めてワードが考えていた事が分かり、それがどれだけ愚かなものかと思った。

「俺がいつ戦うのが嫌だと言った。俺はやりたくてワードとして戦っているんだ！それはワードが一番よく分かっているだろ！」

『だが…』

「話は終わりか？ならばこちらから終わらせる!!」

喜はそう言うのと必殺の一撃を繰り出した。

第12話 雪解の彼女心

父が事故で亡くなつてから数日後、私の家で葬式が行われた。

『お父さんが死んじやつて、悲しいよね？寂しいよね？でも叔母さん達がいるから寂しがらないで。』

来る人来る人皆同じような事を口にしていた。だけど、その言葉は父を事故で亡くした事を少しでも和らげてくれた。葬式が終わるまでは…

『知つてた？あの相当お金を賭け事に注ぎ込んでいたらしいよ…』

そう言つてくれていた人達は皆、陰でそう言つていた。

『そんな人の娘なんだから、きつと…』

父さんは、電気工事士だった。電柱に登つて機材を点検したり、取り替えたり…父さんは人に電気を届けるこの仕事を誇りに思つていたし、私も父さんが人の為に役に立っていると思うと誇らしかった。

しかし、そんな真面目な性格故に親戚から妬まれていたのだろう。葬式では嘘偽りの噂話ばかりが聞こえてきた。その声全てが耳障りで私は家を飛び出した。

それと同時に、この世に善意なんてものはないって。目に見える善意は全て偽善である。

私は、私の思う善意を、嘘偽りのない正しい心を探す為に戦う。その為に剣を振り下ろす。

敵…哀は、拳銃を使い私と距離を取る。引き金を何度も引き、弾丸を放つ。

それらを全て回避しながら私は彼の懐へと迫る。

今度は水を利用した波の攻撃を放ってきた。それらは私が触れる事で次々と氷に変化していく。しかし、氷になったということは、一つの大きな塊になったということ、腕や足に氷が纏わり付き、それが重りとなって動きを鈍くさせる。これが目的だったのか。

「好機到来だ！」

哀は、足先から次々と蹴りを放つ。それを私は避けることに必死になる。間一髪で避けることができたが、このままでは…

「話は終わりか？ならばこちらから終わらせる!!」

槍に、金色の思念を纏った必殺の一撃はワードへと迫る。

『バーニングアタック』

必殺の一撃は、2人の身体が見えなくなる程の爆発を引き起こした。

「がっ…何、だと…」

爆発の中、喜の左脇腹にはワードの槍に貫かれ、焼かれた後があった。それに対して喜の攻撃は、盾によって一寸ほど上にズレてワードの身体に命中していなかった。

『ゴン、ワシは勘違いをしておったようだ。お主は、最初から覚悟を決めておったな。覚悟が足りなかったのは、ワシの方じゃ。』

「ワード、一緒に戦おう。」

心の中で、 gon はワードへ促す。

「ワード…君は相変わらず私の喜びの邪魔をする。許さん…絶対に。」

そう言って、痛む脇腹を我慢しながら、喜は迫る。

「アイツは弱ってる、叩くなら今だ！」

『分かっておる！』ワードは喜の無我夢中な攻撃をジャンプして回避する。そして、炎を両脚に纏う。

『『バーニングガイザー!!』』

ワードの強烈なキックは、喜の身体に激突すると、名前の通り間欠泉の様に炎を吹き上げた。

「随分と派手にやってるな……」

「あっちも楽しそうだな……」地装と蒼刃は共にワードの爆発を見ていた。

「これで氷が解けた！」

「ぐっ……喜の奴め、面倒な事を……」氷華は、ワードの熱によって体の氷が解け、哀が有利だった戦場に逆転の兆しが見えた。

喜は、地面に倒れたまま気絶していた。

「ワード、今のうちに人陰を。」

『ああ、そう遠くまで行っていないはず！』

烈火の形から跳速の形へと姿を変えたワードは、2体の人陰が向かった方へと走り出した。

「俺のベルト、返して貰うぜ！」「マウントグラウンド！」

「それなら、僕みたいに力づくで奪ってみなよ」「マウントリーフ！」

大地のオーラを纏った地装と、自然のオーラを纏った蒼刃。2人のキックは、空中で激突する。

地上に2人は降りた。地装は、殆ど墜落したに等しいが、厚い装甲によって守られていた。その懐には、青葉核が装填されたマウントドライバーがあった。

楽は、強制的にベルトを剥がされた事によって人間態の姿に戻っていた。

「有言実行って奴だ。」

「あーあ、おもちゃが無くなっちゃった。まあいっか。僕にはこれがあるし。」楽は、自身の身体を怪人態へと変える。緑色のコートを纏い、右手には猛毒の斧を持っている。「第二回戦ってやつか…」地装はそう言うのと、ハンマーを構え戦闘状態へと再び入る。

「これで終わりだ。」「マウントブリザード！」

自分自身を回転させ、巨大な氷の竜巻を作り出す。それを自分ごと敵の身体に特攻する。

水を与えれば敵を強化する事になる、しかしこのまま受けても倒れる、八方塞がりな哀はただ攻撃を受けるしかなかった。

その攻撃で哀は弾き飛ばされ、地面に膝をついた。

一方、2体の人陰は逃げていたはずの言葉、勝治、神楽の元に迫っていた。

「何でこいつらがこっちに！」神楽が悲鳴混じりにそう言う。

「どうするの？どこ行っても追いかけてくる……」言葉が2人に聞く。

「ここは…俺が！」勝治は、2人を庇う様に前に立つ。しかし、赤色の人陰は拳を振り上げ、攻撃しようとして迫った。

『そこまでじゃ！』

その時、緑色のワード、跳速の形が人陰の拳を掴んでいた。

『今のうちに！』

その声に3人はその場を後にした。それを追うように青い人陰が走り出す。しかし、それも瞬間移動で迫ったワードによって阻止される。

「それにしても人陰はなんであの3人を…」

『考えるのは後じゃ、今は人陰を倒すぞ。』

ワードはそう言うと言弓を引いた。

「必殺書き込み」『スピードスナイパー!』

神速の矢が人陰を捉える。しかし、青い人陰はあろう事か隣にいた赤い人陰を掴むと、自身の目の前に「近くに居たのが悪い」と言わんばかりに盾にした。

それにより赤い人陰は爆散し、爆炎の中青い人陰は逃亡を企む。

しかし、その爆炎の中からもう一度神速の矢が現れた。ワードは逃げることで想定して二度矢を放っていたのだ。

それにより青い人陰も身体を貫かれ爆散した。

2体の人陰からはそれぞれ「無尽」「下弦」の核を回収した。

ワードが氷華達の元へ戻った頃には、既に戦士達が有利な状況へとなっていた。

「2人も!」

「遅かったな、後はコイツだけだ:」地装がそう言う。楽は、息切れ一つする様子がない。

その時だった。楽の目の前に割って入るように怒と嫉が入ってきた。

「時間稼ぎはもう十分だ。巫女の目星は大体ついた。」怒がそう言うのと、5人は煙の中へと消えていった。

『巫女:だと?』

「心当たりがあるのか?」氷華が聞く。

「もしかして、神に唯一直接繋がってた始まりの巫女の事なのか?」続けて地装が口にす
る。

『:何故知っている?』

「社長に聞いた。人陰の成り立ちも、ワードと人陰の戦争の始まりも。」

「いつの間にそんな事を:」

『:始まりの巫女の血を持つ者は、人陰が救いを求めて近寄る。今回の襲撃はその能力を利用した陽動作戦だったと言う事か。』

「その、始まりの巫女が敵に渡ってしまっただらどうなるの?」氷華はなんとか話について
行きながら聞く。

『ワシや、ワシに関連するもの全てが崩壊する。私が人間に与えた技術や文明……言葉までも……』

3人は、今日は解散する事にしそれぞれ別れた。刹那は、社長に詳しい話を聞く為に彼のいる研究室へと歩き始めた。

その彼女の目の前に言葉が現れた。

「何のようだ？」

「貴女は、ゴンのことを偽善だと言った。でも、それは絶対に無いって言える。」思いがけない一言に彼女は驚いた。

「……その証拠はあるのか？」

「それは、私の今までのゴンとの記憶……アイツは、いつも誰かの為に動いていたの。だから、ゴンのこと……もつと信じて欲しい。一緒に戦う相手なら尚更。」

「……私は今急いでいる。話が終わったなら行かせて貰う。」

彼女は、誤魔化すのも限界に感じ逃げるようにその場を去った。確かに、彼の善意は本物だと。それを前から彼女は感じていた筈だ。文化祭の時に、財布を拾った彼の、嘘偽りのない善意に……

第13話 性悪の逆襲劇

「ワード、さつき言っていた始まりの巫女ってなんなの？」

ゴンは先の戦いの帰り、ワードに問いかけた。

『始まりの巫女、それはワシの身体がまだあつた頃、一番繋がりの強い人間の事。彼女は、その村で一番の美人であるとよく噂されていた。お主の周りで例えるならば、平方言葉のような。彼女は、己の身を犠牲にしてワシに抗う性悪党ごと封印した。』

「そんな事が…でも、」

『そう、今その封印は完全に解けている。いや、気が遠くなる程昔に綻びは始まっていた。喜から始まり、嫉、怒、楽、哀と現代までに徐々に封印が解けてた。』

「…性悪党はなんで自分達を封印した始まりの巫女を探してるの？」

『性悪党は、始まりの巫女を取り込むことでワシを超えようとしている。自分達を封印した程強い力を持つ始まりの巫女を逆に利用する…それが目的かもしれん。』

「でも、始まりの巫女なんてどうやって見つけるの？」

『いや…目星はついておる…』

ゴン達が会話している頃、性悪党達もまた同じような話を始めていた。喜は怪我で倒れたままであるが。

「それで、始まりの巫女が誰か目星はついたの？」楽が聞く。

「人陰は、ワードの人間に親しい人物3人を追いかけた。」怒がそう答える。彼の言う3人は言葉、勝治、神楽の事だ。

「じゃあ、その3人って……」決めつけようとした楽に嫉は待ったをかけた。

「いや、その時いた男は外す。あれはハズレだ。私が既に人陰にした。」

「そういえばそうだったな。今のワードが生まれた時に……」怒が付け足した。

「と言う事は、二択か……」哀は、巫女なのだから女しかあり得ないのではと思いつながら呟いた。

「と言う事は、言葉か神楽が……」

所変わって再びゴンとワード。2人も同じ結論へと進んでいた。

『そう言う事になるのう。』

「ワードの力で始まりの巫女を見分けられないの？」

『それは難しい話じゃな…いくら強大な力を持つていたとしても人間だ。そう見分けられるものではない。まあ強いて言うならば、容姿が近い言葉の方じゃな。』

「…それってワードの好みだからじゃ…」

『うるさい！とにかく、地装達とも協力して2人を守らねばならぬ。』

ゴンは、ワードと話すうちに家の目の前まで来ていた。

彼は家に入る前に言葉の家を見た。彼女の家にはいつものように明かりが灯っており、彼女の部屋からは彼女らしき影も映っている。

一安心すると、自分の家の扉を開けた。

翌日、ゴンは昨日の性悪党の狙いを鉢也に伝えた。そして、神楽を守って欲しいと頼んだ。快く彼は引き受けてくれた。

そして、神楽にもその事を伝えた。彼女は初めてその話を聞いた時は、頭がこんがらがっていた。しかし、時間が進むにつれ状況を理解し、覚悟を決めた。

一方、言葉には今日家で遊ばないかとさりげなく誘った。珍しい相手からの勧誘に彼女が応じない訳でもなく、すぐに家にやってきた。

ゴンは、言葉に話そうとか迷っていた。ゲームをしながらタイミングを見計らって：

その頃神楽の家には、彼女の他、話を聞きつけた勝治と鉢也が来ていた。

「お茶持つてきますのでお待ちください。」神楽は自分の部屋に2人を招き入れ、お茶を出す為に部屋を出た。

「初めましてですね。話はゴンから聞いてます。おおらかで力強い人だつて。」勝治は、鉢也に対して話しかけた。

「もしかして、あんたが勝治つて坊主か。あんたの事もゴンから聞いてるよ。アイツと同じくらいの実力があるつて。」

「…そんな事、ないですよ。」勝治は謙遜した。

「でも、勝治の得意分野には勝てないつてゴンは言つてたぜ。全て勝てなくても、得意分野で勝てるだけでも、同等だろ？」鉢也はありのままにそう言つた。

「…そう言うもの、なんですか…」

「…お前は、なんでゴンに勝ちたいんだ？」彼の問いに勝治は言葉を詰まらせた。そうい

えば、深く考えた事がなかったな、そう思った。

「それは……」すぐに答えは出なかった。それを見た鉾也はこう言った。

「答えが出ないうちは勝てないな。まずはどうして勝ちたいか考えるところからだな。」

「キヤーーー!!!」

その時だった。突然女の悲鳴が聞こえた。それも家の中だ。

「神楽!」2人は急いで台所のある一階まで走った。

そこでは、紫色の沼のようなものに囚われた神楽の姿があった。

「今助ける!」鉾也が近づいたその時、沼に完全に入り込むように神楽の姿は消えた。それと同時に今度は外で悲鳴が聞こえた。

「外か!」

2人は、玄関を勢いよく開け外へ飛び出した。そこには、神楽を拘束している妖怪人態の姿があった。嫉は2人の姿を見るや否や逃げる為に走り出した。

2人も、神楽を助ける為に追いかけた。

「分かった、すぐに向かう。」

神樂が拐われた事はゴンの耳にもすぐに届いた。勝治からの連絡を聞いて、気がついたら身体が動いていた。

それを言葉は追いかけた。

「待って！ゴン！」

その声には彼は振り返った。

「何？」ゴンは振り返った。

「気をつけてね。」

「わかってる……すぐに戻るから。」そう言うとゴンは外へと出ていった。

「……」

「変身！」

地装に変身した鉦也は嫉を捕らえた。その隙に神樂は脱出を試みた。しかし、性悪党の陣地に入った3人に逃げ道はなかった。神樂は怒によって捕らえられ、人質にされた。

「動くな、コイツがどうなってもいいのか？」怒は、刀を彼女の喉元に突きつけた。

「…私に構わず倒して」神楽はそう言う。

「そんな事、できるかよ。お前を守れてゴンに頼まれてんだ。」地装は持っていたハンマーを地面に置いた。

「それでいい。」怒はそう言うのと突きつけた刀を下ろした。その背後には他の3人の幹部の姿もあった。

「神楽を離せ！」その時、怒の目の前に勝治が現れた。彼は拳を固め怒に振り下ろす。しかし、人間如きの攻撃で怯む事はない。

「お前、そんなに死にたいのか？」怒は、彼を蹴り飛ばした。

勝治は地面に倒れた。しかし、再び起きあがろうとする。

そこへ怒は刀を振り下ろす。

「面倒を増やしやがって、俺を怒らせるな！」

刀は、一瞬で振り下ろされる。命がなくなる事を覚悟した彼はただ呆然としていた。そこへ、一つの影が割って入る。

「変身できないのに、無茶しやがって！」

地装だ。彼は自身の装甲を盾として勝治を守ったのだ。しかし、怒の刀は想像以上に切れ味が良かった…左肩の鎧を貫通していた。

刀はそのまま振り下ろされ、地装は変身を解かれる。

「おい、しつかりしろ！」

鉦也は、勝治の目の前に倒れた。

「…でも、そう言うの、嫌い、じゃ、ない…」

鉦也は、そう言うのと目を閉じた。勝治は、脈があるか確認した。どうやら、微弱ではあるがまだある。

「死ななくてくれよ、俺はまだアンタに聞きたいことがあるんだ！」

「つまらん…切り捨てる！」その様子に飽きた怒は、再び刀を振り下ろす。

「待った、切る必要はないだろ？」それを止めたのは哀だった。

「なんだと？」

「どうせ世界は滅ぶ。彼らも死ぬ。放っておけばいい。」哀はこの時何故2人を庇ったか自分でも分からなかった。

「…アンタがそう言うなら、仕方がない。」

怒は剣を下ろした。

そのタイミングでワードが到着した。跳速の形に姿を変えていた彼は、倒れている鉦也と勝治を見た。

「勝治！ 鉦也さん！」

「嫉、始めるぞ。」喜はそう言った。その声に嫉も応じた。

「そこで見ていろワード、今日が貴様の命日だ。何千年越しの。」

5人は、それぞれの体色の力を空に掲げた。神楽は、徐々に力を奪われ気絶した。

「神屠る力よ。」「我々に」「授けよ。」「生贄は」「始まりの巫女とす。」

すると、空が徐々に曇り始め、太陽を隠した。夜のようになった大地に、黒い光が舞い降り神楽の身体に降り注いだ。

「…何かがおかしい！」そう声を上げたのは喜だ。

神楽の身体は、徐々に黒い獣の姿へと変化した。そして黒い光も徐々に途絶え、遂に消えた。そこから現れたのは、翼をなくしたような竜、恐竜を人型にしたような獣だった。

『これは…何が起きている！』ワードもこの状況には混乱していた。

出来上がったのは、全く違う黒き人陰だった。

「これは…まさか？」楽が言う。

「失敗の様だな。」嫉が続けた。

「本来なら何が起きる筈だったんだ？」哀は聞いた。

「我々の身体は巫女に吸収され、一体の白きものへと変化する筈…と言う事は、二択をは

ずしたな。」喜は冷静に答える。

黒き獣は、呻き声の様な雄叫びをあげると、ワードに対して先程のような黒い光を放った。それを浴びたワードはその装甲が消え、ゴンの姿に戻ってしまった。

「そんな、変身が…」ゴンはワードがなくなった事に驚きを隠さなかった。

「まあ、今はこれでも十分だ。黒き獣よ、ワード達を消せ！」

今度は、尻尾を振り回してゴン、そして勝治と鉦也に向かって振り下ろした。

土煙が収まったそこには3人の姿がなかった。

「逃げたか…」

第14話 超越の紅蓮炎

「ハハハは…」

ゴンと勝治は、自分の状況に気付いていなかった。攻撃を受けた筈なのに、全く別の場所にいた。どこかの建物の中。

「ここはジョーカーの特別機密拠点兼研究室さ。国山君、風土君を病院に。」

奥から現れたその姿にゴンは見覚えがあった。少し前に氷河核を奪った黒い戦士と瓜二つだ。

「了解しました。」刹那は、そう言うのと鉈也を連れて部屋を後にした。

「お前、何者だ。」

ゴンが問う。

「これはプロトウオーズと言って私がだいぶ前に開発したものだ。そして、それを身につけている私の正体は…」

黒い戦士は、ベルトから鍵を引き抜いた。

「ジョーカー社長、白夜総三さ。」中から現れたのは、テレビでもよく見る男、白夜総三

だ。まさか仮面ライダーを扱う会社関わっているとは思っても見なかった。

「ジョーカーって、あの仮面ライダーの？」勝治が聞く。

「そうさ。まあ、立ち話もなんだし、そこに座ってくれ。お茶を出そう。」

そう言うのと、彼は奥の部屋へと向かった。

ゴンは、この時何かおかしい事に気がついた。今までは普通だったのに、何故か物足りなく感じる。それが何か、まだ気づく事はなかった。2人は椅子に座り、茶が出されるのを待っていた。

「待たせたね。」総三は2人の目の前にお茶を置き正面に座った。

「今までのワードの活躍は、国山君と風土君から聞いているよ。私の会社の戦士にも負けないくらいに……」

そう誉めたが、2人は特に反応する様子はなかった。

「すまない、君達にとつて今はそんな話をしている場合ではないな。これを見てほしい。」そう言って彼が出したのは、くたびれた紙だった。そこには、ワードらしき人、女性、数人の人間、黒き獣、そして白き竜が載っていた。竜を除き、残りの影には見覚えがある。

「今回現れたのはこの黒き獣。儀式に失敗すると現れる最強の生物。その生物の黒い光

線には、神の力を一時的に抑える効果があるとされている。現に君の身体もそうなっている筈だ。」

「そんな事、あるわけ…」その時、その違和感が何か初めて気がついた。ワードの意識がない、そもそも居なかったかのように。

「ワード？ワード！」 gon は叫ぶ。しかし、その声にワードが答える事はない。

「やはり…だが、安心したまえ。その能力は一時的なもの。時間が経てば、戻る筈だ。」

「僕には、今ワードの力が欲しいんです。そんな悠長な事言っている暇は…」

「gon、ここは抑えろ。」 そう言ったのは勝治だった。

「俺がなんとかする。」

そう言うのと彼は総三の前に立った。そして、頭を下げた。

「俺にも、鉦也さんが使ってるベルトをください。」

「何を言ってるんだ…？」 gon が聞く。

「今gonと鉦也さんは戦えない、刹那って人も鉦也さんを病院に連れて行ってる。それなら、今動ける俺も変身できれば…神楽を助けられる。」

総三はしばらく黙って彼を見ていた。

「私も、君が戦えればいいと思っていたんだ。だが、ベルトがない。」総三はベルトがないをわざとらしく言った。そして、立ち上がると、ぐちゃぐちゃになっている作業台を

整理し始めた。

「そう都合よくあるわけ……」そう言つて作業台から出したのは鉋也が最初につけていたマウントドライバーだった。

「そういえば、彼が無くしたつて言うから一個余分に作つていたんだっけな。」

その言葉を聞いた勝治は、希望が見出せたようで顔を上げた。

「自分からなりたいたと言つたからには、負けないでくれよ。片名君。」そう言つと彼は、マウントドライバーを勝治に渡した。

「ありがとうございます！」そう言つと勝治は早速戦いに行こうと走り出した。

「待つて、勝治！」ゴンはそんな彼を止め、あるものを投げ渡した。

それを受け取つた勝治は、驚いた。

「これは、烈火核……」

「核が無ければ変身できないでしょ。俺の代わりに頼んだ。」

「ああ、任された。」そう言つと勝治は研究室を後にした。

「……君は、このままここで報告を待つのか？」総三は、座り込んだゴンに聞いた。

「それはあなたも同じでは？」ゴンは正論で返した。

「……私は、今の体力ではせいぜい変身するので精一杯。足を引つ張るだけだ。」

2人の間には、しばらく無言の間が流れた。

その頃、先程の広場には、性悪党の5人と黒き獣が陣取っていた。

「早くもう一人を連れて来いよ。」怒は嫉に言い放った。

「無理よ、さっきので皆力を使い切った。仮に捕らえられても、儀式はできない。」

「ふーん、僕はつまらないし帰るよ。」楽はそう言うと、広場から出て行った。

「僕も今回ばかりは彼に賛成だ。帰らせてもらおう。」哀も続けて居なくなる。

「待てよ！ちっ…こうなったら、この女を人質にしてワード達を誘き寄せるか？」怒は新しく提案をした。

「その必要はない、何故なら…俺が来たからな。」その声を上げたのは勝治だった。

「なんだ…さっきの男か。俺がまた捻り潰してやる。」怒は、刀を構えた。

「今度の俺は一味違う。」そう言うと、マウントドライバーを装着し、烈火核を構えた。

「見てな、俺の変身を。」勝治は核をベルトに装填した。

「烈火、登上！」「全てを焼き尽くす烈火！」

火山のように湧き上がる力を、赤き鎧に変え、それらを装備する。胸部には烈火の文字が現れ、頭部は真紅のバイザーが装着される。

「俺の新たな名は仮面ライダー紅蓮。全てを焼き尽くす！」

仮面ライダー紅蓮、そう名乗った彼は、迫る怒にゆつくりと近づいた。

「片名君は、何故行つたと思う？」

総三は、質問を変えた。

「さつき言つてみたいに、神楽を助けるため？」ゴンは答えたが、違うかと返された。「確かにそうでもあるが、それは全て君の代わりになりたいと願つたからだ。彼は君に對してずっと對抗心を燃やしてきた。だが、それに対して君はどんどん強くなつていく。そんな君の代わりをして超えようとしているんだ。」

総三は、勝治が座つて居たところに座り、ゴンを見た。

「それに対して、君はワードの力が無いことを理由にただ立ち止まつているのか？ 呆然として居るのか？ そんな悠長に構えて居たら、救えるものも救えない。」

「…なら俺はどうすれば良い、教えてくれよ…」ゴンは、自暴自棄になって居た。その様子に総三は、厳しい視線を緩め、優しい顔になった。

「君のしたい事をすれば良い。それが、最善の道へとつながる。まあ私が言えた話ではないけどな。」そう言うと、総三は立ち上がり、奥の部屋に行こうとした。

「そういえば、まだ謝ってなかったね。氷河核の事。本来ならあんな方法を取るべきではなかった。すまない。」

「…別に、半分忘れてましたし。気にしてませんよ。それ以上の見返りも貰いましたし。」そう言うと、ゴンも何かに駆り立てられるように研究室を後にした。

「はあっ！」怒は刀を紅蓮に振り下ろした。それを紅蓮は左腕で弾き飛ばした。

「なっ！」怒が次の攻撃に移ろうと構えるが、紅蓮はそれを右脚で蹴り上げ、倒した。

「さっきの借りは返させてもらった。神楽を返してもらおう。」

「望み通り、出来るものならな。」喜はそう言うと、黒き獣を解き放った。

黒き獣は、一瞬にして紅蓮の元へ飛びかかる。

紅蓮は黒き獣に飛びかかり、地面に倒し馬乗りになった。

「神楽、俺だ、勝治だ！しっかりしろ！」紅蓮は変貌してしまった神楽に声をかける。しかし、暴れ回る黒き獣にその声は届かず、一瞬にして左に押しつけられてしまった。しくつつ、やっぱりダメなのか……紅蓮が立ち上がるよりも早く黒き獣は突撃してきた。しかし、それは横からの乱入者で弾き飛ばされた。

「大丈夫か……勝治。」そこには、息を切らしたゴンの姿があった。

「ゴン……なんでここに、変身できないんだろ……」

「勝治、俺は俺の思うままに動きたい。変身できなくても戦いたい。神楽を助けない。それが俺の今やりたい事だから。」

その時、彼の身体に力が入った。腰には、既に剛力核が装填されたワードライバーがあった。

『待たせたのう、ゴン。今なら戦えるぞ。』

「封印が解けた……」嫉が驚き混じりの声で言う。

「変身！」その声と共に、ゴンはワードへと変身を遂げた。

「俺は俺の強さで救う……救ってみせる！」

「俺は強くなる。そしてワードを超える！」

「やれ！」喜は、黒き獣に先程の黒い光を放つよう指示する。

「勝治、俺に合わせてくれ。」ワードはそう言うと、紅蓮は頷いた。

黒き獣は、黒い光をワードのいる場所目掛け放った。

「今だ！」その合図で2人は空へとジャンプした。

「必殺書き込み！」『マツスルストライク！』

「マウントファイア！」

ワードは左足、紅蓮は右足を身動きの取れない黒き獣に向け突き出した。

2人のキックは、黒き獣を貫き、爆発させた。

背後を振り返った時には、幹部の姿はなく、倒れた黒き獣の姿だけあった。

ワードは、黒き獣から力を吸収した。そこから「天獄」と書かれた核を手に入れた。

「あれ…私は何を…？」神楽が目を覚ました頃、同時に空に太陽が再び現れた。

「よかった、無事だったんだね。」

「ゴン…と誰？」神楽は、変身したままの2人のうち、ゴンしか分からなかった。

「俺だよ、勝治だよ。」そう言って勝治は変身を解いた。

「そっか…勝治も助けてくれたんだ。ありがとう。」

「い、いやーゴンが怖くて戦えないって言うからな…」勝治は照れながらそう言った。

「案外、2人はお似合いかもね。」 gon はそう呟いた。

「そうか、風土君は無事だったのか。」

その頃、総三は病院にいる刹那から鉦也の無事を伝える連絡を受けていた。

『ええ、ただ…』刹那は、告げ辛い事を、ゆつくりと話した。

「もう戦えない…か。彼が目を覚ましたら、とりあえずお疲れ様と伝えてくれ。」そう言う
うと総三は電話を切った。

第15話 神屠る破滅竜

「言葉……これが今の俺達だ。」

ゴンは、言葉が敵に狙われていると分かった以上、今までのことを話すしかなかった。ワードとして戦ってきた事、自分の中にワードがいること、そして言葉が敵に狙われていると……

話を聞いた時は、動揺を見せた。今まで起きてきた事が身近で起きていたこと。だが、それと同時に少し前からゴンがワードである事に少し前から気付いていたからかその事実を受け入れた。

「もしもの時はよろしくね。」

言葉は笑顔でゴンに言った。

その頃、街の外れにある墓地に、国山刹那はいた。

目の前にある父の墓に白い花を供え、合掌した。

今日は彼女の父親が亡くなってから今日で丁度8年が経つ。徐々に薄れていく父親との記憶をまた呼び起こし、自分の決意を固める為ここに居た。

用件を済ませその場を後にしようとしたその時、彼女の目の前に意外な人物が立ちはだかる。

「こんなところで会うなんて、思ってもいなかった。」

そこに居たのは、哀だった。彼もまた、自分の大切な者を弔う為にここに来ていたが、まだ彼女は知るよしもなかった。

「…私を倒しに来たのか？」彼女は聞く。

「だとしたら、ここでやろうとしている時点で罰当たりだな。」

「…」

「僕も、今日は気分じゃない。逃げるなら早く逃げてくれ。他の奴ら幹部に疑いの目を向けられては困る。」

彼女は、哀に対して何処か違和感を感じた。しかし、それを考える余裕もなく、彼の視界から消えた。

帰り際、墓地を管理する年老いた寺の僧侶が、彼女に声をかけた。

「お嬢さん、少しいいかい？」しゃがれた声で彼女に聞く。

「なんですか？」

「あのお兄さんと知り合いかい？」

「まあ、そんな所…です。」見られていたのか…内心そう思った。

「なら、これを渡しておいてくれないかい？」僧侶は、彼女の手にある物に乗せた。

そこには、青色に輝くペンダントがあつた。

「これは…」そう聞く前に僧侶は頼むよと半ば強制的に押し付けられてしまった。

彼女は、仕方なく哀の元へと戻っていった。

「まだいたのか？」

墓前にいた哀は、戻ってきた彼女に呆れるように言った。

「…これを返せって渡されたから…」そう言うと、彼女はペンダントを差し出した。

「それか…」哀は、それが何かを即座に思い出し、取ろうとした。が…

「もういらぬ。お前にやる。」そう言い再び墓へと目を向けた。

「…」受け取る様子はないと判断し、彼女はポケットにしまった。

「性悪党が、人を弔う事もあるんだな。」

「…そうだな。僕は性悪党の中でも変わり者さ。人間だった頃の記憶を捨てられない。」
記憶を捨てれない…それが何を意味するのか、彼女はわからなかった。

その時だった。彼女の携帯が鳴った。相手は塾屋ゴンだった。そういえば鉦也に強制的に入れられた事を思い出し、憂鬱になった。

携帯を取り、耳元に近づけると、ゴンの焦る声が聞こえた。

『刹那さん！性悪党です！氷蘭寺の近くです！』

「分かった。すぐ行く。」彼女は、落ち着いた声で返し、電話を切った。

そして、黙ってその場を後にした。

その頃、堤防の上でワードと紅蓮に変身したゴンと勝治は言葉を守るように戦っていた。相手は怒と嫉だ。

「言葉、早く逃げて！」

剛力の形に変身し剣で2人を抑えている間に、言葉は遠くへ逃げようと試みる。

言葉は、堤防下にある公園の方向へ走った。

「今がチャンス…」茂みの中から現れたのは楽だった。猛毒の斧を片手に言葉へと迫る。
「逃げろ！」

怒と嫉をワードに任せた紅蓮が楽に襲いかかる。

「勝治！」言葉は更に奥へと逃げる。

紅蓮は、楽に蹴りを入れる。

「君が相手か…初めてだね。」

「うるさい！そんなことはどうでもいい、俺が倒すからな。」

そう言うと、紅蓮は右手に巨大な斧を装備した。バーニングブレイカーと呼ばれる炎のような斧を紅蓮は両手で持った。

「行くぜ！」

「ここまで来れば…大丈夫かな…」

彼女は、鉄道が通る橋の下に来ていた。

「ようやく来たか…」そこには、喜の姿があった。

「始まりの巫女よ…我々の元に…」

「それは嫌、絶対に！」彼女は強気な態度で返した。

「そうか、なら手段は選べないか……」喜は、槍を構え近づく。

後ろへと下がる言葉、しかし、足場の悪い河原だったのが運の尽きだった。石に躓き、倒れてしまった。起き上がるよりも早く喜が目前に迫る。その時だった。氷柱のようなものが複数、2人の間に放たれた。

「何！」

「彼女を渡す訳にはいかない。」そこに居たのは、氷華に変身した刹那だった。

「まだ1人居たか……」

氷華は言葉の前に立った。

「貴女が……刹那さん？」立ち上がった言葉は氷華に聞く。

「そうだ。」そう答えると、言葉は何故か不機嫌な顔をした。

「ふうん、一応礼はしておくわ。でも、ゴンを侮辱したことは許さないからね。」そういえば、この前ゴンと言い争っているところを見ていたな……そう思い出し納得した。

「死にたくなければ行け。」氷華はあえて雑な態度で言った。

「分かっているわよ。」言葉はそう言うとその場を後にした。

「逃がすか！」喜が彼女を追おうとしている目の前に氷華は立ち塞がった。

「なら私を倒してからよ。」剣を構え、喜を睨みつける。

「……望み通り、倒させてもらう。」そう言うと言を氷華に向け投擲する。

そして、己の拳に金色のオーラを纏い氷華に近づける。

槍を避けたことで進路を遮断された氷華の目の前には彼の拳が目前に迫っていた。

「マウントブリザード！」即座にベルトを作動させ、氷の盾を生成、それを身代わりに背後へと下がる。

「中々やるな……」

「これでもジョーカーの戦士の端くれだ。それくらい造作もない！」

氷華は喜を近くの噴水公園まで押しつける。そこには、既に戦闘を行っていたワードと紅蓮の姿もあった。怒、嫉、楽、そして喜。4人の幹部がここに揃っている。

「刹那さん、来てくれてたんですね！」

「ワード、今は戦いに集中しろ！」声をかけたワードに氷華は喝を入れた。

ワード、紅蓮、氷華。3人の仮面ライダーが並び立っている。

相手も、4人横並びに立っている。

「……これで終わりだ！」

『マッスルストライク！』『マウントブリザード！』『マウントファイア！』

それぞれ武器に力を纏わせ、性悪党達に振り下ろそうとしたその時だった。ある一声でその攻撃は遮られた。

「そこまでだ。彼女がどうなってもいいののか？」

3人の背後にいたのは、言葉を捕らえ銃を突きつけている哀だった。

「言葉！」ワードが叫ぶ。

「ごめんなさい……」哀は、彼女に銃を突きつけたまま他の幹部の元まで歩いた。

「これで、目的が達成された……実にいい働きをしてくれた。哀。」

喜は歡喜のあまり興奮を抑えられなかった。

「ワード、お前の時代もここまでだ！」怒はワードに向かってそう言う。

「私達は、お前が創り出した全てを壊す。」

「そして、本当の人間の樂園を創らせてもらおうよ。」続けて嫉と楽も言う。

「そんなことさせるか！」紅蓮がもう一度必殺技を発動させようとする。

「やめろ！そんなことしたら言葉が！」ワードが止める。

「でも、このまま放っておいたら世界が終わるんだぞ！」

「最期の会話が喧嘩だなんて、さあ始めよう。」喜は2人の様子を他所に儀式を始めた。

「神屠る力よ。」「我々に」「授けよ。」「生贄は」「始まりの巫女とす。」

前に神樂で行った儀式と同様、それぞれが読み上げた。そして、今度は黒ではなく白
い光の柱が宙に伸びた。

それは、世界を明るく強い光で包み込んだ。そんな中、言葉の身体が光の柱に飲み込

まれ、性悪党5人は精神態に変わり光の柱に飛び込んだ。

「何が…」ゴンは、美しいとも思ってしまったその様子をただ眺めていた。

「ウギヤアアア!!!」

その時、光の柱から何か獣の叫び声が響いた。

光は徐々に収まり、獣の姿を見せる。

全身が白く、巨体の竜。人陰や性悪党の面影はなく、ましてや言葉の姿すら感じない。

まさに神を屠るべくして生まれた竜：『神を屠る竜』。

「ウギヤアアア!!!」

その唸り声は、空に響き渡る…

数時間前、白夜総三の研究室に、意外な人物がやってきていた。

「君は確か…？」

「初めまして…勝治から、聞いてきたんです。」彼女は、勝治から紹介を受けてきたと伝えた。

「そうか…とりあえずお茶を出そう。座りたまえ。」

第16話 滅亡の秒読見

「ウガアア!!!」

神を屠る竜は空へ雄叫びを上げた。

「なんだよ……あれ？」 紅蓮があまりの壮大きさと恐怖で驚いていた。

『あれこそ、神に等しい力……神を討ち滅ぼすべくして生まれた竜。』

ワードが、竜について話した。

その時、竜の口元に先程の白い柱の様に明るい光が今にも溢れ出さんとしていた。

「避ける！」 氷華が言う。その時には既に光は龍の口元から放たれ大地を二つに割るかの如く伸びた。

それを撃ち終えると、今度はその脚を使い大地を揺らしワード達の動きを鈍らせる。身動きが取れない彼らはその場に手をついた。

竜は再び光を放つ構えに入った。今度こそは避けられない、誰もがそう感じた。

避けられることができない、喰らったらタダでは済まない攻撃、彼らには絶望しかなかった。

光は、一瞬にして彼らに迫る。

「マウントリーフ！」

その時だった。彼らの目の前に木の葉の盾が現れた。それが救いの手だった。一瞬できたその隙を逃さず3人は回避した。

そして、その場を退却した。

「…間に合った…。」

救いの手を伸ばした彼女もまたその場から姿を消した。

光が放たれた場所は地面が抉れ、焼けていた。それから目を逸らし、神を屠る竜は空へと旅立った。

3人は、近くのビルの影に隠れて竜が退却するまで凌いだ。

そして、自分達に気づかず退却した事にホッと息を漏らした。

「ゴン、勝治、無事だった？」突然後ろから声をかけられた事に2人は声を出して驚いた。

そこには、かつて楽が変身していた蒼刃の姿があった。しかし、スタイルが楽の頃のような男性体型ではなく女性の様に見える。

「…えっと、どちら様？」紅蓮が聞く。

「あつ、そつか。」彼女は、ベルトから青葉核を引き抜き素顔を見せた。

「私だよ。」蒼刃に変身していたのは、紛れもなく万葉神楽だった。これには氷華も身体が前に出た。3人も変身を解いた。

「神楽が蒼刃だったのか。」勝治はそう言った。

「とりあえず、総三さんが貴方達を呼んでたからそこに行きながら話しましょう。」

話の内容を要約するところ言う事だった。

勝治から、今起きている言葉を守る為の（失敗してしまつたが）戦いをしていて聞いた。それを受けて、自分が今何が出来るかと考えて彼女はジョーカーの社長である白夜総三の元へ行つた。

「なるほど……何か自分にできることはないかと聞かれてもな……」総三は、彼女の熱意ある頼みに真剣に考えた。そして、一つの答えを出した。

「なら、君も戦つてみる？」そう言うのと、なんと言うことか。彼は余っていたマウントドライバーと青葉核を彼女に渡したのだ。ジョーカーの社長がそんなのでいいのかなんて聞いてちやいけない。

「これで私は、みんなの力になりたい。そして、言葉を助けたい。」

「一緒に頑張ろう。」ゴンは彼女を見て言った。

「ああ、期待しているぜ。」勝治も続けて言う。

「任せてよ。こう見えて強いんだから。」神楽は自信満々に言った。

友人同士で話しており、その中に入れない刹那はずっと考え事をしていた。

『もういらぬ。お前にやる。』哀に言われたあの言葉が気になった。

私は渡す前に見てしまった。ペンダントの中身を。そこには生前の哀と、一緒に女性が写っている写真があつた。2人は影ひとつない笑みを浮かべていた。

『人間だった頃の記憶を捨てられない。』

きつと、彼女の事を忘れられないのだろう。そして、彼は悪になろうとして思い出を必死に忘れようとしている。だから、いらぬと言つたのか？ そう思うと、何か感情が込み上げてきた。それが何か分からない。でも、ただ一つ分かることがある。このままで良いはずがない、という事が。

「無事だったか。」あつて早々、総三は彼らの心配をした。

「とりあえず……」ゴンはそう言った。

「神を屠る竜は、私が作ったライダーでもギリギリ、ワードですら対応できるか分からない

い。誕生させてしまったことは、正直遺憾だね。」

「ごめんなさい…」ゴンは、彼の言った言葉に対して謝罪を述べた。それは、守れなかった彼女言葉に対して言った様にも聞こえた。

「…だが、勝てないとは言っていない。君達が、本気で彼女を救おうとし、諦めなければ…一応学者の端くれなのに感情論を訴えるのもどうかと思うがな。だが、人の感情は全ての事柄に影響する。例えば、『怒りで見えてなかった剣を、相棒が彼の怒りを抑えた事で勝利に繋がった』事もあるからな。」

「…俺達は、負けるつもりはありません。言葉を絶対に助けます。」

その言葉に、後ろの3人も頷いた。

「…君からその言葉を聞けてよかった。私は、もう戦えない。見ていただけなのを許してくれ。」

「…俺達が救えると信じて貰えるだけでも、嬉しいです。」

ゴン達は、すぐに駆けつける事が出来るようにと総三の研究室にしばらく居座る事にした。

勝治と神楽は昼飯を近くの弁当屋に買いに行き、総三も会議で席を外しており、部屋

にはゴンと刹那の2人だけだった。

気不味い雰囲気漂う部屋に、ゴンは窮屈さを感じていた。いくら肩を並べて戦うとしても、自分を否定した相手に気を使うのは当然だった。

そんな時だった。

「…少し聞きたい事があるんだが、いいか？」刹那は、口を開いた。その驚くべき事にゴンはしばらく彼女の顔を見てしまった。

「…いいですけど…」

「実は、この前ペンダントの落とし物を拾ってな。それを、持ち主に返そうとしたんだ。だが、『もういらぬ』と言われ『忘れたい』と感じられる様な事を言われたんだ。お前なら、それでも返そうとするのか？」彼女はその相手が哀である事を隠して聞いた。

「…僕なら、絶対に返します。忘れていい事なんてない、このままで良いはずないって…」

またそれか…彼女はそう思った。それはなんだと…

「…刹那さんはどう思ったんですか？」

「…私も、同じ事を思った。こういうの、なんて言うんだろうな。」彼女は正直に話し、そう聞いた。

「…それが、本当の優しさだと思います。刹那さんはそう言っても否定するかもしれない
せんけど…」

本当の優しさ…そういうことなのか…刹那は、右手でペンダントを強く握りしめた。

第17話 言葉の使者達

先程の戦闘から半日が経過した頃、総三は勝治と刹那を集めた。

「2人に渡したいものがある。」そう言つて渡したのは、二つの核だった。『紅鎌』、『守神』とそれぞれ書かれていた。

「これは？」勝治が聞く。

「これは私が核を研究して創り出した人造核だ。その力はとても強大だ。その力ゆえ、必殺技にしか使えない。変身用にはくれぐれも使わないでほしい。」総三は2人にそれぞれ渡した。

「ありがとうございます。」刹那がそう言つた直後、部屋に神楽が勢いよく入ってきた。

「みんな、外に竜が来てる！」そう勢いよく彼女は言つた。

なんと神を屠る竜は既に研究室のすぐそこまで来ていた。

「…あつちからお出ましか…」勝治は肩を鳴らした。

3人が外に出た時には、既にゴンの姿もあつた。

「みんな！』『遅いぞ！』ゴンとワードはそれぞれ3人の到着を待つていた。

「悪かった。だが、こつからは全員で行くぞ。」勝治はそう言うのとベルトを巻いた。

「ええ、みんなで言葉を救う！」神楽もベルトを巻く。

「…私は、私の出来る事をする。」刹那も決意を固めベルトを装着した。

「…言葉は、俺たちの力で絶対に助ける！」ゴンは核を構えた。

『…性悪党、長きに渡る戦い、今ここに決着をつけようぞ！』

4人は竜を見上げた。彼らが戦う状態になるのを待っている様にも見えるその姿からは、絶対的強者の風格を見せつけている。

「『変身!!』」

『言霊の統率者』ワード矛盾の形、『零氷の守護者』氷華、『烈火の扇動者』紅蓮、『深緑の剣闘士』蒼刃。4人の戦士は並び立ち、竜との戦いをすべく構えた。

「ウギヤアア!!!」竜は、地を揺るがす雄叫びを上げた。そして、4人を睨みつけた。

「行くぞ!」その雄叫びを合図としてワード達は一斉に攻撃態勢に入った。

「オラっ!!!」

初めに攻撃を仕掛けたのは紅蓮だ。空中へ飛び上がると、勢いをつけ巨大な斧を竜の脳天に振り下ろす。

竜は、その攻撃を巨大な翼で空に避ける事で回避。そして、空へ飛ぶ勢いで風を巻き起こし、彼を吹き飛ばした。

「はあっ!!」

次は蒼刃だ。氷華のものと同型の剣に深緑の力を纏わせ右翼に振り下ろす。

しかし、竜はこれを右腕の爪で彼女を切り裂く事で攻撃を防ぐ。彼女は、その攻撃にそのまま地面に墜落する。

『とりゃ!!』

蒼刃が怯んだそのすぐそばからワードは矛を前に出し竜に対して突き進む。

ワードの攻撃を竜は喰らってしまふ。しかし、ダメージを負った様子は殆どない。そして左腕でワードを掴み上げた。

「やめろ! やめてくれ! :言葉!!」握られ苦しむゴンは叫んだ。それが伝わったのか、竜は手を緩めワードを離してしまう。そして、突然頭を抱え苦しみ始めた。

「言葉の意志が、竜の動きに影響を与えているのか。」ゴンは他の3人にも伝わる声で話した。

「そう言うことか…言葉! 性悪党の力なんかには負けるな!」その意図に気づいた紅蓮が

声を上げた。

「なるほどね、言葉！頑張つて!!」更に蒼刃も続けて言う。

氷華もまた呼びかける。しかし、3人とは少し違っていた。

「お前は……このまま忘れたままでいいのか！愛する者を、自分の人生を！」彼女が呼びかけたのは、哀についてだった。

「……大切な人を、忘れていいのか哀！」

その叫びで3人は彼女を見た。それは驚きもあつたが、それと同時に警告を促すものだった。

竜はいつの間にか正気を取り戻し口から光の一撃を放っていた。

彼女は、それを避ける術なく真正面から受けてしまった。撃たれた時、まるで自然に還る様な感覚に陥った。

「……えっ……」彼女が再び目を開けると、白い空間が広がっていた。そこには性悪党の5人と鎖に縛られてうなされている言葉の姿があつた。

「貴様！何故ここにいる！」そう声を上げたのは怒だ。その声に他の3人も彼女を見た。
「…僕が呼んだ。一時的に取り込んだんだ。」哀はそう言った。そして、彼女のいる方へ歩き始めた。

「何故そんな事を？」嫉が聞く。

「…僕は、性悪党にはなれない。笑を忘れる事なんてできない！」哀は声を荒げた。そして、かつて自分のそばにいた彼女の名を叫んだ。

「そんな事で居なくなるの？理解できないよ。」楽が彼に聞く。

「…僕からしたら、世界を壊すことの方が理解できない。笑が好きだったこの世界を…壊す事なんてできない！」

「…そうか。勝手にすれば良い。だが、ワード達に勝つ道筋は存在しない。その選択を後悔するが良い。」喜は怒りを込めた言葉を告げると、黄金の衝撃波で哀と氷華を外へ追いやった。

2人が外に出たのは、氷華が攻撃を受けた直後だった。

『…なんで哀がここに！』哀が彼女の前に立つ姿を見てワードは啞然とした。

「…ゴン、これが私のやりたかった事なのかもしれない。」氷華は、ワードの方を向いてそう言った。その言葉の意図を察したゴンは、仮面の内側で笑顔を見せた。

「ワード、彼女はまだ生きています。だが時間はかけられないぞ。」哀はワードに対して命令口調で言った。

『分かっておる！それより、今は貴様も味方と捉えて良いのか？』ワードは、苛立ちを抑えながら聞く。

「…そう言う事、だな。」哀は銃を構えた。

「哀、竜を誘き寄せてくれ。私がおの隙に叩く。」水華の言葉に、哀は頷き、銃の引き金を引いた。

竜はそれに反応して、彼に両爪で攻撃を仕掛ける。

その攻撃を哀は身軽に回避して、また銃で攻撃する。

そして竜が右腕を哀に振り下ろそうとしたその時だった。

「マウントブリザード！」絶対零度の氷を纏った水華の剣が竜の背中に突き刺さる。

竜はその攻撃が効いたのか、叫び暴れ回った。その勢いで水華は剣を背中に突き刺さしたまま地面に落ちてしまった。

水華が再び立ち上がろうとしたその時、怒りに満ちた左腕を竜は振り下ろさんとしていた。

避けられることのできない攻撃に彼女は顔を伏せた。

彼女が再び顔を上げた時、目の前には爪で右半身が抉られていながらも、氷華を守っている哀の姿があつた。

「何……やったんだよ……」弱々しい声で彼は言った。その直後爪は引き抜かれ、彼は地面に倒れそうになつた。

「哀!!」氷華は倒れそうになる彼を受け止めた。

「……ここまで……か……」哀は力を徐々に失い人間態に戻つた。

「何やつてるんだよ……哀……」氷華は言う。

「……別に、僕はもう5年前に死んでたんだ……今更死ぬのなんて怖くない……」

氷華は、今にも死にそうな彼に、ある物を左腕に握らせた。

「これ……は……」そこにあつたのは、ペンダントだつた。

「それは、お前が持つていてこそ価値がある。」氷華は、震える声でそう言った。

「そうか……あり、が……とう……」その言葉を最期に、彼の眼は二度と開く事はなかつた。

そして、彼の身体は思念体の様になり、彼女が持つていた守神核へと入つていった。力を託したのだ。

氷華は、守神核を握りしめて立ち上がった。

氷河核をベルトから外し、守神核を装填した。

「守神核！ 登上！」 「守護する神、護神！」

氷華の装甲は、動きやすさ重視で軽装だったものが、防御重視となり肥大化する。胸部の文字は氷河から護神に書き換えられた。哀の世界を守りたいという思いを受け取った彼女が、本来変身に使えない核を使い変身してみせた形態。それが仮面ライダー氷華護神。

その姿に脅威を感じたのか、竜は彼女に向かって光を放った。

光は、確かに彼女を包んだ。しかし、護神はそれをもろともせず受け止め、耐えてみせた。

「哀……共に護ろう！」

氷華は右拳を突き出し、竜に向かって放った。

第18話 全力の救出劇

「哀……共に護ろう！」

氷華は、一呼吸おくと、竜に向かって右拳を顎に向かって突き出す。

竜はそれを空に飛ぶことで回避した。そして、氷華に向かって右脚で強烈な蹴りを放った。その攻撃が当たれば、氷華どころか地面すら消えてしまう、そう思わせる勢いだった。

氷華は、それを青色に輝くシールドを張ることで防いだ。そして、竜が勢いを失ったタイミングでジャンプし、右拳を再び顎に向かってぶつけた。

その攻撃に竜はバランスを崩した。そして、そのまま勢いよく地面に倒れた。周りの地面がひび割れ、まるで天変地異が起こったかの様に変わり果てた。

「今だな！」紅蓮は、斧に紅鎌核を装填した。

「最大！最強！最火力！」「爆炎撃斧！」斧が炎を纏い、大きな鎌へと姿を変える。

「オリャー！！！！」大きな炎の車輪の様になった紅蓮は倒れている竜に自分ごと回転し振り下ろす。そして、振り下ろしたと同時に大きな爆発が起き、周りを焼き尽くすかの様

に炎が広がった。

「ウギヤアア!!!」竜は、痛みに耐えきれず叫ぶ。炎が周りに上がり、それらが身体を包み込む。

「やったか？」紅蓮と氷華は、竜が炎に包まれる姿を見てそう言った。

『…まだだ。』ワードがそう言った直後、竜は再びその足で立ち上がった。しかし、その様子は明らかに以上だった。身体中血管や筋肉が浮かび上がり、頭部からは光が漏れていた。背中からは血が湧き出ているかの様にも見える赤い炎が上がっていた。それは強化された、というよりも秘められていた力が暴走を始めたと言った方がいいだろう。

「ウギヤアア!!!ウオアア!!!」

「…みんな避ける!!」ゴンがそう言った直後、竜は口から光を放つ。真っ白だったはずの攻撃は、赤い光も混ざりより強化されていた。直撃を免れたとしても、強い衝撃波が4人を吹き飛ばした。

その攻撃に土埃が舞い、しばらく周りが見えなくなつた。

しばらくしてそれが晴れると、竜は再び戦士たちに照準を合わせていた。そして、光を放つた。先程までなら、それを放つたためにはある程度の周期が必要だった。しかし、

暴走状態となった今では、その周期が短くなった。というよりも無くなったと言った方が正しいだろう。

「どうする、このまま戦っても勝ち目がないぞ。」紅蓮が言うように、確かにこのままでは相手の強化された攻撃ばかりを避け続けなければならぬ。

「避け続けるのもだいぶキツイわよ。」続けて蒼刃も言う。

「…誰かが囷になって敵を引き寄せる。そしてその間に他の誰かが叩くしかない」氷華が言う。しかし、相手には既に光の効き目が薄い事が分かっており、囷になるのは難しい話だった。

「なら俺がそれを引き受ける。」そう名乗りを上げたのはゴンだった。

「大丈夫か？」紅蓮が聞く。「…大丈夫だ。」と彼は返した。

「行けるか、ワード。」

『…もちろん、ワシはお主の無茶を共に乗り越えて来たのじゃからな。誰かを助ける為には無茶を惜しまない…それがお主の良いところじゃ！』

「跳躍する速さ…ワード、跳速！」

跳速の形に変身したワードは、左手の弓を引いて竜に攻撃をした。

「こつちだー」ゴンは、意を決して翼を羽ばたかせ空へ飛んだ。それに釣られて竜も飛ぶ。竜は光をワードへ次々と放った。ワードはそれを後ろを振り返ることのない華麗

な身のこなしで回避して飛んだ。そして、ある程度の高度で竜の方向へ振り返った。

『スピードスナイパー!』翠色の矢が竜の左翼を貫いた。しかし、それと同時に竜もまた光を放っていた。その光はワードの左翼を焼き尽くし、飛行能力を失くさせた。

片翼を失い墜落するワードに竜は両足の爪で切り裂こうと迫る。

「剛力の魂…ワード、剛力!」しかし、それを青のワードが強靱な鎧で防いだ。

右手に持つ剣で竜の左翼を切り裂いた。先程の矢の攻撃もあり、竜はバランスを崩した。そして、そのままワードと共に地面へと墜落する。

『マッスルストライク!』剣に青色のエネルギーを纏い、背中から墜落する竜に振り下ろした。腹部に受けた攻撃で墜落速度は増し、勢いよく地面に叩きつけられた。

左翼を失い、飛ぶことのできない竜は、ただ立ち上がる事しか出来なかった。しかし、それが戦士たちにとって絶好のチャンスだった。

「俺達は、お前達を超える!」「マウントファイア!」まず紅蓮が必殺技を発動させる。

「嫉妬の心を自分のプラスにして、」紅蓮は、自分が抱いていたゴンへの嫉妬心の別れと共に脚部の炎をぶつける。

「悲しみの心を、押し込めたままにしない!」「マウントガーディアン!」次に氷華が、自分の父親の死と哀を重ね、氷を纏った一撃のキックを貫く。

「怒りの心を、落ち着かせ。」「マウントリーフ!」蒼刃は、あの時何もできなかった自分

への怒りを省みながら、深緑のエネルギーを纏った蹴りを解き放つ。

「光芒」の如く輝くワード、光芒―!

地面に降り立ったワードは、新たな核を使い変身した。光のワード、光芒の形へと…。ゴンとワードは竜を見た。

『喜びの心で、全てを救う。』『スパークキングダイナマイツ!』ワードとゴンは、光の速度で空へと飛ぶと、右脚を突き出した。人を救う事に喜びを感じていた彼らは、それを再認識し、言葉を助けるといふ強い思いと共に神を屠る竜へ渾身の一撃を叩き込んだ。

4人の必殺の一撃を喰らい神を屠る竜は完全に弱っていた。しかし、それでも立ち上がり爪で攻撃しようとした。その時だった。

「みんなとの楽しい心を、無くしたくない…またみんなに会いたい!」言葉は、神を屠る竜の中からそう胸のうちを叫んだ。

「貴様…やめろ!」喜の叫ぶ声が聞こえた。喜だけじゃない、同じような趣旨の言葉を怒、嫉、楽も叫んでいた。自分達がこの世界を変えたいと、そう願っていた。しかし、その独善は、叶うはずも無く徐々に力を失った。

とうとう竜の形はなくなり、言葉だけが地面に倒れた。

「言葉!!」変身を解いたゴン達が近寄った。そして、ゴンは彼女の身体を起こした。「しつかりしろ、言葉!」ゴンの目には、輝く涙が写っていた。死んでしまったのか、そう感じていた。

「…そんな大声出さなくても、生きてるよ。」言葉は口をハッキリと開いた。立ち上がる事はできなかつたが、はつきりと生きていた。

「…よかつた…よかつた…!」ゴンは、感嘆のあまり涙を流した。それに気づいた言葉は、こゝろ声をかけた。

「ありがとう…ゴン。」

神を屠る竜によって荒れ果てた大地に、彼ら5人はいた。5人は、長きに渡る性悪党と言操神の戦いに決着をつけた。

救いもたらされた大地を、彼らは歩いていく。その先には、白夜総三の姿があつた。彼がいた研究室は当然潰れてしまった。しかし、彼は生きていた。

「みんな、こゝ苦労だった。そして、言葉君、君が無事でよかつた。」顔も何も知らないおじさんに突然こんな事を言われ彼女は困惑したが、味方であると感じありがたいごさ

ますと言った。

「ゴン君、ワードの力を君が手にしてよかったですよ。」総三は、ゴンの方を向いた。

「…俺は、俺ができることをしただけです。」

ゴンのその顔には、今までにない程の笑顔があつた。

1週間後…

世界の危機は去り、俺たちは元の生活に戻ることになる。

「見舞い、ありがとよ。」

市内にある病院に、怪我を負った鉢也さんは入院していた。そこへ勝治が見舞いに来ていた。

「元氣そうでよかったです。」彼はいう。

「俺としては、もう退院したい気分だが…まだ1ヶ月くらいはかかるって…」

鉦也は見た目に反して、身体中に包帯が巻かれている。こんなので退院されたら、周りの人が絶対に心配する。

「…退院したらどうするんですか？」勝治が聞く。

「…そうだな、ジョーカーを辞めて、旅人にでもなろうかな。それも世界を旅する旅人に。大量に貯金があるし、気分転換になるし。」

「…いいと思いますよ…」

「だろ？」

勝治は、時計を見た。自分が来てから既に30分経っていた。

「俺、そろそろ行きますね。」そう言ってパイプ椅子から立ち上がり、椅子を片付けた。

「待った…最後に一つ。」

「なんですか？」鉦也は彼を止めた。

「…ライダーの力、お前に任せる。」

「…もちろん、俺に任せてください。」

その頃、白夜総三が居た大学のある研究室は、何も無い空間になっていた。そこには、総三と神楽が居た。

「ライダーの力を返す？」総三は彼女に問いかけた。

彼女は、マウントドライバーと青葉核を彼に手渡す。

「私には、世界を守るよりも、もっとやりたい事があつて……。」神楽は総三の目を見る。「それはどんな？」総三は聞く。

「……剣道で頂点を極めたいんです。私、ずっと剣道をやってきて……もっと強くなりた
いって……ダメですか？」

総三は、彼女に笑みを見せる。

「仮面ライダーになる事を、強制させるつもりはないよ。むしろ、正直に言ってくれて嬉しいよ。有能な人材を手放すのは少し残念ではあるが。」彼は、ベルトと核を受け取り、ケースに収納した。

「……また、君に会える日を楽しみにしているよ。それじゃあ、私は仕事があるので、ここで帰らせてもらうよ。」そう言つてスーツケースと共に部屋を出て行く。

「お疲れ様です。」彼女はそう言つて見送つた。

「ねえ、今日はどこ行くの？」

その頃、大通りをゴンと言葉は歩いてきた。言葉はいつものようにゴンとデートができて嬉しかった。ゴンもまた、彼女が元に戻ってとても嬉しい。

「たまには、行き当たりばったりでもいいんじゃない？」彼ははそう提案する。彼女はそれに驚いた。しかし、すぐに笑って返す。

「それも楽しそうだね。」

そう言うと、2人はまた歩き始める。

『…この平和が、一生続いて欲しいのう。ゴンが戦うことのない、平穏な世界が…』

「寒いな…」

刹那は、大学からの帰路に着いていた。バスを降り、冬の寒さに身体を震わす。彼女は左を向いて歩き出す。

彼女の前にバスから出た女性もまた、同じように左に曲がる。

その時だった。彼女のズボンの右後ろのポケットから、安物の財布がこぼれ落ちた。

彼女は、咄嗟にそれを拾った。そして声をかける。

「あの、財布を落としましたよ。」

女性は、その声に気づき後ろを振り返った。

「あつ…ありがとうございます…？」 女性は、刹那の顔をじつくり見た。

そして、言葉を発する。

「もしかして、刹那じゃない？」

その声と顔で、刹那もまた彼女が誰であるか気づく。

「…風香？」

第19話 二人の決着点

2027年3月、春の足音がすぐそこまで来ている頃、既に神を屠る竜との戦いから一年以上が経過していた。竜がこの地を去ってから、性悪党をはじめとした人陰は、まるで最初からなかったかのように消えていった。

塾屋ゴン達は、無事卒業を迎え4月からそれぞれ新たな道へ進もうとしていた。

その日、ゴンは言葉と一緒にある場所へバイクで向かっていた。

山道を走りながら、二人はもうすぐ着くその場所へ想いを馳せていた。

「もうすぐだ。」

ゴンがそう言った直後、森の隙間から太陽の光が漏れ出していた。

その光の向こうには、街を見下ろす高台からの壮大な景色だった。

「懐かしいな……」言葉は懐かしさと感動のあまり声を出した。

そこから見えている街は、ゴン達が住んでいる場所だ。普段はその中にいるから分からないが、こうして見てみると、かなり広い街だった。

2人にとってここはどんな場所なのか分かっていった。

初めてここへ来た時は、2人ともまだ小学校低学年から中学年の頃だった。

その暑い日、2人は初めて2人つきりでちよつとした旅行をした。その時、バスで通ったこの場所に2人は初めて感動という言葉を知った。他人からしてみれば、ただの街の風景にししか見えないが、まだ幼かった2人にとってそれは未知との遭遇の様に感じた。2人は、その思い出を忘れられず、最後にもう一度ここへ足を踏み入れた。

ゴン達は、バイクを近くに止め降り立った。そしてその風景に心を落ち着かせた。

「やっぱり来てよかったね……」言葉が言った。 gon はそれにうん……と頷いた。

gon は、景色に夢中になっている一方、言葉は何か言いたそうな雰囲気を漂わせていた。しばらくすると、何かを決意したのか、よしと小声で言った。そして、彼の方を向いた。

「本当は、言わないつもりだったけど、やっぱり言わないと気が済まない。」言葉は頬を赤くした。

「……なに？」 gon は、頬を染めた彼女を見て聞いた。

「……やっぱり、私は gon が好き。馬鹿みたいに優しい、 gon が……」その言葉に、彼は特に驚く様子もなく話を聞き続けた。

「…私はゴンが1番好きだけど、貴方にとって私は1番じゃないんでしょ…」

言葉は、彼の顔を見るのが怖くなり景色に目を向けた。

「…いいの、気にしないで。分かってたから…」彼女は、ゴンの顔を気になりつつも見ないようにしていた。その彼女に、ゴンは口を開いた。

「…昔の俺だったら、そうだねって言ってたと思う。でも、最近気づいたんだ。俺は風香さんと同時に、同じくらい言葉のことも好きだつて…なんだかねで俺のことをずっと見てきてくれた君が…」

そう彼が気づいたのは、最近の事だった。

彼はふと疑問に思ったことを、ワードに聞いた。

「俺は、なんで『矛盾』の力で変身するんだ？」

ワードはこれまでも矛盾、跳速、剛力、烈火、光芒の形に変身してきた。しかし、矛盾だけは他と違い最初から手元にあった。

『…原理はよく分からないのじゃが、ワードの力を手にしたものを反映した核がその人の想いから作られる。お主にとってそれが『矛盾』だったという訳じゃ。』

「俺を反映した…」ゴンは身に覚えがなかった。というよりも、気付きたくなかった。

『…やはり、自覚はないようじゃのう…』ワードは既に分かっているような素振りを見せた。

「…俺には、2人を選ぶ事はできない…どっちも好きだ。そこが矛盾しているってことなのかな…」

やはり分かってたかため息をつくとき、ワードは言った。

『人間、自分の都合の良い事に物事を捉える。だからこそ矛盾が起きる。じゃが、それは全て悪いことではない。慎重に考える事もまた必要なのじゃよ。お主は…どうしたいのじゃ?』

ワード、今がその時だ。見ていてくれ…

「だからこそ言いたい。俺は言葉に幸せになつて欲しい。まだ見知らぬ誰かと、無責任に思うかもしれないけど…俺にはそれくらいしかできない。」

ゴンは、その選択をして正解だったのかずっと考えていた。

「…。私も、ゴンに幸せになつて欲しいって思つてる。そして、幸せにするのは私じゃないって分かつてる。だから…」

その頃、とある公園では勝治と神楽が散歩……というよりもデートをしていた。2人は、竜との戦いののち、恋人の関係になった。クラスで最速と最強の2人の関係は誰もが祝福した……と思いたい。

「……なあ、本当にどこも行かなくていいのかわ？」

勝治は、てつきり遊園地や小洒落た店に行くとはばかり思っていたからか、公園で散歩だなんていう行為で驚いていた。

「うん、これでいいの。勝治は東京行っちゃう訳だし、最後にこの街を歩いて記憶に刻んで欲しいって思ってる……」

勝治は、来月から東京へ引越す事になっていた。その就職先はジョーカーだ。彼は、紅蓮としての戦いを認められ、ジョーカーに正式に入社する事が決まった。

本来、ジョーカーに入る為には2種類の方法がある。一つ目は、勝治の様に、社長などジョーカー上層部に実力を認められる事。もう一つは、ほかの会社と同じように試験を受けて入社する方法。二つの違いとして、まず戦闘隊員になれるかどうかだ。後者の場合は、殆どの場合、その他部署へと回される事が多く、戦闘隊員になる事はほとんどありえない。そしてもう一つの大きな違いは重要とされている点。前者であれば体力

や精神力、協調性が重視される一方、後者の場合はIQや理解力を重視している。

「…少しいいか？」勝治は、彼女に話しかけた。彼は、言いたい事があった。将来のこと…自分と彼女のこと…

「なに？」神楽は振り返った。

「怒り…悲しみ…嫉み…喜び…楽しみ…それらの感情が混ざり合う時…復活を遂げる…」

言葉が、言葉の続きを告げようとしたその時だった。

「づっ…」突然、胸を押さえて苦しみ始めた。あまりに急な出来事にゴンはパニックを起

こしかけた。

「言葉！しつかり!!」ゴンは彼女の身体を支える、しかし、彼女の苦しみは頂点を迎えた。
「離れて……!!」言葉は、ゴンを押し倒した。

「言葉……!!」ゴンが彼女を振り向いた時、その姿はなかった。

そのかわり、かつて彼を苦しめた神を屠る竜の姿があった。ボロボロになっている翼を広げ、身体中に血管が浮き上がっていた。弱々しく見える身体から、叫び声を上げた。「何が起きてるんだ。」言葉の中にいた性悪党は倒したはず……そう思っていた。

『……もしかしたら、あの小娘はずっと残留怨念に悩まされていたのじゃろう、それが何かの拍子に止められなくなり、あんな事に……』ワードも、平和を取り戻したとばかり思っていたからか、この状況に空いた口が塞がらなかった。

「俺は……」勝治がそう話そうとしたその時だった。

遠くから獣の遠吠えが鳴り響いた。かつて聞いたことのあるものだった。神を屠る竜のものだ。

「何！」神楽もその声の方へ振り返ったその時だった。

「ぐっ…」神楽もまた苦しみ始めた。

「どうした！神楽！」勝治が駆け寄った。

「うああ!!」その以上は2人だけではなかった。突然彼らの後ろにいた男もまた苦しみ、そしてその姿を人陰に変えた。邪剣を手にしたその男は、周りの人間になりふり構わず襲い始めた。

それに目を奪われているうちに、神楽もまた姿を変えた。前に怪人化した時と同様の黒き獣へと姿が変わってしまった。

「何がどうなってるんだよ…」

そうした事が、街中至る所で発生していた。

ある場所では地面が粉々に破壊され、別の場所では街路樹や人々が氷漬けにされ、また別の場所では車が宙を舞った。

「言葉！」ゴンは彼女を追いかけようとした。

その時、電話がかかってきた。相手は刹那だった。

「刹那さん！」

『街で突然人々が人陰に変異している。それもかつて私やお前が倒した奴ばかりだ！』
彼女にしては珍しく焦っていた。

『まさか竜の声に共鳴して、かつて人陰になったもの皆が変異しているのか…』ワードは、あまりの出来事で逆に冷静になっていた。

「…そんな…」

『とにかく今は手当たり次第倒すのみじゃ…』ワードのその言葉を聞き遂げた刹那は電話を切った。それと同じタイミングで竜は翼を動かし街へと飛んでいった。

「…変身！」

跳速の形へと変身した彼らは竜を追いかける。

「待って…言葉!!」ゴンはそう叫ぶが、竜は羽ばたき続ける。

その時だった。突然傍から攻撃があった。

『…なんじゃ!』ワード達が見ると、そこには白鳥のような人陰がいた。

「あれは弧敷夏希さんの人陰…」初めて跳速の形で戦った人陰だ。それはこちらに突撃してきた。まるで竜を守るかのよう。

人陰は、ワードを掴み下へと投げつける。ワードは翼で体勢を立て直しながら弓を引き、矢を放った。その矢は人陰に激突、そのまま爆発した。人陰は徐々に姿を失い、弧敷夏希の姿へと戻っていった。

「夏希さん！」ワードは彼女を抱えそのまま地面に降り立った。

そして、安全なところに彼女を寝かせると、神を屠る竜の方向へ走り始めた。

『どうやら、倒した人陰はそのまま人間に戻るようじゃな。』

ワードはそう付け加えた。その後、彼らは足を止めた。目の前には玄地とラーメン屋店主が変異した緑と青の人陰がそれぞれいた。

「…一気に行こう。」 gon は核を剛力に付け替えた。青き鎧の剛力の形に変身した彼は剣を構え迫る緑の人陰に斬りつけた。そこへ青い人陰が迫る。肥大化した右腕でワードに攻撃する。同じ剛力の力だったから少しの傷で済んだが、それ以外だったらほぼ間違いない大怪我だっただろう。

ワードは青い人陰を剣で斬り飛ばすと、立ち上がったばかりの緑の人陰を必殺の一撃で倒した。中から私服姿の玄地が姿を見せた。

青い人陰は、ワードを横からタックルで吹き飛ばした。

「ぐっ……こんな所で止まるわけには…」

「ゴンは痛む身体を起き上がらせた。だが、青い人陰は容赦なく突撃してきた。

「どけ!!!」その時だった。横から炎の攻撃がそれを妨害した。

「勝治!」ゴンはそれが誰かすぐに分かった。紅蓮に変身した勝治だった。

「ゴン、大丈夫か?」紅蓮は、ワードを見て言った。

「それはこつちの台詞だ。なんでお前も人陰になってないんだよ…」勝治は、ワードになつて初めて倒した人陰に変身していたはず…

「多分烈火核を手元に持つていたからだろう。神楽も、他のやつのように人陰になつちまつたからな…」

そう紅蓮が指差した方には、黒き獣の姿があつた。

「神楽…どうすれば…」ゴンがそう呟いた時、勝治は驚くべき行動に出た。烈火核を引き抜き、変身を解除したのだ。

「何やつてるんだよ!」そして勝治はゴンの目の前に烈火核を差し出した。

「俺が神楽をどうにかする。お前は言葉の方へ行け!」

「でも変身できなければ…」

「俺にはもう一つある。」そう言つて見せたのは、『紅鎌』核だった。

「行け!ゴン、ワード!!」勝治はそう叫んだ。

「…分かった。絶対死ぬなよ…」

「…分かつてる。俺はまだ神楽に伝えなきや行けない事があるからな。」勝治を背にしワードは走り出した。

ワードは、剛力の形から金色の光芒の形へと変身し、光の速度で走り出す。

途中、道路の人陰と木の葉のような人陰が立ちはだかった。

ワードは、まず道路の人陰に対して拳を突き上げる。そして、更に目にも止まらぬ速さで木の葉のような人陰も蹴り上げる。

そして、右脚に光を纏わせると、そのまま2体を蹴り飛ばした。

2体はそれぞれ元の人間へと戻っていった。

『言葉のところまでもうすぐじゃ!』

「待つてろよ…絶対に助けるからな。言葉!」大切な人

ワードが進んでいくのを見守った勝治は、起き上がった青い人陰を斧で叩き伏せた。「神楽、今言つて聞こえるかは分からない…だが言わせてもらおう。俺はどこへいっても必ずお前を迎えに行く。絶対に…その為にも、俺は戦う!!」

紅鎌核を勝治はベルトに装填した。しかし、変身用ではない強力な力が彼を蝕む。

「刹那さんができたんだから、俺にだってできるはずだ。変身!!」

「紅鎌、登上!」[紅の炎に燃える大鎌、紅蓮!]

胸部に紅鎌という文字が現れ、勝治は新たな形態へと変身する。

両肩は鎌のように三日月状に変わり、腕部には鋭い牙が現れる。手にしていた斧は、前に必殺で使った時のように紅蓮の鎌に変化している。

「神楽、待つてろよ。すぐに助ける!」

紅蓮は鎌を振り下ろす。黒き獣は、身動きが取れずそのまま鎌の勢いで吹き飛ばされる。

彼はすぐさま次の攻撃に入ろうとした。しかし、そこへ青い人陰が乱入する。

人陰はその剛腕で殴ろうとする。紅蓮はそれを屈んで回避すると、そのまま右拳を奴の腹部に激突させた。その勢いでそのまま人陰は爆散、元のラーメン店主に戻った。

「次は神楽の番だ。」黒き獣は言葉を理解したのかしてないのか分からないが、紅蓮に迫る。

紅蓮は、鎌を下から上に振りかぶり黒き獣を吹き飛ばす。

勝治はベルトを操作した。「マウントサイズ!」

炎を纏った鎌を、紅蓮は上から下へと黒き獣に振り下ろした。

その攻撃は、2人でも苦戦した黒き獣の身体を貫いた。

黒き獣の鬨は徐々に晴れ、神楽の姿に戻っていく。

倒れていく神楽の身体を勝治は支えた。

「神楽、しつかり！」

「…ってるから…」神楽は、目覚めて最初、何か言った。

「…なんだ？」聞き取れなかった勝治は聞き返した。

「…待ってるから…何度も言わせないで…」神楽はそう笑顔で言った。

最終回 言霊の終着点

ワードは、光芒の形で言葉の元へ急いでいた。しかし、そこへまた別の人陰が邪魔をした。

「なんだ……こいつは……」

その人陰は翼を生やし、巨大な体を持っていた。

『光芒では相性が悪そうなのう……』

「だったらこれで！」

「覚醒する神話鳥……ワード、神鳥！」

ワードは、光芒の形から橙色の形態、神鳥の形へと変身する。そして、迫る人陰に巨大なロボットアームを振り下ろす。

その攻撃で逃げようとする人陰をワードは翼で飛び押さえつけた。

そして、そのままロボットアームを振り下ろし撃破した。

『反応が近い、もうすぐじゃー！』

「分かった。」

ゴンは言葉の元へ急いだ。

「ウギヤアア!!!」

言葉が限界を迎え暴走した神を屠る竜は、街の中にある大通りに陣取っていた。時々雄叫びをあげている姿は、まるで誰かを呼んでいるかのようだった。

その周りには、様々な人陰が竜を守るように囲んでいた。

「言葉!!」そこへ現れたのは、烈火の形に変身したワードだった。

ワードの登場に、人陰達は一齐に動き出す。十数体の人陰はワードへ波のように押しかけた。

彼はそれを炎の槍で薙ぎ払う。弾き飛ばされた人陰は次々と壁や地面に打ち付けられ、人へ戻っていく。

一体の人陰が氷を放った。山寺美月が変異した人陰だ。

その氷を盾で防ぐ。そして必殺技を発動させ、炎を纏った左拳のパンチでその人陰は吹き飛ぶ。

しかし、人陰は次から次へと迫る。ワードの四方八方は人陰に埋め尽くされていた。

「これじゃ、言葉のところにいけない……」

『一体一体倒すのは埒があかない……』ゴンもワードもこの状況に絶望を感じていた。このままではダメだ。そう思った時だった。

「マウントブリザード！」

人陰の背後から次々と氷の斬撃が放たれた。人陰はその攻撃に倒れた。

「刹那さん!!」現れたのは、氷華に変身した刹那だった。彼女は、ワードに言った。

「待たせたな、ゴン。人陰は私に任せろ。お前は彼女を救え！」

氷華はそう言うのとベルトに守神核を入れ、氷華護神へと変身した。

「お願いしますー！」 gonはそう言うのと人陰の間を駆け抜けて神を屠る竜の元へ走り出した。

「いくぞ、哀ー！」

氷華は、迫る人陰に対して次々と的確に攻撃をしダメージを与えていく。

氷を纏った斬撃は人陰を次々と倒していく。

「ウガアア!!!」竜は、ワードがやってきた事に反応して叫んだ。

「言葉……お前の苦しみは、俺が断ち切る！」ワードは、炎を纏った三叉の槍を突き出した。

「ウギヤアア!!!」 竜も口から閃光を放った。その攻撃にワードは盾で防ごうとする。しかし、あまりの勢いで盾が焼かれてしまった。

「盾が!」『余所見をするでない!』ワードの声で、竜の爪の攻撃が迫っている事に気がついた。それを回避するが、その直後にやってきた地響きで倒れてしまった。

「ぐっ…こんなところで終われるか!」ワードは立ち上がると、再び槍を構えた。烈火に燃えるワードは、炎を纏い竜に突撃する。その炎は、竜に対して有効なダメージを与えられると…

しかし、そう上手くはいかなかった。ワードは槍も弾かれ、再び地面に倒された。

武器を失ったワードは、己の拳で立ち上がり、拳に炎を纏った。

「まだだ…俺は!」ゴンは、その炎を竜の胴体につけた。しかし、蹴り飛ばされ地面に転がる。

『無茶じゃ、核を代えよ!』そうワードは言った。

「でも…今ある俺の最大限の力は烈火だ。それを変えたら、戦闘が長引いて言葉が余計苦しむ。そんなのは嫌だ!」

『分かった。ならワシに策を考えさせてくれ…』

ゴンのその言葉に、ワードは言い返せないと感じ、口を閉じた。そして、何かを考え

始めた。と言うよりも、策は既に一つしかなかった。しかし、それをする覚悟を決める時間が欲しかった。

「言葉……」ゴンは我武者羅に拳をぶつける。しかし、それら一つ一つは焼け石に水だった。その度に竜はゴンを振り払い、蹴り飛ばし、閃光を浴びせた。

……だが、彼はそれでも倒れなかった。倒れる訳にはいかなかった。勝治から受け取った烈火核、刹那が周りの人陰を任せている。そして相手の言葉は苦しんでいる。そんな状況で負ける訳にはいかなかった。

「……俺は、俺は聞きたいんだ……!!」

何度目か、ゴンはまたその地に自分の足で立ち上がった。

「あの時……君が言いかけていた言葉を……教えてほしい……。俺はそれを知りたいんだ！
言葉の言葉で!!!」

ゴンがそう言ったが、暴走した竜はそんな言葉に気にも留めなかった。

そして口から閃光を再び放った。その攻撃をワードは真正面から受けた……受けてしまったと言った方が正しい。

「ゴン!!」刹那が叫ぶ声が響いた。

そもそも無謀だったのだ。前よりも強化された敵に、一人で挑もうだなんて…

そう誰もが思うだろう…だが、そんな話は彼には通用しない。

彼は、無謀でも戦う。大切な人の為なら、世界の笑顔のためなら…何度でも！

閃光が晴れたそこには、炎に包まれたワードがいた。

炎を身体に纏わせる事で一時的に鎧として使い、光から身を守ったのだ。

「バーニングガイザー!!」

ゴンは、ワード最強の必殺技を発動させた。空へジャンプし両脚を竜に向かって解き放った。爆炎を纏った両脚で竜に特攻する。それが彼にとって最後の賭けだった。

両脚が竜に激突すると、天まで届く炎の柱がその場に湧き上がった。

ワードも竜も巻き込んで。

炎が止んだ時、一つの影が見えた。それはワードのものだった。

しかし、その背後にはまだ暴走が止む気配のない竜の姿もあった。

力を使い果たし、今にも倒れそうなゴン、そこへ竜が右爪で攻撃を仕掛けた。最早それを避ける術も、防ぐ術もなかった。

それを受けて終わり…：そうなる筈だった。

次の瞬間ワードは、紫の矛盾の形へと変身し、盾でなんとか軽傷で済ませた。

「ワード？」

それを操ったのは、ワード本人だった。

『お主、戦いはしばらくワシが引き受ける。その間、休憩がてら覚悟して欲しい…：勝つための方法を！』

ワードは、盾で防御しながら矛を巧みに使いこなし竜の身体に次々と攻撃を繰り出

す。それがダメージに入ってはいないが…

「勝つための方法って…?」

ゴンが聞く。ワードは、その問いに自分の覚悟と共に話した。

『ワシがお主と完全に一つになるという事じゃ。』ゴンは最初、その言葉の意味が分からなかった。

「俺がワードと?」今も一つじゃないのか、そういう意味も含めて聞いた。

『そうじゃ。今はあくまでお主の身体にワシが居座っている状態。それが、完全に一つになるというだけじゃ。』ゴンは、この時何かあると感じ更に聞いた。

「もしそうなら、俺達はどうなるの?」

『お主は、ワシの全盛期の頃と同じ力を手にする。そして、その力で神を屠る竜を倒し言葉を救える。じゃが…』前半だけ聞けば、彼にとってこの上なく嬉しい事だった。だが…

『…そのかわり、ワシは力を全て託してしまう事で、意識も消滅する。』その言葉を聞いた瞬間、ゴンは絶対に無理だと拒絶しようとした。今までずっといた自分の片割れのような存在を、犠牲にするなんて…そんな事できないと…

「俺は…ワードが居なくなるのは嫌だ!」

そう泣きそうな声でゴンは言った。

『…消えると言うても、意識だけじゃ。その意識を保っていた力がお主の最強の力となる。』

ワードはそう優しく言った。しかし、それでもゴンは頑なに答えを出そうとしなかった。そのあまりにも彼らしくない態度に、ワードは顔を顰めた。

『お主は言葉を救いたいのではないのか！お主はそんなに腑抜けなのか！』

その言葉に、ゴンは何かに気がついた。と言うよりも、全ての物事の前提を忘れていた。

俺は言葉を救いたいと、

「…ワードはそれでいいのか？」ゴンは聞く。

『お主の為になるのなら大歓迎じゃ。まあ、こうして会話できなくなるのは残念じゃが…』

ワードは、今までのゴンとの思い出を振り返り、涙が溢れそうになっていた。

『お主は、ワシが今まで共に戦ってきた人間の中で一番心の芯が強く、優しい人間じゃった…そんなお主に力を託せるのに後悔はない。』

ワードはそう言い切った。

竜は、ワードに対して閃光を放った。ワードはそれを空中に飛ぶ事で回避した。

『どうする？ 全てはお主の意志で決まる。』ワードがそう言うと、ゴンは一呼吸した。

そして、残酷だが希望のある答えを口にした。

「…ワード、力を託してくれ！ 俺は言葉を救いたい！」

『よく言った。力を託そうぞ！』

そう言うと、突然ワードの体が虹色に光り始めた。そして、ワードが持っている様々な核が空を飛びワードに力を与えていく。

『ワシは…お主のような戦う人が必要ない、平和な世界を見たいのう…』最後にワードはそう言った。

「…なら、俺が実現しよう。その世界を。」ゴンは、ワードに笑顔で答えた。

『ありがとう…』その言葉を最期に彼の心の中にあつたワードの心は、消えていった。

それは、その力が完全にゴンのものになったと言う事を示していた。

徐々に湧き上がるその力に周りは風が起き、その勢いで土埃が舞う。

「ウオオオ!!!」

彼の目の前には、『天獄』『下弦』『無尽』『双翼』の4種類の核が並んでいた。それらの核は、一つに合わさり新たな核を生み出した。

『天下無双』それが新たな核の名前だった。

虹色の光が収まり、ゴンは完全にワードと一つになった。そして、天下無双核を手にした。

「俺は俺の力で救う…救ってみせる！」

「四字核、読み取り！」「天下御免、最強無双ワード！天下無双！」

新たな核は、ワードに最強の力を与える。白と銀色を基調としたその身体、身体には白銀のローブがつけられ、より神々しさを増す。矛と盾をそれぞれ象っていた複眼は、整った大きな複眼に変化し、頭部中央には虹色の龍の紋章が現れていた。

これが新たなワード、天下無双の形だ。

「邪剣」「機械」二つの核が召喚されると、それらが一つの核となり、新たな武器を生み出した。

「改剣ブライトブレード！」剣の正面に巨大な円板が載せられた大剣をワードが握ると、その円板にワードがこれまで使った5形態の核が並んだ。

ワードはその剣を竜の胴体に斬りつけた。

跳速の速さ、剛力の強さ、光芒の鋭さ、烈火の焼き切る力、そしてそれらを基本である矛盾が支える事で最強の剣となる。

その剣で切り裂かれた竜は初めて悲鳴を上げた。

「これならいける！」

「白鷺」「神鳥」今度は二つの鳥の核がワードの背中に吸収された。

すると、背中から虹色に色付けされた巨大な翼が生えた。

そして、その翼で空を飛び、剣を片手に竜の身体を次々と切り裂いていく。

「ウギヤアア!!!」竜は更に悲鳴を上げた。

地面に着陸したワードは、竜を見た。

竜は最後の攻撃に、再び閃光を放とうとした。

「地層」「青葉」

その閃光を、ワードは地層と木の葉でできた巨大な壁で防いで見せた。

竜は、それで完全に力を失ったのか、ふらついていた。

「……これで終わりにしよう。」

「超・必殺、書き込み!」「グレートライダーキック!」

ワードは再びその翼で空を飛んだ。そして、両脚を竜に向かって突き出した。

「言葉……!」

「道路」

今まで手にした核がエネルギーとして並び、それが竜への道筋となる。

全てのエネルギーを貫いたワードの脚部は虹色に輝いていた。それを、神を屠る竜にぶつけた。そして、その蹴りは竜を貫いた。

ワードは、竜がいた方向に振り返った。そこには、天から舞い降りるように、言葉の姿があった。

「言葉!!」ワードは、彼女を受け止めた。

「しっかり!」

彼女は、ゴンの声で目を覚ました。

「…私は…何を?」

言葉は、お姫様抱っこされている自分に驚いていた。

「よかった…もしよければ、さっきの続きを聞かせて欲しい…」ゴンは、そう言葉に聞いた。

「…だから、2人でそれぞれ幸せになろうねって…言おうと思ってたんだ…」
「そうだな…そうなれるといいな。」

リムール ワード編

第21話 2027：消失の救済者

酒に酔ったサラリーマンや、客引きの若い女が街を彷徨く夜、その男は不思議な時計を持っていた。

先程、時計と言ったが常人がそれだと判別するには難しいものだった。時計にとつて必要な針がなく、その代わりに不気味な顔が描かれている。全体は黒で縁取りされている。

「さて、作つたはいいがどうしようか。」

それを持つ男が言う。彼の名はネイム。世界を渡り『セパレーテド』という怪人を生み出す。

そもそもセパレーテドとは：まあここに立ち入ったものの中には、それを知っている者もいるだろうが、一応説明しておこう。

それは、無念を抱えた魂が人間を依代よりしろにして誕生する。そして、自身の望むエンディングの為に行動をする。ネイムはその手助けをしている者だ。

実際、この世界には既に一度立ち会っている。およそ5年も前の話だが。

「誰かいい相手は…」そう思った矢先だった。路地裏に、何かがぼうつと光るのが見えた。それは、ずっと一定の明るさを保っていた。

何かあると感じた彼は、その足を進める。

そして、その光の先を見るべく路地裏に入った。

「これは…フツ。」

彼は、その正体を見た時、いい考えを思いついたと言わんばかりの顔をした。

「君達の無念は、私が救ってやろう。」

そう言うと、時計を起動させた。「Word:i!」

「うおおお!!!」誕生した異形の紫の化物は、ビルの屋上へ上がり、本を使い街から『何か』

を集め始める。

「力が…湧き上がる。」そう呟いたその時、背後に人の気配を感じ振り返った。

「なんだ…貴様？」そこには、真紅の炎を纏った戦士がいた。

「ワード…！」怪物は彼の名を呼ぶ。

「俺を知っている？」ワードと呼ばれた人物は、驚く。しかし、次の瞬間ワードの身体から真紅の装甲が剥がれ始め、人間の姿へと戻る。

「何が起こっている？」塾屋ゴンは元に戻った身体を見る。その間に、怪物は夜の闇へと消えてしまった…

「あーもう、なんで俺だけ居残りなんだよ！」

放課後、ある教師に言われ俺は居残っている。確かに、テストの点は悪かった…それは否定しない。でも、補習ギリギリだったじゃん…

しかし、補習の為の居残りにしては、少々違和感を感じた。俺以外にも補習になる生徒は居たのに、俺だけが今日残された。

その残るように言った『教師』は中々来ない。相変わらず人使いの荒い…

「面倒な教師？か。」

「そうそう…って、いつの間に。」

いつの間に来ていたのか…この教師が、例の教師、東野誠也だ。

「職員会議が長引いてな…問題生徒の処罰の話し合いは面倒だ。」

彼は、胸ポケットから何かを取り出そうとしたが、すぐにやめた。恐らくタバコだろう。教師が学校内でタバコを吸ったなんて知れ渡ったら、問題になる未来が見えたからだろう。

「さ、居残り授業の開始だ。」

そういうと教科書を開く…かと思った。彼は持っていた教科書を教卓に置くと、教室に『世界移動』の為の膜を広げた。

「へえ、それは随分と楽しそうな居残り授業ね。」

その膜を潜ろうとした俺たちを、よく聞く彼女の声が止めた。

「ヒステラ？いつからここに？」

「救済者君、説明は後にしよう。それより、私を置いて課外授業とは、薄情な先生もいたものだね。」

彼女の名はヒステラ、一応俺の従者……らしい。彼女は、俺には綺麗な顔を見せたが、東野に対しては睨みつけるような視線を浴びせた。

「俺が伝える前に、お前が逃げるからな……不用意に避けているのが仇になったな。さ、いくぞ。」

2人は、相性最悪だ。俺もこの関係に何かしら言いたいことがあるが、今は関係ないことだから首を突っ込まないでおこう。

い。
ところで、俺が誰であるか……まあ、これを読む人間なら知っていて当然……かもしれない。

俺は『月河 統矢』……仮面ライダーリムール^{救済者}。

2027年 4月

俺は、新たな世界に降り立った。

街路樹が桜を咲かせている様子からして、恐らく4月上旬くらいだろうか。

しかし、何か違和感を感じる…なんというか…親戚の家に遊びに来た時みたいな懐かしさかな。自分の家とはまた違う、でも、全く他人の家であるとも感じない…そんな感じの。

「ここ、自分の世界じゃないのに懐かしい気分になるな…」俺の独り言に、東野は面白い着眼点だと言うような目をした。

「それもそうだろう、ここはウォーズの世界だからな。」

「そうなの？じゃあ、また康介が…」

俺にとってこの世界は、2回目と言う事になるらしい。今回は、仮面ライダーウォーズと共にセパレートドウォーズを倒した。今思えば、あれが初めて巡った世界での戦いだったな。

「いや、今回は別のライダーだ。この世界は少々狂っていてな、複数のライダーの歴史が重なっている…それも崩壊する事なく。」

ヒステラもそうだが、東野も大分変わった人物だ。普通、『並行世界』について知っている奴なんて居ないだろう？

「……珍しいのか、そういう事って？」俺は素直に疑問をぶつけた。

「……下から数えた方が早いお前が、今後の定期テストで毎回上位5人に入る確率と、殆どイコールだな。」

…なんか貶された気がするけど、とにかく珍しいけど、僅かにあり得なくもないと言うのはわかった気がする。

「雑談はその辺りにしよう、この世界の…2人目のライダーを探すのが先だよ。」

ヒステラが立ち止まっている俺たちを促す。

「2人目、と言うよりも3人目じゃないのか？」東野は訂正した。

いや、ウォーズにしか会ってないんだから、2人目でしょ。そう突っ込みたい。

「ネタバレに関わる発言はNGだよ。先生がテストの答えをいきなり言うくらいに。」

ネタバレ：と言う言葉の意味が分からなかったが、今知るべき事ではないのは確かだ。次誰に会うかなんて分かったら、つまらない。

俺達は、2度目であるウォーズの世界を歩く。2025年から2027年と2年も月日が経っているが、意外と街の様子に変わりはない。

しかし、何か物足りないような気がしてならない。

ふと、左手側にあるコンビニが目に入った。青に白に緑と三色のラインが入ったその見た目は、これを見ただけであれだとすぐに分かりそうだ。なんと名前だろうか、看板などを探して見つけようとした。

「救済者君、何か見つかったの？」立ち止まっている事を不審に思ったヒステラが声をかけた。

「なんでもない、先に行こう。」どうせコンビニだ。至る所にあるのだから名前を知るのなんて後でいいやと足を進める。

その後小一時間、2人目のライダーを探して街を歩くが、それらしき人物は見つけられなかった。

よくよく考えてみたら、仮面ライダーか仮面ライダーじゃないかってそんな事戦わな
いと分かるわけない。そう思うと、急に集中力が切れた。

「これ、康介に頼んだ方がいいんじゃないの？」俺はふとそう呟いた。

「それは禁句だよ。それに、この世界に余り関わり過ぎるのもロクな事に巻き込まれか
ねない…」ヒステラは、否定的な意見を話す。

「こういう面倒な世界ほど、外部からの干渉を受けやすい。と言うよりも、この世界がこ
うなったのも全て…」東野が話を広げようとした。

「さっきも言ったけど、ネタバレは厳禁だよ。その先を知らない人だって多い訳だし。」
彼女は、会話を遮った。だいたい、さっきからネタバレって言うけど、これ読んでる人
は知ってそうな気がするんだけどね。

「ネタバレというが、誰に向かってだ？」

「貴方だつてわかつてる筈だよ。」

まずい、2人の口喧嘩が始まった。このままじゃまずい。どうすれば…

その時だった。まるで雷が鳴るかのように俺の腹が空腹を知らせた。…そういえば、

今日は昼飯もともに食べてなかった……恥ずかしいが、2人の口論を止めるには丁度良かった。

「救済者君、お腹が空いていたのか。気づかなくて申し訳ない。」

「……しようがない。この近くにいいラーメン屋がある、そこへ連れてってやる。」

どうやら、喧嘩の流れを断ち切れたようでよかった。しかもついでにラーメンも食べれるなんて、今日はいいい日だ。

「らっしやい。」

赤い暖簾を潜った先に、旨そうな匂いが漂う店内。俺達は東野おすすめのラーメン屋に入り、一番手前のカウンターに東野、俺、ヒステラの順番で座る。

「……いつもの。」東野は、店主らしき人物に言う。

「……ねえ、いつものって何？」俺は気になった。

「……ほら、あそこに書いてあるエレ……なあ、あのメニュー表、文字が掠れて見えないぞ。」東野が指したメニュー表には、一切文字が書いてなかった。

「そんな筈はないよ。朝も俺磨いた時にはつきりと書いてあったし……本当だ。なんでだ？」店主も、文字が掠れていることを不審に思った。

「ねえ、まさかこれセパレータードの仕業じゃないようね…?」

俺は3人にひそひそ声で話す。

「…確かに、可能性がある。」ヒステラは俺に賛同する。

「そんな、文字を奪う奴なんている筈…」東野が反対の意見を言おうとしたその時だった。

「うわっ！怪物だ!!」「逃げろ！」

外が騒がしくなった。そして怪物というその言葉、まさか！

「…行ってみよう。」俺は2人に目配せして外に出た。その意図を理解した2人も外に出た。

「…文字を寄越せ…!」

そう言つて、逃げ遅れた男の手に持っていた本を、自身が持つ『本』に吸収する。

「何やってんだ…やめろ！」統矢は、その怪物に向かつていう。

「ワード…?」怪物は、その身体を振り返らせた。

一色の紫からなるその身体だけでも怪物であると言っているようなものだ。右腕には盾、左腕には本を持っている。背中には、槍のような武器を提げている。頭部は、兜が砕け中の顔が見えているような造形が施されており、初見では恐怖を感じるだろう。

「あれが…ワードか？」東野は、あの怪物と『彼』の姿を重ねた。

「今は誰であるかよりも止める方が先だ!」「REMEMBER!」「WAR-Z!」統矢はリムールとウォッチのウォッチを起動する。

「救済者君、始めよう。」「救済暦伝!」ヒステラは、小型の本のような道具を起動する。

「…そうだな。やるなら、早くやるぞ。」東野は、ブツカーからカードを取り出し、正面に向ける。

3人は、それぞれアイテムをベルトに装填する。

「変身!!」息ぴつたりその掛け声で、それぞれの変身が発動する。

[RIDER TIME!][KAMEN RIDER REMEMBER!][ARMOR TIME!][Open!WAR-Z!]

[聞伝 抜刀!][聞伝 一冊!歴史の書と伝暦剣聞伝が交わる時、従者の懐刀かいとうが離空を切り裂く!]

[KAMEN RIDER.][DE-Raise!]

統矢が変身した黒と青の仮面ライダー、リムール。本来なら、右にウォッチを装填し

て変身する。しかし、今回のように左側にアーマーとなるライダーのウォッチがある場合は、そのライダーに対応したアーマーが装着される。今回はウォーズだから青緑のアーマーが装着される。左胸には、ウォーズのアイデンティティと言ってもいいZのラインが浮かび上がる。リムール、ウォーズアーマーの完成だ。

剣をベルトから引き抜き事ではステラの身体は漆黒の鎧に包まれる。背中には、彼女の特徴でもある銀の長い髪が地面に向かって伸びている。空に向かって伸びるソードクラウンと、紅の瞳が特徴的なライダー、ステラの変身が完了する。

ベルトを閉じる動作とともに、東野の体の周りには、灰色の複数の素体が並ぶ。それぞれ彼に向かって動き、一つになる。それによって、灰色に緑の瞳が煌めいていた。そこへ、数枚の板のようなものが顔へ突き刺さる。それによって、体色にマゼンタが加わり、ディレイズへと変化させた。

「お前ら…ワードの仲間か…?」

怪物は、姿が変わった3人をみて、彼の名を口にする。

「…アレが持っている本…」ヒステラが、彼が持つ本をみて呟く。

「どうかしたのか…?」リムールが聞く。

「確か、神器と同程度の力を持つとされる本、『オグマの書』に似ている……どんな力を持っていたかまでは覚えていないけど、警戒した方がいい。」彼女は、武器を銃に持ち替える」と引き金を引き怪物に攻撃する。しかし、これは盾で防がれる。

「……面白い、相手をしてやろう。」怪物は、本を盾の裏に収納すると背中 of 槍を取り出した。紫色に反射する刃を見せつけ3人と距離を詰める。

「来るぞー」デイレイズは、ライドブツカーを剣に変え攻撃の態勢に入る。

怪物は、槍を距離が一番近いデイレイズではなくリムールに向けて突き出す。

リムールは、鎧を微妙に擦ったが、ほぼ無傷で避ける。

「俺かよー」リムールは拳を握りしめる。

そして、再度槍の突きを見舞おうとする怪物の右胸にストレートをぶつける。

格闘技能に優れたウオーズアーマーの拳は、怪物に強い衝撃を与える。しかし、怪物は後退しただけですぐ様攻撃を仕掛ける。

「こいつ、痛みを感じない？」そうリムールが呟く間にも怪物は攻撃を仕掛ける。

リムールは、それを回避する。

勢いに身を任せていた怪物は、後方にいたヒステラの方まで走る。

彼女は、銀色の髪を靡かせながら避ける。

しかし、それが奴の目的であった。怪物は、盾から本を取り出しヒステラに向ける。

「どうして？」

すると、彼女の身体を形成していた鎧が徐々に吸い取られていく。刹那、彼女の鎧はベルトに装着されていた本と共に消えてしまった。

「ヒステラ！」リムールは、変身が解けた彼女を守るべく前に出る。

「…力を奪う本か…燃やすに尽きる。」「KAMEN RIDE, LOCK!」

デイレイズは、鍵の騎士ロックへ変身、さらに右半身の赤いロックのカードを装填する。

「FORM RIDE, FLAME!」

ロックフレイムフォームへと変身。炎を纏ったライドブッカーで怪物を斬る。

怪物は、左手が本で塞がりながらも右腕の拳で攻撃を仕掛ける。

デイレイズは、攻撃を受けて一旦引く。

しかし、間髪入れずリムールが攻め込む。

「ついでだ、貴様の力も貰う。」怪物は、再び本を開いた。

すると、今度はリムール、ウォーズのウォッチ、そして顔面の『ウォーズ』の文字の吸収を始める。

「何！」リムールは脱出を試みるが、身体が脱力して上手く動けない。

「はあっ！」そこへデイレイズが間を割って入る。

デイレイズは、剣で怪物を振り払おうとする。

分離した勢いでリムールは地面に倒れるが、その頃にはリムールからウォーズアーマーが外れていた。

そして、地面にウォーズウォッチが転がる。

「……」リムールがウォーズウォッチを拾い上げる。しかし、そのウォッチはウォーズの顔が描かれておらず、ブランクになっている。

「ウォーズのウォッチが……」リムールは、ウォーズウォッチが消滅した事に絶望しそうになる。

「こいつ、かなりの曲者だな。」デイレイズはそう言う。

「ああ……よくも、康介の力を奪いやがって……」リムールは立ち上がると、右腕のホルダーに装着されている新たなウォッチを起動する。「HOLLOS!」

ウォーズウォッチが外れた左側のスロットに、ホロスウォッチを装着する。そして、ベルトを回転させる。

「ARMOR TIME!」 「ALCHEMIST MACH! HOLLOS!」

リムールの素体に、新たにオレンジとゴールドの鎧が呼び出される。そして、それらが装着されていく。左腕には、特徴的な口ポットアームが装着されている。リムール、ホロスアーマーは左腕を構え怪物に向かって走り出す。

「おらっ!!」リムールは左腕のロボットアームを怪物にぶつける。怪物は、そこで初めて突き飛ばされ、地面に転がる。

「ぐっ…中々やりおる。しかし、ワードと比べればまだまだ!」

追撃のパンチを迫るリムールを怪物は回避、左腕の本を即座に槍に持ち帰ると後ろ向きのリムールを切り裂く。

「ぐっ…ウオーズの力返してもらおう!」

「FINISH TIME!」「ALCHEMIST・TIME PROTECT!」

リムールは、必殺技を発動させる。左腕に強大なエネルギーを纏わせる。そして、怪物に対して突き出す。

「…甘い!」怪物は、その左腕の攻撃を右手の盾だけで防ぐ。

そして、左腕の槍を本に持ち替えて開く。

「学ばない奴め…」怪物は、必殺技に集中しすぎたリムールの隙を狙って、再び力を吸収する。

「まずい!」引き下がれないリムールは、必殺技で無理やり押し切ろうとする。

「あの馬鹿!」デイレイズは、攻撃をして2人を止めようとした。しかし、その行動を起こす前に、その必要は無くなってしまった。

リムールの力はホロスの力と共に本へ完全に吸収されてしまい、統矢の姿へ戻ってし

まった。

「そんな…変身が！」

戸惑う統矢、それを怪物は平手打ちする。そして、盾に本をしまう。

「もう貴様らに用はない…」そう言つて立ち去ろうとした。

しかし、それを良しと思わない人物が現れた。

「ようやく見つけた…今度こそ倒す！」

「…来たか！ワード！」

デイレイズの後ろには、怪物と似たような見た目の仮面ライダーがいた。右半身が赤紫、左半身が青紫になっていて、瞳には『矛』と『盾』を模した緑の瞳が敵を見る。怪物は彼を『ワード』と呼んだ。そう、彼こそがこの世界の3人…いや2人目の仮面ライダー、ワード。

「…だが、貴様とはまだ戦う必要がない。」怪物はそう言つて姿を消した。

「また逃げられた…」ワードは変身を解き、倒れている統矢に近づく。

「大丈夫ですか？」彼は、統矢に手を伸ばす。

「…ありがとうございます。」統矢はその手を握り起き上がる。

「貴方の名前は…？」

「俺は、塾屋ゴンです。初めまして…」

第22話 2027：言霊と救済者

「もう貴様らに用はない…」彼らはそう言って立ち去ろうとした。

2度も逃しはしない、そう俺は前に出た。

「ようやく見つけた…今度こそ倒す！」

「…来たか！ワード！」

彼らは、俺の姿を見て名前を呼んだ。その声に、ピンクのライダーと少年そして少女が一斉にこちらを向いた。見た事ない奴らだが…悪い人では無さそうだ。このまま共闘できれば…そう思った矢先だった。

「…だが、貴様とはまだ戦う必要がない。」彼らは、そう言い残して立ち去った。追いかけようと試みたが、跳速や光芒がない以上、追跡は難しいだろう…

「また逃げられた…」俺は変身を解き、倒れている少年に近づく。

「大丈夫ですか？」俺が手を伸ばすと、彼もまた手を伸ばした。

「…ありがとうございます。」彼はその手を握り起き上がる。

「貴方の名前は…？」

「俺は、塾屋ゴンです。初めまして…」俺は、この姿の名前を教えた。

「君がこの世界のライダーの1人、ワードだね。」少女は、俺の方に近づき確かめた。何故、ワードを知っているのだろうか…

「…何故俺の事を？」

「…それについても、あのセパレーターについても話を聞きたい、詳しくな。どこかで話をしないか？」ピンクのライダーだった人は、変身を解いた。その見た目は、まさに大人の男性と言っても過言ではない。

「なら、家が近いんでそこで話しましょう。」正直、どこの誰か知らない人だけど、彼らについて何か知っている様だ。それに、康介さんが言っていた…「マゼンタのライダーが来たら、ソイツとは仲良くしておけ」って…

歩いて数十分、俺達は閑静な住宅街へと入っていく。その静かな世界の最奥に彼の家はあった。

「お邪魔します…」俺はそう呟いて家の敷地へと入っていく。

「今、母さんは居ないみたい。」塾屋さんはそう言つて家の鍵を取り出し扉を開けた。

室内は綺麗に整頓されていた。物が全て自分の意志で整列するように並び、白い壁は常に手入れされているように感じる。

俺達は、2階へと案内された。階段を登った先には、3つ扉があり、彼は迷わず一番手前の部屋を開けた。

「……すつゝ……」

「そうかな……?」

何がすごいのか、それは部屋中にびっしりと並べられた本棚とそこに立てかけられている本の数だった。

本と言つても、漫画や雑誌ではなく活字の…俺が苦手な本が数多く存在している。それら全てが本屋のようにシリーズ、作者ごとに纏められている、この一角を図書館だと言つても遜色ない。

「どうぞ。」塾屋さんは俺達を部屋の中へ招き入れた。

「それにしても本、か。ここまで集めるのも良くやる…飽きないのか?」東野がここまで本を集めている彼を不思議そうに聞いた。

「飽きるわけない!」即答したのはなんとヒステラだった。

「これだけの本が有るなんて、まるで楽園だよ、ここは……」ヒステラの熱弁は続く。「そんなに褒めてもらえて、嬉しいよ。君も本が好きなの？」同志を見つけたのか塾屋さんのテンションも上がり始めた。

俺達なんでここ来たんだっけ？

「勿論、中でも『時計台の魔女』は特別だね……闇夜を舞う主人公、アレは美しいとすら言えて……！」

「天使を騙る偽善者に罰を下す、それがとてもスカツとするんですよ！今度3巻が出るから楽しみなんだよね……これは未来に受け継ぐべき神作！」

「この世界はもうすぐ3巻が……まだ2巻が出たばかりなのに、なん羨ましい……」
 ……
 「なんで同じ本が別世界にもあるのか、そんな野暮な事を気にしては駄目なのだろうか」

「否定はせんが、何が面白いのかもいまいち分からんな……」東野はボソツと呟いてしまった。

「……そういえば、元々は君を撃つことが目的だったっけ。」その言葉にヒステラは即座に反応し鋭い眼光を突きつけた。それはまるでディスプレイのようだった……なんて言ったら今の東野みたいになりかねない……

「……不機嫌な時は姉そっくりだな、輪をかけて。」

あつ、死んだな…東野。

「まあまあ、とりあえず本題に入りましょうか。」

今にも世界が滅亡するかもしれない勢いを塾屋さんが止めた。ナイスです。

「そうだったな…取り敢えず、あのセパレーテドについて知ってる事を話してもらおうか。」東野は、乱れたスーツの裾を直しながら聞く。

「…あのセパレーテドは、何が目的かは分からないですけど、町中のありとあらゆる『文字』を集めているんです。彼が持っているあの本を使って」

「本…オグマの書、のことだね。」ヒステラが付け加える。

「その能力のせいで、僕に残された力も『矛盾』しかない。」そう言つて塾屋さんが見せたのは紫色で『矛盾』と書かれていた。言われてみれば、これがあの人のベルトに装填されていたような気がする。

「…それで？ 奴の正体は分かっているのか？」

「…確証があるわけではないですけど、『性悪党』そのものなんじゃ…あつそもそも性悪党というのは、言操神ワード…つまり俺に力をくれた神に仇なす人間の憎悪から生まれた存在。」

「…なんで、そう思つたんですか？」俺は聞く。

「…実は、さっきの戦いみたいに俺は奴らから避けられている…というよりもわざと避けているような感じがするんだ。そしてこうも言っていた。『まだその時ではない』と。」

「つまり、その怨霊とやらはお前に復讐する為、力をつけてる最中か。」

「そういう事…だと思えます。」

別地点

「ありがとうございました！」

ライトグリーンンの作業着を着た配達員は配達先の家を後にし相棒であるトラックに乗り込もうとした。

「うっうわあ!!!」その目の前に現れたのは、セパレーテドワードだった。

「お前の力を寄越せ！」そういうとセパレーテドはトラックに描かれた会社名などを奪った。

あまりの恐怖で思考回路が麻痺している彼はトラックに乗り込むとセパレーテドを

轢き殺そうとアクセルを踏む。

一気に時速40kmに達したトラックはセパレーテドに突っ込む。

「はあっ!!」

しかし、そのような攻撃はセパレーテドに当然効かず奴らの拳でトラックごと運転手は炎に包まれた。

「力が…溢れる…!」その時、セパレーテドの身体が光を放ち始めた。

それも銀色の…まるでワードの最終形態のように…

「この感覚……まさか。」

話を終えた俺達は一息入れようと試みたが、それは後へお預けとなってしまうた。ヒステラさんが外を見ると、そこには空を覆い尽くす巨大な眼があった。

「なんだ…あれは？」

「眼が空いた…：時間は無い、か。」東野さんの表情はより険しいものへと変わった。

「眼？」初めて聞いた言葉だ…少なくとも良いものではないと感じるが。

「世界眼。手短に言うなら、もうすぐ世界が滅ぶって指標だな。」

「ここは皆で、手分けしてセパレーターを探そう。」月河さんの提案に俺含めこの場の全員が賛成した。

そういう訳で俺達4人は手分けしてセパレーターを探す事となる。

公園、駅前、学校…様々な場所を探すが心配すら感じない。もしかしたら、もつと街の中心部の方に…

こうして街中を走っていると、1ヶ月前を思い出す。あの時も、こんな風に街の中心部へ走って向かって…言葉を助けて…

「まさか、同じ場所な訳ないよな…」

そう思ったが、俺はかつてあの竜を倒した大通りへと足を進めた。

「塾屋さん？…どうして、ハイハイ。」

そんな俺を、月河さんが止めた。

「いや、心当たりがあつて……そつちに行つてみようかと。」

「……分かつた、俺も行く。」

そう言つて俺達はその大通りへ向かうことにした。

しかし……さつきからずつと気になつていふことがあつた。

聞かずに済めばそれでいいが、協力する以上聞かざるを得ない……

「……少しいいか？」俺は聞く。

「何故……ここまで俺に力を貸してくれるんだ？」

「なんで言えば良いか……まあ、全ての世界を救う為、ワードの力を借りたいんだ。今までも、ここで言うならウォーズ、それとホロスとか……色んな世界で、そうして来た。」
統矢は、目的を大雑把に説明する。実際はもう少し細かいが。

「……そうか……康介さんや械都の力も……分かつた。俺も、それに力を貸そう。」俺はそう答えた。

「……ありがとう。さあ、行こう……！」そう言つて俺たちは走り出した。

大通り…

「ここが街の中心部…か。」デイレイズに変身している東野は、奇怪な雰囲気を感じる大通りに出ていた。

「貴様、さっきの男か…邪魔だ。」

そう言つて現れたのは白銀に輝くセパレーテドワード・天下無双だった。

「邪魔？…ああ。確かに邪魔だな、そこまで輝かれると目が痛む。」

デイレイズは、ライドブツカーからカードを取り出した。

「聞く所、どうやら魂^{ソウル}だけの存在らしいな。なら…コイツが一番適役だな。」

「KAMEN RIDE SOUL!」

デイレイズの身体は別のライダーへと変貌を遂げる。白き鎧を纏った戦士ソウルへと変身したデイレイズは、ライドブツカーのソードモードを奴の白銀の身体に叩きつける。

突発的な攻撃にセパレーテドは一瞬後退する。

「死神に連れてかれる先は、灼熱地獄……つてな。」

「KAMEN RIDE FIRE！」

白い装甲が燃え、新たなライダーの姿へと変える。非常にシンプルな見た目に炎が宿ったファイアに変身、右手に炎を纏わせた。

「…地獄に堕ちるのはお前らだ…！」セパレーテドは、槍を構えディレイズに攻撃を仕掛ける。

「はあっ!!!」

ディレイズが地面に拳を打ち付けると火柱が立ち上る。その火柱はセパレーテドの元に迫る様に次々と上がっていく。

ついにセパレーテドの元に火柱が立ち上がる。

「姿が変わった程度で、勝てるなんて思わない事だ。大体期待は外れるものだからな。」
白銀になったセパレーテドに対してディレイズは言った。

「それは此方も同じ！」

「何っ！」なんと火柱を掻き分けてセパレーテドが迫る。炎を宿した槍をディレイズに振り下ろす。

突然の衝撃にデイレイズはファイアの変身が解けデイレイズの姿に戻ってしまう。

「貴様に、我々を止める事はできない…」

デイレイズは体を起こそうとするが、痛みがそれを止める。

「何…案ずる事はない。我々があの邪神が創り上げた世界を破壊するだけだ。」

「そんな事、絶対にさせない!!」そこへ新たな人物が現れる。既に矛盾の形に変身したワードだった。その後ろにはベルトだけ装着し、リムールだったウオッチを握っている統矢の姿もある。

「…ワード…」デイレイズは顔を上げ声の主を確認した。

「来たな…邪神。今日ここで、お前の創り出した世界は終わりだ…」セパレーテドは憎しみと興奮が混ざる声で言う。

「…そんな日は来ない。それに、ワードへの侮辱を…許さない!」

ワードは矛を構えセパレーテドへ突撃する。

「さあ来い! 決着の時だ!」

セパレーテドもまた槍を構える。

2人の攻撃で空中に火花が舞い散る。その光景を統矢は見ていた。そして、ウオッチを強く握る。

「クソつ、俺も戦えれば……!!」

ワードは、矛を両手で持つと下から上へと振り上げた。セパレーテドの身体を切り裂き吹き飛ばす。

「その程度か!」セパレーテドは吹き飛ばされたのを逆に利用し槍の先を下に向けワードへ急転直下で切り裂く。

「ぐはっ!!!」ワードの身体は火の粉を散らし地面に倒れる。

「塾屋さん!!」彼の身体は一向に立ち上がる気配がない……

「ただ殺してもつまらない……先に力だけで奪ってやる。」

そう言うときセパレーテドはオグマの書を開いた。本が光り輝くと、ワードの『矛盾』の力を全て奪い取っていく。

核の力を失った彼は、変身前の状態に戻ってしまった。

「あっ……力が……」ゴンは、驚きとともに上半身を起き上がらせた。

「さあ……遂に我々が世界を破壊する時が来た……!」

セパレーテドワードは、本を高らかに掲げ納められている力を世界破壊の為に解き放とうとする。

「そんな事絶対にさせない!!!」ゴンは咄嗟に立ち上がると、セパレーテドの懐に潜り込み

必死に食らいついた。

「…邪魔だ!!」セパレーテドは右足で膝蹴りをし、左手で軽々と彼を放り投げた。

「ぐっ!!」

「興が冷めた…破壊する前に殺す!」セパレーテドは怒りを露わにしゴンへ迫る。

「……させるかっ!」そこへ倒れていたはずのデイレイズが割って入る。彼はライドブツカーで斬りつけゴンとセパレーテドの距離を離す。

その衝撃で、オグマの書は奴らの手から離れ地面に落ちる。

倒れたゴンの元へ統矢が敬語も忘れるほど慌てて駆け寄り身体を支える。

「……おい、大丈夫か!」

「なんとかか…」ゴンは立ち上がると、再びセパレーテドの方へ歩み始めた。

「変身できないのに、やめましようよ!」その彼を統矢は止めた。

「そんな事…言ってる場合じゃない!」ゴンは、統矢の方を向いた。

「…それに…俺の力は、ただの力なんかじゃない。ワードが…俺の為に受け継がせてくれた大切な力…それを奪われたままになんかささせたくない!」ゴンは統矢の目を見る。その気迫に統矢は一瞬見入ってしまった。

「受け継がれた者には…相応の責任がある筈だ…康介さんや、械都から受け取った力を

取り返さなくていいのか!」

その言葉に、統矢はとてつもない重みを感じた…そして、自身の甘さが打ち砕かれる音が同時に鳴り響く。

「そうだ…俺の力は、みんなが俺の為にくれた力…」

「貴様ら…死ぬがいい!!」

その時だった。セパレーテドは、デイレイズの攻撃が止んだ隙を見てゴンと統矢のいる方へ白銀の光弾を放った。

「危ない!!」

ゴンは咄嗟に統矢の前に出て彼を庇った。

「塾屋さん!!」ゴンは、後方に勢いよく吹き飛ばされ、地面に倒れた。

「……俺が何か出来れば、こんな事には……」その時、彼はふと目の前に落ちている本…オグマの書が目についた。

そして、何かを思い付いたのかその本の元へ走り、手にする。

「貴様…何をする気だ!!」それに気づいたセパレーテドは意識が統矢の方向を向く。しかし、デイレイズが邪魔をし本の元へ行けない。

「こうするんだよ!!」

統矢は本を開くと、その本を背表紙の部分から真つ二つに破り捨てた。事情が事情とはいえその姿を本好きに見られたら反感を買うことになるだろうが、そんなものはお構いなしで本を破る。

すると、その本のページが次々と空へと舞い上がる。それらが人一つ光に変わり、奪われた文字へと戻っていく。その中の一つが、リムールのウオッチに宿る。

リムールウオッチは力を取り戻し青い光を放つ。

「よくも……」セパレーテドはとてつもない怒りと憎しみを現す。

「そいつはこつちの台詞だ！よくも塾屋さんを……！」

「ちよつと、勝手に殺さないで……」そこへ後ろからゴンが声をかけた。てつきり死んだと思っていた統矢は驚きを口にする。

「い、生きてた……どうして……？」

「……一応、こう見えても『神』なんでね。ちよつと体が固いみたい。」

改めて、2人は横並びになる。そしてそれぞれの変身アイテムを手にする。

「それじゃ、行きましようか……塾屋さん！」

「……ゴンでいいよ。歳も一年差だし。」

「……え？あ、もつと年上かと……じゃあ、改めて……行こう、ゴン！」

「いつでも行けるさ、続矢！」

「変身!!」

「KAMEN RIDER REMEEL！」

「矛盾する運命…ワード、矛盾！」

2人は、それぞれリムールとワードへと変身を遂げる。

リムールは、右腕のホルダーを見た。そこにはウォーズとホロスのウォッチもあつた。

「よし、ちゃんと戻ってる……！」

その時だった。左腕に紫色に輝く何かが見える。それは、光が収まるとワードのウォッチへと変貌する。

セパレートと距離をとったディレイズの元にも、3枚のブランクのカードが現れる。それらもまたワードのカードへと変貌を遂げる。

「Word！」リムールは、左腕のワードウォッチを起動させベルトに装填する。そして、勢いよくベルトを回転させる。

「ARMOR TIME！」「核、読み取り！WORD！」

『矛盾』核を模した装甲が出現、それらが分離すると変身シークエンスを開始する。

矛の文字は分離し、右肩アーマーと右胸部、そしてワードの矛に近い槍に変形、盾の文字は左胸部と左腕を覆う盾へと変形、最後に現れたワードを模した仮面がリムールの頭部に装着、翠色で『ワード』と書かれた文字が装着される。

「仮面ライダーリムール！時の救済者にして、時空の在るべきを示す者！そして今は、言霊の統率者の力を受け、纏し瞬間！我が主に祝福の『言葉』を！」その時、どこから現れたのかヒステラがいつものようにリムールワードアーマー誕生を高らかに宣言する。

「……大分久しぶりじゃない？」

「不甲斐ないね、私としてはいつだってこれをやりたいんだけど……」

「……そりゃ、勘弁して欲しいけどな……」槍を構えたリムールはセパレートワードへと向かって走る。

「俺も……」

「ちよっと待て。少し耐えろ、すぐに済む。」リムールの後を追って攻撃しようとしたワードの後ろへディレイズが回り込み、ワードが3人描かれているカードを装填した。

「FINAL FORM RIDE」 「WWWWORD！」

「えっ！うわ身体が！」ディレイズがワードの背中に手をかけ、ワードの身体を真っ二つに分裂させる。

分裂したワードの身体は、赤紫で構成される矛の形と青紫で構成される盾の形へ

と変化した。

「えっ…体が…」盾盾の形に変化した自身の身体をゴンは見る。

「何が起こっておる…」その隣で、彼にとつてとても落ち着く聞き覚えのある声が鳴り響いた。

「…その声…ワード？」

「お主…ゴンか！」

矛盾の形には、なんと言操神ワード自体の意志が入っていた。

「なんで…ワードが？」

「…ワシにも分からぬ…じゃが、今は戦わねばならぬ様じやのう。」ワードは、セパレーテドと交戦するリムールを見た。

「…ああ、行こう！ワード！」ここ最近で一番生き生きとしているゴンと共にワードは戦場へと飛び込む。

「さて、俺も続くとしようか…！」「KAMEN RIDE WORD！」デイレイズもワードへと変身、4人のワードが同じ時間に並び立つと言う驚愕の瞬間が目の前に広がっている。

「…ワードが4人、粋な計らいだろ？」デイレイズはセパレーテドを見てあの人の台詞を真似て言う。

「うち2人は偽者じゃがな。」ワードはそう付け加えた。

「よし、みんな行こう！」

「貴様ら…全員地獄の底へ叩き落としてやる!!」セパレーテドワードは再び光弾を放つ。それらが地面に着弾、爆発が起こるが、4人は立ち止まる事なく前へ走る。

「はあつ!!」まずはデイレイズが矛を構え振り下ろす。

「でやあつ!」その次にリムールが槍でセパレーテドを貫く。

「やあつ!」「おりゃー!」後退したセパレーテドへ2人のワードがそれぞれストレートパンチを繰り出す。

「FINAL ATTACK RIDE. W—W—WORD!」

「パラドシカルランサー!」

デイレイズとワードは、それぞれ矛でセパレーテドを切り裂く。

「FINISH TIME!」 「書き込み! TIME PROTECT!」

「パラドシカルキック!」

そしてリムールとゴンがセパレーテドに蹴りを叩き込む。

しかし、いくら特効を持つウオッチであるとはいえ、進化したことで耐久力も上がったセパレーテドに並の攻撃は効かない…

「…それなら、コイツでどうだ！」リムールは、デイレイズのウオッチを取り出した。そして、ワードウオッチをデイレイズウオッチのスロットに装填、それをベルトのスロットに装填する。

「FINAL FORM TIME! W—W—WORD!」

リムールからワードアーマーが外れ、代わりにデイレイズアーマーが装着、更に素体の一部がワード烈火の方へと変化、胸部にはワード烈火の形と文字が現れ、頭部にはカードの様な顔面に烈火の形の頭部が描かれる。

「…ゴン、ワシらも行くぞ。お主が手にした最強の力を我に示すが良い。」
「ああ、見ててくれ。俺の変身を。」

そう言うと、ワードは1人になり、天下無双核を取り出した。そしてベルトに装着、白銀のワード、天下無双の形へと変身する。

「四字核、読み取り!」「天下御免、最強無双ワード!天下無双!」
そして虹色の翼が背中から生える。

「光に炎…：そういうえば、預かったままだったな…。」デイレイズは光に包まれ変貌したワードと炎の力を宿したリムールを見て何かを思い出したかの様に懐からあるものを取り出した。

「…リムール！」

「何？おつと…！これはフラッシュとファイアのウオッチ！」

デイレイズが投げ渡したのはリムールに渡しそびれていたフラッシュとファイアのウオッチだ。

「折角だ、使ってみろ。」

「分かった。」「RIDE DERIVATER！」「FLASH！」

リムールは右手に持った剣にフラッシュのウオッチを装填、そして剣に取り付けられた時計の針の様なパーツを3周させる。

「ALL RIDERS！」

「行くぞ！」リムールは白く輝く剣をセパレーテドに向かって振り下ろす！

「F—F—F—FLASH！」「CROSSING TIME PROTECT！」

白い光の斬撃は、セパレーテドの身体に強い衝撃を与える。セパレーテドは、その攻撃に地に膝をついた。

「今だ！」ワードの声に合わせてリムールも飛び上がる。

「超・必殺、書き込み!」 「グレートライダーキック!」

「W—W—W—WORD! FINAL ATTACK TIME PROTECT
!」

「はあっ!!!」

烈火の如く力強いリムールのキックと光の様な速度で突撃するワードのキックが重なり合い、セパレーテドワードへと激突する。

「ぐっ……こんな所で!!!」

ダブルライダーのキックでセパレーテドワードは、その姿が消え大爆発を起こす。その傍らで、性悪党の怨霊から出たワードのウオッチが粉々に砕ける。

「どうやら……またお別れの時間が来た様じゃな。」

ワードは、ゴンにそう言う。 gon はそれを聞いて無意識のうちに悲しみを浮かべていた。

「何、前も言った様に、ワシは常にお主と共にある……これからの事、頼んだぞ。」

gon はその言葉を聞き、顔を上げた。

「……ああ、任せてくれ。ワード。」 そう言うと、gon の身体からワードの意識は消えてし

まう…

「さて…審判の時だ…」

デイレイズは、魂だけの状態になっている性悪党に向かって言う。

「待って、少し話をしたい。」

そのデイレイズをワードは止めた。

「……そうか。あまり長話はできないが。」

「…ありがとう。」ワードはそう言うと性悪党の前に立った。

「貴様が審判を下すのか？」

「…それよりも、聞きたい事がある。」ワードは、彼らに向かって口を開く。

「…」

「…まだ、俺たちが要らないと言い続けるのか？もう、全ては終わったんじゃないのか

？」

「…それはないな。性悪党は、人間に感情がある限り何度でも現れるさ…」性悪党は、

ワードの脳裏に刻み込むかの様な声で言い放つ。

「なら、俺はそれを必ず打ち破る。何度現れようが…絶対に。人間を舐めるな。」

「…神に、人間のことをどうこう言われる筋合いはない…」そう言う性と性悪党の魂は、塵となり無くなってしまった。

「…審判を下す前に消えたか…。」デイレイズは変身を解いた。それに合わせてワードとリムールも変身を解く。

「…今回の件、ありがとう。助かったよ。」ゴンは、笑顔で統矢に言った。

「こつちこそ、ウオツチを貸してくれてありがとう…必ず返すよ。」統矢もゴンに笑顔で答える。

「それじゃあ、また会う日まで…」ゴンは、そう言うのと銀色のカーテンを潜り元の世界へ帰る統矢達を見送った。

「…ゴン…ようやく見つけた。」

その時、彼を呼ぶ女性の声が聞こえた。

「…言葉…こんな所でどうしたの？」

「別に…町中から文字が消えたり、空に眼が現れたりしてる異変が起きてるからゴンに知らせないとして彷徨いてたけど、解決しちゃったから…ねえ、なんかいいことでもあったの？」言葉はゴンの顔を見て聞いた。

「…久々に、会ったよ。ワードに…」

「この世界は…まだレッスンのしがいがありそうだ…」

ネイムは、3つのウオッチを持って彼らの様子を見ていた…

「FORCE…」「FUTURE…」「RANBU…」